

有価証券報告書

(金融商品取引法第24条第1項に基づく報告書)

事業年度	自	2018年4月1日
(第149期)	至	2019年3月31日



大阪府中央区北浜四丁目5番33号 (住友ビル)

(E01333)

目次

	頁
表紙	
第一部 企業情報	1
第1 企業の概況	1
1. 主要な経営指標等の推移	1
2. 沿革	3
3. 事業の内容	4
4. 関係会社の状況	6
5. 従業員の状況	8
第2 事業の状況	9
1. 経営方針、経営環境及び対処すべき課題等	9
2. 事業等のリスク	11
3. 経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析	13
4. 経営上の重要な契約等	15
5. 研究開発活動	15
第3 設備の状況	19
1. 設備投資等の概要	19
2. 主要な設備の状況	19
3. 設備の新設、除却等の計画	22
第4 提出会社の状況	23
1. 株式等の状況	23
(1) 株式の総数等	23
(2) 新株予約権等の状況	23
(3) 行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等	23
(4) 発行済株式総数、資本金等の推移	23
(5) 所有者別状況	23
(6) 大株主の状況	24
(7) 議決権の状況	24
2. 自己株式の取得等の状況	25
3. 配当政策	26
4. コーポレート・ガバナンスの状況等	26
(1) コーポレート・ガバナンスの概要	26
(2) 役員の状況	30
(3) 監査の状況	35
(4) 役員の報酬等	37
(5) 株式の保有状況	39
第5 経理の状況	45
1. 連結財務諸表等	46
(1) 連結財務諸表	46
(2) その他	86
2. 財務諸表等	87
(1) 財務諸表	87
(2) 主な資産及び負債の内容	96
(3) その他	96
第6 提出会社の株式事務の概要	97
第7 提出会社の参考情報	98
1. 提出会社の親会社等の情報	98
2. その他の参考情報	98
第二部 提出会社の保証会社等の情報	99

[監査報告書]

【表紙】

【提出書類】	有価証券報告書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条第1項
【提出先】	関東財務局長
【提出日】	2019年6月21日
【事業年度】	第149期（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）
【会社名】	住友電気工業株式会社
【英訳名】	Sumitomo Electric Industries, Ltd.
【代表者の役職氏名】	社長 井上 治
【本店の所在の場所】	大阪市中央区北浜四丁目5番33号（住友ビル）
【電話番号】	大阪 06(6220)大代表4141
【事務連絡者氏名】	経理部長 樋爪 謙一郎
【最寄りの連絡場所】	東京都港区元赤坂一丁目3番13号
【電話番号】	東京 03(6406)大代表2600
【事務連絡者氏名】	財務部主幹 吉原 義博
【縦覧に供する場所】	株式会社東京証券取引所 （東京都中央区日本橋兜町2番1号） 株式会社名古屋証券取引所 （名古屋市中区栄三丁目8番20号） 証券会員制法人福岡証券取引所 （福岡市中央区天神二丁目14番2号）

第一部【企業情報】

第1【企業の概況】

1【主要な経営指標等の推移】

(1) 連結経営指標等

回次		第145期	第146期	第147期	第148期	第149期
決算年月		2015年3月	2016年3月	2017年3月	2018年3月	2019年3月
売上高	百万円	2,822,811	2,933,089	2,814,483	3,082,247	3,177,985
経常利益	百万円	160,597	165,658	173,872	195,010	188,649
親会社株主に帰属する 当期純利益	百万円	119,771	91,001	107,562	120,328	118,063
包括利益	百万円	286,376	△40,951	120,152	180,803	85,433
純資産額	百万円	1,646,913	1,561,289	1,628,615	1,764,086	1,776,313
総資産額	百万円	2,925,785	2,742,848	2,907,292	2,999,903	3,053,263
1株当たり純資産額	円	1,804.34	1,715.28	1,815.32	1,973.95	1,988.58
1株当たり当期純利益	円	151.00	114.73	137.61	154.29	151.38
潜在株式調整後1株当たり 当期純利益	円	—	—	137.24	152.88	—
自己資本比率	%	48.9	49.6	48.7	51.3	50.8
自己資本利益率	%	9.1	6.5	7.7	8.1	7.6
株価収益率	倍	10.4	11.9	13.4	10.5	9.7
営業活動による キャッシュ・フロー	百万円	153,509	240,779	209,233	239,573	177,656
投資活動による キャッシュ・フロー	百万円	△86,888	△117,387	△194,829	△174,265	△184,601
財務活動による キャッシュ・フロー	百万円	△64,037	△115,912	△4,763	△66,795	△4,324
現金及び現金同等物の期末残高	百万円	177,107	174,055	180,002	180,108	168,873
従業員数 (外、平均臨時雇用人員)	人 (人)	240,798 (34,553)	240,865 (39,124)	248,330 (38,168)	255,133 (38,136)	272,796 (40,134)

(注) 1. 売上高には、消費税等は含んでおりません。

2. 第145期、第146期及び第149期の潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。

3. 「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」（企業会計基準第28号 平成30年2月16日）等を第149期連結会計年度の期首から適用しており、第148期連結会計年度に係る主要な経営指標等については、当該会計基準等を遡って適用した後の指標等となっております。

(2) 提出会社の経営指標等

回次		第145期	第146期	第147期	第148期	第149期
決算年月		2015年3月	2016年3月	2017年3月	2018年3月	2019年3月
売上高	百万円	910,657	928,976	901,892	1,084,165	1,142,621
経常利益	百万円	34,288	44,392	49,367	65,523	65,847
当期純利益	百万円	105,911	22,390	42,737	61,357	71,147
資本金	百万円	99,737	99,737	99,737	99,737	99,737
発行済株式総数	千株	793,941	793,941	793,941	793,941	793,941
純資産額	百万円	722,905	707,504	707,105	739,165	783,028
総資産額	百万円	1,180,671	1,220,413	1,237,498	1,288,934	1,351,028
1株当たり純資産額	円	911.22	891.81	906.44	947.54	1,003.77
1株当たり配当額 (内、1株当たり中間配当額)	円 (円)	30.00 (12.00)	35.00 (17.00)	40.00 (17.00)	46.00 (21.00)	48.00 (24.00)
1株当たり当期純利益	円	133.50	28.22	54.66	78.65	91.20
潜在株式調整後1株当たり 当期純利益	円	—	—	—	—	—
自己資本比率	%	61.2	58.0	57.1	57.3	58.0
自己資本利益率	%	15.7	3.1	6.0	8.5	9.3
株価収益率	倍	11.8	48.5	33.8	20.6	16.1
配当性向	%	22.5	124.0	73.2	58.5	52.6
従業員数 (外、平均臨時雇用人員)	人 (人)	4,722 (733)	4,984 (766)	5,034 (959)	5,100 (943)	5,377 (1,039)
株主総利回り (比較指標：配当込みTOPIX)	% %	104.5 (130.7)	93.4 (116.5)	127.0 (133.7)	115.5 (154.9)	108.6 (147.1)
最高株価	円	1,641.5	2,037.0	1,949.0	1,992.5	1,864.0
最低株価	円	1,291.0	1,250.0	1,201.0	1,547.5	1,348.5

(注) 1. 売上高には、消費税等は含んでおりません。

2. 潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。

3. 第147期の1株当たり配当額40円には、創業120周年記念配当2円を含んでおります。

4. 「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」(企業会計基準第28号 平成30年2月16日)等を第149期事業年度の期首から適用しており、第148期事業年度に係る主要な経営指標等については、当該会計基準等を遡って適用した後の指標等となっております。

5. 最高株価及び最低株価は東京証券取引所(市場第一部)におけるものであります。

2 【沿革】

年月	経歴
1897年 4月	住友本店が日本製銅株式会社を買収し、直営事業として大阪市北区安治川上通に住友伸銅場を開設、銅電線などの製造を開始（創業）
1899年 3月	大阪製銅株式会社を買収し、住友伸銅場中之島分工場を開設
1900年 4月	被覆線の製造開始
1909年10月	通信用ケーブル試作開始
1911年 8月	住友伸銅場より電線製造業を分離し、住友電線製造所を置く。ほぼ、あらゆる電線ケーブルの製造能力を持つにいたる（創立）
1916年 4月	エナメル線の製造開始
12月	現在の大阪製作所の地に新工場を建て移転完了
1920年12月	住友総本店から分離独立、株式会社住友電線製造所に改組（設立）（資本金1千万円）
1931年 6月	イゲタロイ（超硬工具）の製造開始
10月	東海電線株式会社（現・住友電装株式会社）に資本参加
1932年 9月	耐酸ニッケル線など特殊金属線の製造開始
1937年10月	東海護謨工業株式会社（現・住友理工株式会社）に資本参加
1939年11月	社名を住友電気工業株式会社（現社名）と改称
1941年 3月	伊丹市に伊丹製作所を開設
1943年 1月	防振ゴム、続いて燃料タンクの製造開始
1946年 1月	東京支店（現本社（東京））、名古屋出張所（現中部支社）及び福岡出張所（現九州支店）を開設
1948年11月	焼結製品の販売開始
1949年 5月	株式を東京・大阪・名古屋の各証券取引所に上場
6月	架空送電線工事部門に進出
1953年 4月	太陽電設工業株式会社（現・住友電設株式会社）に資本参加
1961年 5月	横浜市に横浜製作所を開設
1962年 2月	電子線照射イラックスチューブの製造開始
7月	本社を大阪市此花区より現在地（大阪市中央区）に移転
1963年 6月	ディスクブレーキの製造開始
1964年 8月	電子線照射電線の製造開始
1968年 7月	交通管制システムを事業化
1970年 6月	化合物半導体の製造開始
1974年12月	光ファイバ・ケーブルの製造開始
1975年 5月	営業年度を年1回に変更（毎年4月1日～翌年3月31日）
1976年12月	ナイジェリア大規模通信網工事を受注
1979年 4月	当社初の時価発行増資を実施
1981年 3月	光LANシステム初納入
1985年 4月	合成ダイヤモンド単結晶製品の事業化
1986年 6月	米国にスミトモ エレクトリック ワイヤリング システムズ インク設立
1994年 2月	米国にスミトモ エレクトリック ライトウェーブ コープ設立
1999年 7月	住友電工ブレーキシステムズ株式会社にブレーキ・ABS事業を営業譲渡
7月	高分子機能製品事業を分社化した住友電工ファインポリマー株式会社が営業開始
2001年10月	株式会社ジェイ・パワーシステムズに高压電力用電線事業を営業譲渡
2002年 8月	ADSL事業等を会社分割して新設した住友電工ネットワークス株式会社が営業開始
10月	特殊金属線事業を会社分割して新設した住友電工スチールワイヤー株式会社が営業開始
10月	巻線事業を会社分割し、住友電工ウインテック株式会社に承継
2003年 1月	建設・電販向け電線事業を営業譲渡した住電日立ケーブル株式会社が営業開始
4月	粉末合金・ダイヤ製品事業を会社分割して新設した住友電工ハードメタル株式会社が営業開始
6月	執行役員制導入
7月	事業本部制導入
2006年 3月	ドイツの自動車用ワイヤーハーネスメーカー（現・スミトモ エレクトリック ボードネッツェ エスエー）を買収
2007年 8月	住友電装株式会社を完全子会社化
12月	日新電機株式会社を連結子会社化
2009年 8月	光・電子デバイス事業の組織再編により住友電工デバイス・イノベーション株式会社が発足
2014年 4月	株式会社ジェイ・パワーシステムズを完全子会社化
11月	住電日立ケーブル株式会社を連結子会社化

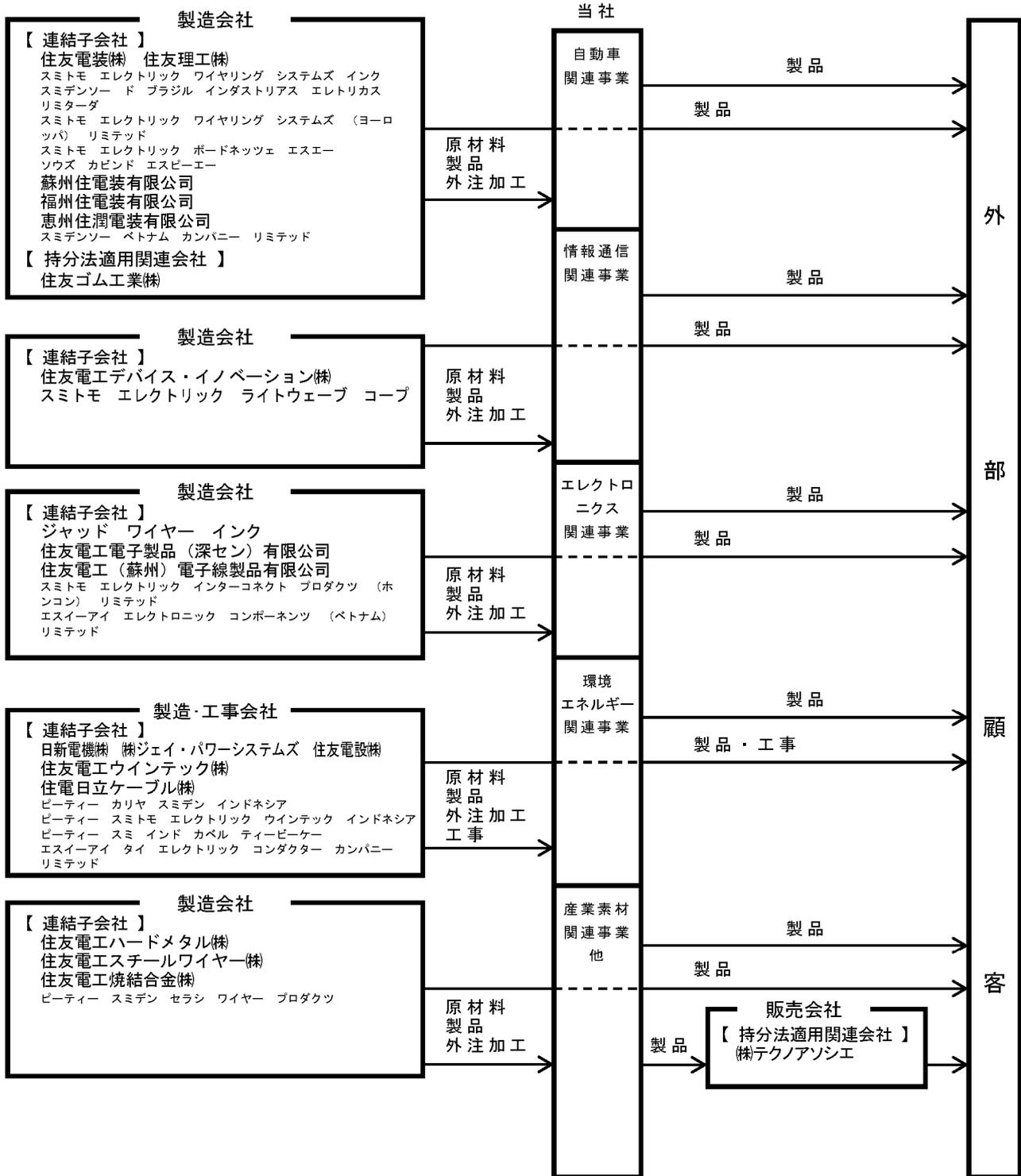
3【事業の内容】

当社グループ（当社及び当社の関係会社）においては、自動車関連事業、情報通信関連事業、エレクトロニクス関連事業、環境エネルギー関連事業、産業素材関連事業他の5部門にわたって、製品の開発、製造、販売、サービス等の事業活動を展開しております。

各事業における、当社及び当社の関係会社の位置付け等は次のとおりであります。

区分	主要製品	主要な関係会社
自動車 関連事業	ワイヤーハーネス、 防振ゴム・自動車用ホース、 自動車電装部品、交通制御な どのネットワーク・システム 製品	当社 〔国内連結子会社〕 住友電装(株)、住友理工(株) 〔在外連結子会社〕 スミトモ エレクトリック ワイヤリング システムズ インク、 スミデンソー ド ブラジル インダストリアス エレト리카ス リ ミターダ、 スミトモ エレクトリック ワイヤリング システムズ (ヨーロッ パ) リミテッド、 スミトモ エレクトリック ボードネツェ エスエー、 ソウズ カビンド エスピーエー、 蘇州住電装有限公司、 福州住電装有限公司、 惠州住潤電装有限公司、 スミデンソー ベトナム カンパニー リミテッド 〔国内持分法適用関連会社〕 住友ゴム工業(株)
情報通信 関連事業	光ファイバ・ケーブル、 通信用ケーブル・機器、 光融着接続機、 光データリンク・無線通信用 デバイスなどの光・電子デバ イス製品、化合物半導体、 アクセス系ネットワーク機器 (GE-PON・セットトッ プボックス・CATV関連製 品等)	当社 〔国内連結子会社〕 住友電工デバイス・イノベーション(株) 〔在外連結子会社〕 スミトモ エレクトリック ライトウェーブ コープ
エレクトロニ クス関連事業	電子ワイヤー、 電子線照射製品、 フレキシブルプリント回路、 ふっ素樹脂製品	当社 〔在外連結子会社〕 ジャッド ワイヤー インク、 住友電工電子製品(深セン)有限公司、 住友電工(蘇州)電子線製品有限公司、 スミトモ エレクトリック インターコネクト プロダクツ (ホン コン) リミテッド、 エスイーアイ エレクトロニック コンポーネンツ (ベトナム) リミテッド
環境 エネルギー 関連事業	導電製品、送配電用電線・ ケーブル・機器、巻線、 空気ばね、受変電設備・制御 システムなどの電力機器、 ビーム・真空応用装置、 電気・電力工事及びエンジニ アリング、金属多孔体、 電子部品金属材料	当社 〔国内連結子会社〕 日新電機(株)、(株)ジェイ・パワーシステムズ、住友電設(株)、 住友電工ウインテック(株)、住電日立ケーブル(株) 〔在外連結子会社〕 ピーティー カリヤ スミデン インドネシア、 ピーティー スミトモ エレクトリック ウインテック インドネシ ア、 ピーティー スミ インド ケーブル ティービーケー、 エスイーアイ タイ エレクトリック コンダクター カンパニー リミテッド
産業素材 関連事業他	PC鋼材、精密ばね用鋼線、 スチールコード、超硬工具、 ダイヤモンド・CBN工具、 レーザ用光学部品、 焼結部品、半導体放熱基板	当社 〔国内連結子会社〕 住友電工ハードメタル(株)、住友電工スチールワイヤー(株)、 住友電工焼結合金(株) 〔在外連結子会社〕 ピーティー スミデン セラシ ワイヤー プロダクツ 〔国内持分法適用関連会社〕 (株)テクノアソシエ

主要な関係会社を事業系統図に示すと以下のとおりであります。



4 【関係会社の状況】

名称	住所	資本金 (百万円)	主要な事業の 内容	議決権に 対する 所有割合 (%)	関係内容				
					役員の兼任等			資金援助	営業上の取引他
					当社 役員 (人)	当社 職員 (人)	転籍 (人)		
(連結子会社) 住友電装(株) ※1	三重県四日市 市	20,042	自動車関連事 業	100.0	1	2	2	債務保証	芯線の販売先並びに自動車 用ワイヤーハーネスの仕入 先
住友電工デバイス・イ ノベーション(株) ※1	横浜市栄区	15,000	情報通信関連 事業	100.0	0	8	1	貸付金	半導体デバイスの仕入先
住友理工(株) ※1、※2	愛知県小牧市	12,145	自動車関連事 業	50.7 (1.0)	0	0	4	なし	なし
日新電機(株) ※1、※2	京都市右京区	10,253	環境エネルギ ー関連事業	51.5	0	0	5	なし	電線ケーブルの販売先
住友電工 ハードメタル(株) ※1	兵庫県伊丹市	10,000	産業素材関連 事業他	100.0	1	6	0	貸付金	超硬合金素材の販売先並び に超硬工具及びダイヤ・C B N工具等の仕入先
(株)ジェイ・パワーシ ステムズ	茨城県日立市	8,000	環境エネルギ ー関連事業	100.0	0	5	1	貸付金、 債務保証	芯線の販売先並びに電力ケ ーブル及び付属品等の仕入 先
住友電設(株) ※2	大阪市西区	6,440	環境エネルギ ー関連事業	50.3 (0.1)	0	0	5	なし	送配電線・通信システム工 事の外注先
住友電工 スチールワイヤー(株)	兵庫県伊丹市	4,500	産業素材関連 事業他	100.0	0	4	1	貸付金	ワイヤーロッドの販売先並 びに特殊金属線の仕入先
住友電工焼結合金(株)	岡山県高梁市	3,004	産業素材関連 事業他	100.0	1	8	0	貸付金	焼結部品の仕入先
住友電工 ウインテック(株)	滋賀県甲賀市	3,000	環境エネルギ ー関連事業	100.0	0	6	1	貸付金	ワイヤーロッドの販売先並 びに巻線の仕入先
住電日立ケーブル(株)	大阪市北区	400	環境エネルギ ー関連事業	56.0	0	6	3	なし	電線ケーブルの販売先
スミトモ エレクトリ ック ワイヤリング システムズ インク ※1	米国ケンタッ キー州	千米ドル 243,920	自動車関連事 業	100.0 (40.0)	1	3	0	なし	自動車用ワイヤーハーネ ス・ワイヤーハーネス用部 品の販売先
スミトモ エレクトリ ック ライトウェーブ コープ	米国ノースカ ロライナ州	千米ドル 54,780	情報通信関連 事業	100.0 (100.0)	1	5	0	なし	光ファイバ・ケーブル、融 着機、コネクタ製品等の販 売先
ジャッド ワイヤ ーインク	米国マサチュ ーセッツ州	千米ドル 40,000	エレクトロニ クス関連事業	100.0 (100.0)	0	3	0	なし	電子ワイヤーの販売先
スミデンソー ド ブ ラジル インダストリ アス エレトリカス リミターダ	ブラジル ミナスジェラ イス州	千ブラジ ルリアル 162,921	自動車関連事 業	100.0 (60.7)	0	0	0	債務保証	なし
スミトモ エレクトリ ック ワイヤリング システムズ (ヨーロ ッパ) リミテッド ※1	英国スタフォ ードシャー州	千ユーロ 84,024	自動車関連事 業	100.0 (40.0)	0	3	0	債務保証	自動車用ワイヤーハーネス 用部品の販売先
スミトモ エレクトリ ック ボードネット ェエスエー	ドイツ ウォルフスブ ルグ市	千ユーロ 2,046	自動車関連事 業	100.0 (40.0)	0	1	0	債務保証	なし
ソウズ カビンド エ スピーエー	イタリア コレーニョ市	千ユーロ 30,000	自動車関連事 業	100.0 (40.0)	0	3	0	債務保証	なし
ピーティー スミデン セラシ ワイヤ ープロダクツ	インドネシア ボゴール市	千米ドル 51,000	産業素材関連 事業他	100.0 (0.0)	0	4	0	債務保証	精密ばね用鋼線等の仕入先
ピーティー カリヤ スミデン インドネシ ア	インドネシア タンゲラン市	千米ドル 32,109	環境エネルギ ー関連事業	100.0 (4.5)	0	5	0	債務保証	銅カソードの販売先
ピーティー スミトモ エレクトリック ウ インテック インドネシ ア	インドネシア プカシ県	千米ドル 35,000	環境エネルギ ー関連事業	100.0	0	1	1	債務保証	巻線の仕入先

名 称	住 所	資本金 (百万円)	主要な事業の 内容	議決権に 対する 所有割合 (%)	関 係 内 容				
					役員の兼任等			資金援助	営業上の取引他
					当社 役員 (人)	当社 職員 (人)	転籍 (人)		
ピーティー スミ イ ンド カベル ティー ピーケー	インドネシア タンゲラン市	千米ドル 52,431	環境エネルギ ー関連事業	92.4 (0.2)	0	5	0	債務保証	電線ケーブルの仕入先
エスイーアイ タイ エレクトリック コン ダクター カンパニー リミテッド	タイ ラヨー県	百万バーツ 2,010	環境エネルギ ー関連事業	100.0 (0.0)	0	7	0	債務保証	銅カソード・アルミ地金の 販売先並びにアルミ製品の 仕入先
住友電工電子製品(深 セン)有限公司	中国広東省 深セン市	千人民元 623,483	エレクトロニ クス関連事業	100.0 (100.0)	0	6	0	債務保証	なし
蘇州住電装有限公司	中国江蘇省 蘇州市	千人民元 347,585	自動車関連事 業	100.0 (100.0)	0	0	0	なし	なし
住友電工(蘇州)電子 線製品有限公司	中国江蘇省 蘇州市	千人民元 338,299	エレクトロニ クス関連事業	100.0	0	5	0	なし	電子ワイヤー半製品等の販 売先並びに仕入先
福州住電装有限公司	中国福建省 福州市	千人民元 275,236	自動車関連事 業	100.0 (100.0)	0	0	1	なし	なし
惠州住潤電装有限公司	中国広東省 惠州市	千人民元 288,020	自動車関連事 業	87.9 (87.9)	0	0	1	なし	なし
スミトモ エレクトリ ック インターコネク ト プロダクツ(ホン コン)リミテッド	中国(香港)	千香港ドル 648,000	エレクトロニ クス関連事業	100.0	0	6	0	債務保証	電子ワイヤー、フレキシブ ルプリント回路の仕入先
エスイーアイ エレク トロニック コンポー ネツ(ベトナム)リ ミテッド ※1	ベトナム ハノイ市	千米ドル 100,000	エレクトロニ クス関連事業	100.0	0	4	0	貸付金、 債務保証	フレキシブルプリント回路 半製品等の販売先並びに仕 入先
スミデンソー ベトナ ム カンパニー リミ テッド	ベトナム ハイドゥン省	千米ドル 35,000	自動車関連事 業	100.0 (100.0)	0	0	0	債務保証	なし
その他 326社									
(持分法適用関連会社) 住友ゴム工業㈱ ※2	神戸市中央区	42,658	自動車関連事 業	29.0 (0.1)	1	0	1	なし	スチールコードの販売先
㈱テクノアソシエ ※2	大阪市西区	5,001	産業素材関連 事業他	36.3 (0.0)	0	0	5	なし	超硬合金・化合物半導体等 の販売先
その他 29社									

- (注) 1. 「主要な事業の内容」欄には、セグメントの名称を記載しております。
2. 「議決権に対する所有割合」欄の()は、間接所有割合を内数で示しております。
3. ※1：特定子会社に該当しております。
4. ※2：有価証券報告書を提出しております。

5 【従業員の状況】

(1) 連結会社の状況

(2019年3月31日現在)

セグメントの名称	従業員数 (人)	
自動車関連事業	214,345	(33,054)
情報通信関連事業	6,771	(1,169)
エレクトロニクス関連事業	21,995	(1,167)
環境エネルギー関連事業	14,059	(2,570)
産業素材関連事業他	15,626	(2,174)
合計	272,796	(40,134)

(注) 従業員数は就業人員数（当社グループからグループ外への出向者を除き、グループ外から当社グループへの出向者を含む。）であり、臨時従業員数（パートタイマー、アルバイト、定年退職後再雇用者、人材会社からの派遣社員を含む。）は、年間の平均人員を（ ）内に外数で記載しております。

(2) 提出会社の状況

(2019年3月31日現在)

従業員数 (人)	平均年齢 (歳)	平均勤続年数 (年)	平均年間給与 (円)
5,377 (1,039)	41.8	16.9	8,080,000

セグメントの名称	従業員数 (人)	
自動車関連事業	418	(65)
情報通信関連事業	1,300	(335)
エレクトロニクス関連事業	297	(31)
環境エネルギー関連事業	1,177	(249)
産業素材関連事業他	2,185	(359)
合計	5,377	(1,039)

(注) 1. 従業員数は就業人員数（当社から社外への出向者を除き、社外から当社への出向者を含む。）であり、臨時従業員数（パートタイマー、アルバイト、定年退職後再雇用者、人材会社からの派遣社員を含む。）は、年間の平均人員を（ ）内に外数で記載しております。

2. 平均年間給与は、賞与及び基準外賃金を含んでおります。

(3) 労働組合の状況

当社の労働組合は、上部団体である全日本電線関連産業労働組合連合会（日本労働組合総連合会加盟）に所属しております。なお、当社における労使関係は安定しており、特記すべき事項はありません。

第2【事業の状況】

1【経営方針、経営環境及び対処すべき課題等】

文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において当社グループが判断したものであります。

(1) 会社の経営の基本方針

当社グループは「住友事業精神」と「住友電工グループ経営理念」のもと、公正な事業活動を通して社会に貢献していくことを不変の基本方針としております。こうした基本理念を堅持しつつ持続的に成長し、中長期的に企業価値を向上させていくためには、適正なコーポレート・ガバナンスに基づき経営の透明性、公正性を確保するとともに、イノベーションをキーワードに、保有する経営資源を最大限活用して成長戦略を果敢に立案・実行していくことが重要であり、以下の基本的な考え方に沿って、コーポレート・ガバナンスの一層の充実に取り組んでまいります。

- (i) 株主がその権利を適切に行使することができる環境の整備を行う。
- (ii) 株主を含むステークホルダーの利益を考慮し、それらステークホルダーと適切に協働する。
- (iii) 会社情報を適切に開示し、透明性を確保する。
- (iv) 取締役会の戦略等基本方針決定機能及び経営の監督機能を重視し、それらの機能の実効性が確保される体制の整備及び取締役会の運営に注力する。業務執行については、権限及び責任を明確化し、事業環境の変化に応じた機動的な業務執行体制を確立することを目的として、執行役員制並びに事業本部制を導入している。また、経営の健全性確保の観点から、監査役監査の強化を図ることとし、独立社外監査役と常勤の監査役が内部監査部門や会計監査人と連携して適法かつ適正な経営が行われるよう監視する体制としている。
- (v) 持続的な成長と中長期的な企業価値の向上に資するよう、合理的な範囲で、株主との建設的な対話を行う。

【住友事業精神】

住友の事業は、今から約400年前、銅と銀を吹き分ける「南蛮吹き」と呼ばれる技術による銅精錬事業に遡り、その後別子銅山における鉱山業を中心に発展を遂げてきました。こうした事業の隆盛を支えてきた精神的基盤が「住友事業精神」であり、住友家初代・住友政友が後生に遺した商いの心得『文殊院旨意書』を礎とし、住友の先人により何代にもわたって深化・発展を遂げてきたものです。その要諦は、1891年に改訂された住友家法の中で「営業の要旨」として端的に示されています。

営業の要旨 ※ここでは、住友合資会社社則(1928年制定)より抜粋しました。

第一条 我が住友の営業は、信用を重んじ確実を旨とし、以てその鞏固隆盛を期すべし

第二条 我が住友の営業は、時勢の変遷、理財の得失を計り、弛張興廢することあるべしと雖も、苟も浮利に趨り、軽進すべからず

この他にも、『技術の重視』、『人材の尊重』、『企画の遠大性』、『自利利他、公私一如』といった精神が今に至るまで脈々と受け継がれています。

【住友電工グループ経営理念】 ※創業100周年を機に明文化(1997年6月)

住友電工グループは、

- ・顧客の要望に応え、最も優れた製品・サービスを提供します。
- ・技術を創造し、変革を生み出し、絶えざる成長に努めます。
- ・社会的責任を自覚し、よりよい社会、環境づくりに貢献します。
- ・高い企業倫理を保持し、常に信頼される会社を目指します。
- ・自己実現を可能にする、生き生きとした企業風土を育みます。

(2) 会社の対処すべき課題

今後の経済情勢は、世界経済は米国の通商政策の影響や中国経済の先行き、欧州やアジアでの政治的・地政学的リスクなど予断を許さない状況であり、それらの動向によっては企業を取り巻く環境が一段と厳しくなることが懸念されます。日本経済につきましても、海外経済の鈍化に伴い輸出や生産の低迷が長期化する懸念があり、引き続き先行き不透明な展開が続くものと予想されます。

このような情勢のもと、当社グループは、住友事業精神と住友電工グループ経営理念を事業活動の根底に置き、S(安全)、E(環境)、Q(品質)、C(コスト)、D(物流・納期)、D(研究開発)のさらなる進化と深化に努めてまいります。また、「グロリアス エクセレント カンパニー」を目指して、“総力を結集し、つなぐ、つたえる技術で、よりよい社会の実現に貢献する”というコンセプトのもと2018年度よりスタートした中期経営計画「22VISION」の実現に向け、各事業においては次の施策を進めてまいります。

まず、自動車関連事業では、ワイヤーハーネスをコアとするメガサプライヤーを目指し、高電圧ハーネスや電池周辺部品などの電動車両向け各種製品、軽量で耐久性に優れた高強度アルミハーネス、自動車の電子制御に対応した電装部品や高速通信用コネクタなどの開発・拡販を加速してまいります。また、海外系顧客の一層のシェア拡大に努めるとともに、電動車両や自動運転、コネクテッドカーの普及を見据えてさらなる事業拡大に取り組んでまいります。住友理工(株)では、自動車用防振ゴム・ホースなどにおいて、グローバルでの拡販を図りつつ早期の収益力回復に取り組むとともに、次世代自動車に向けた新製品開発へも取り組んでまいります。

情報通信関連事業では、通信データ量増大や第5世代移動通信システムの整備に伴う光ファイバや次世代光・電子デバイスの需要増への対応に注力するとともに、競争力強化のための一層のコスト低減に取り組んでまいります。また、海底ケーブル用極低損失光ファイバ、超多心光ケーブルや光配線製品などのデータセンター関連製品の拡販、アクセス系ネットワーク機器や新4K放送対応映像配信機器の新製品拡販にも注力し、収益力のさらなる向上を図ってまいります。

エレクトロニクス関連事業では、携帯機器用FPC（フレキシブルプリント回路）について、徹底した生産性改善によるコスト低減に加えグローバルな拡販に引き続き注力してまいります。また、高精細、薄型化、高耐熱等の顧客ニーズに応える新製品の確実な立ち上げや車載市場などへの事業拡大にも取り組んでまいります。さらに、電子ワイヤー、照射チューブについては、高機能配線・高機能部材の多様なニーズを捕捉し引き続きグローバルな拡販を進めてまいります。

環境エネルギー関連事業では、電力ケーブルの製造体制強化により一段の生産能力確保やコスト低減を進め、海外の新規大型電力ケーブルプロジェクトや国内の設備更新需要を確実に捕捉して事業拡大に取り組んでまいります。また、このほかにも電動車両向けモーター用平角巻線の拡販を進め、さらに日新電機(株)や住友電設(株)を含めたグループの総合力を活かして、再生可能エネルギーやスマートグリッド関連事業の拡大にも注力してまいります。

産業素材関連事業では、超硬工具においては、主力の自動車分野に加え、産業機械・建設機械向けやエレクトロニクス分野へのグローバルな拡販を進め、さらには航空機や医療分野での難削材加工用の新製品開発と拡販を強化してまいります。また、焼結部品において各製造拠点での供給能力とコスト競争力の一層の強化に取り組むほか、PC鋼材やばね用鋼線についても、引き続き生産体制の強化と拡販に注力してまいります。

研究開発では、オリジナリティがありかつ収益性に優れた新事業・新製品の創出に努めてまいります。具体的には、マグネシウム合金製品、水処理製品、超電導製品、SiC（シリコンカーバイド）パワー半導体デバイスや次世代通信ネットワーク用製品などの事業化に注力するほか、新しい電力・エネルギーインフラの構築に向けてレドックスフロー電池、集光型太陽光発電装置、エネルギーマネジメントシステム関連製品の早期事業化に向けた開発と国内外での実証試験を加速してまいります。また、将来に向けては、自動運転や電動車両に対応する車載機器開発体制の強化や新たな機能を発現する新材料の探索など、社会ニーズを踏まえ当社グループの特徴を活かした新製品の開発に注力するとともに、製造現場でのAI*やIoT*活用による生産革新にも積極的に取り組んでまいります。

* AI : Artificial Intelligence (人工知能) の略。

* IoT : Internet of Thingsの略。パソコンやスマートフォンなどの情報通信機器に限らず、あらゆる「モノ」がインターネット等のネットワークに接続されること。

最後に、法令遵守や企業倫理の維持は、当社経営の根幹をなすものであり、企業として存続・発展するための絶対的な基盤と考えております。なかでも競争法コンプライアンスは最重要の課題と位置付け、今後とも、住友事業精神の「萬事入精(ばんじにつせい)」「信用確実」「不趨浮利(ふすうふり)」*という理念のもと、社会から信頼される公正な企業活動の実践に真摯に取り組んでまいります。また、住友事業精神と住友電工グループ経営理念の基本的な価値軸は、2015年に国連サミットで採択されたSDGs (Sustainable Development Goals: 持続可能な開発目標) にも相通ずるものであると考えており、当社グループは、「安全安心な社会、環境に優しい社会、快適で成長力のある社会」の実現に向け、総力を結集し、さまざまな価値の提供を目指してまいります。

* 萬事入精: まず一人の人間として、何事にも誠心誠意を尽くすべきとの考え。

信用確実: 何よりも信用を重んじること。

不趨浮利: 常に公共の利益との一致を求め、一時的な目先の利益、不当な利益の追求を厳に戒めること。

2【事業等のリスク】

当社グループの経営成績及び財政状態等に影響を及ぼす可能性のある主要なリスクには、以下のようなものがあります。文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において当社グループが判断したものであります。

(政治経済情勢・需要変動等に係るリスク)

当社グループは、自動車関連、情報通信関連、エレクトロニクス関連、環境エネルギー関連及び産業素材関連他の各需要分野にわたって事業を展開しております。また、地域的には、日本の他、米州、アジア、欧州、北アフリカ等に進出しております。このため、当社グループの経営成績、財政状態ならびにキャッシュ・フローは、特定の取引先・製品・技術等に過度に依存する状況にはありませんが、各分野や各地域に特有の需要変動や、技術革新に起因する製品ライフサイクル短期化、また、各国の政治情勢などの影響を受けることがあります。なお、当社グループ製品の多くは、最終消費財の部品や社会インフラ用の素材・システムなどであるため、景気循環の影響を受けることはもとより、顧客の購買政策の変化や設備投資に対する政策的判断などの影響を受けることがあります。

(法律・規制の変更等によるリスク)

当社グループは、日本以外にも世界各地に製造子会社、販売子会社等を有しております。各市場において、下記のように完全には回避することの困難なリスクが存在しており、当社グループの業績及び財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

- ・輸入規制や関税率の引き上げ等により、売上が減少、もしくは原価率が悪化するリスク
- ・各国の国内及び国際間取引に係る租税制度の変更等により税金コストが上昇するリスク
- ・外貨規制、ハイパーインフレーション、テロ、新型インフルエンザ等の感染症等により投資資金の回収が不可能となるリスク

(訴訟、規制当局による措置その他の法的手続に係るリスク)

当社グループは、事業を遂行するうえで、訴訟、規制当局による措置その他の法的手続に関するリスクを有しております。訴訟、規制当局による措置その他の法的手続により、当社グループに対して損害賠償請求や規制当局による金銭的な賦課を課され、又は事業の遂行に関する制約が加えられる可能性があり、かかる訴訟、規制当局による措置その他の法的手段は、当社グループの事業、業績及び財政状態に悪影響を及ぼす可能性があります。

なお、自動車関連事業分野の競争法違反行為について、一部の自動車メーカーと損害賠償に関する交渉を行っております。

(災害等のリスク)

当社グループは、阪神・淡路大震災や東日本大震災により被害を受けた経験を踏まえ、地震等の防災対策を実施しております。当社グループの拠点の一部は、南海トラフ地震や首都直下地震の想定被災地域あるいは沿岸地域等に存在していることもあり、大規模な地震が発生した場合には津波や液状化等による重大な被害を受ける可能性があります。また、気候変動の影響も含め、近年多発する大型台風などの風水害が今後も発生するおそれがあり、当社グループの生産活動をはじめとする事業活動全般に影響を及ぼす可能性があります。さらに、グローバルな事業展開を拡大していることから、各国・各地域において地震や風水害等の直接的な被害を受ける可能性があることに加え、顧客の被災や物流網の寸断、電力不足等により生産活動が計画通り進まない可能性があります。

(産業事故等のリスク)

当社グループは、各製造拠点において火災・爆発等の産業事故や環境汚染等の公害事故の発生防止にはできる限りの努力を実施しておりますが、完全な防止は困難であります。当該事故が当社グループの業務及び地域社会に大きな影響を及ぼした場合、これに伴い生ずる社会的信用の失墜、補償等を含む事故対応費用、生産活動の停止による機会損失及び顧客に対する補償等により、当社グループの業績及び財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

(金利の変動によるリスク)

当社グループは、資金需要、金融市場環境及び調達手段のバランスを考慮し資金調達を実施しております。当社グループでは、設備投資のための長期安定的な資金を必要とするため、長期固定金利の長期借入や社債発行による調達を中心となっております。そのため、金利の短期的な変動による影響は比較的受けにくくなっておりますが、金利が中長期的に上昇した場合は、長期借入等による資金調達コストを上昇させ、当社グループの業績及び財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

(為替レートの変動によるリスク)

当社グループは、在外連結子会社及び在外持分法適用関連会社の個別財務諸表を主に現地通貨ベースで作成しており、連結財務諸表の作成時に円換算しております。従って、現地通貨ベースでの業績に大きな変動がない場合でも、円換算時の米国ドル、ユーロ等の為替レート変動が業績及び財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

また、当社グループは世界各地で製造・販売活動を展開しております(当連結会計年度における海外売上高比率58.5%)。為替予約取引等の手段により主要通貨の短期的な為替変動による影響を最小限にとどめるようにしておりますが、中長期にわたる大幅な為替変動は、当社グループの業績及び財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

(原材料等の調達に係るリスク)

当社グループは、電線・ケーブルなど銅を主たる原材料とした製品を多数有しております。このうち主要な製品の販売価格については、ロンドン金属取引所の市況価格を反映した銅建値に基づいて決定するという商慣習が普及しており市況価格変動リスクを回避しております。しかし一部の製品についてはこのような価格決定方法を採用していないため、急激な市況価格の上昇は、当社グループの業績及び財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

その他の非鉄金属、鉄鋼、石油化学製品類等の原材料や副資材の調達についても、当社グループでの共同購買など有利購買活動を強化しておりますが、急激な市況価格の上昇が当社グループの業績及び財政状態に影響を及ぼす可能性があります。さらに、原材料等の在庫について、市場価格の急落が、当社グループの業績及び財務状態に影響を及ぼす可能性があります。また希少金属については、産地や供給者が限定されていること等により必要量の調達が困難となる可能性があります。さらに、他の原材料や副資材についても、供給者の倒産、自然災害、戦争、テロ、ストライキ、交通機能の障害等により、必要量の調達が困難となる可能性があります。

(保有有価証券の時価の下落によるリスク)

当社グループは、取引先との長期的・安定的な関係の構築・強化や、事業・技術提携の円滑化を主たる目的として、関係取引先等の株式を保有しております。売買目的の株式は保有していないため、株式市況の変動が経営に直接与えるリスクは比較的小さいと考えられますが、大幅な株式市況の悪化は自己資本比率を低下させる可能性があります。

(退職給付債務に係るリスク)

当社グループは、従業員の退職給付債務及び費用について、割引率等数理計算上で設定される前提条件や年金資産の長期期待運用収益率に基づき算出しております。実際の結果が前提条件と異なる場合、又は前提条件が変更された場合、具体的には、株式や債券等の価格下落に伴う年金資産の時価減少や、長期金利の低下に伴う割引率の引き下げなどにより、当社グループの業績及び財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

(知的財産に係るリスク)

当社グループは、特許権、意匠権、その他の知的財産権の取得により自社技術の保護を図ると共に、他社の知的財産権に対しても細心の注意を払っております。しかし、製品の構造・製造技術の多様化や、海外での事業活動の拡大、それに伴う流通経路の複雑化等により、当社グループの製品が意図せず他社の知的財産権を侵害した場合、販売中止、設計変更等の処置をとらざるを得ない可能性があります。また、各国の法制度や執行状況の相違により、他社が当社グループの知的財産権を侵害しても常に必要な保護が得られるとは限らず、当社グループの製品が十分な市場を確保できない可能性があります。

(情報の流出によるリスク)

当社グループは、事業遂行に関連して多くの個人情報や機密情報を有しております。

これらの情報の秘密保持については、最大限の対策を講じておりますが、予期せぬ事態により、情報が外部に流出する可能性は皆無ではありません。このような事態が生じた場合、当社グループのイメージの低下、損害賠償や規制当局による金銭的な賦課の発生などにより、当社グループの業績及び財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

(製品およびサービスの欠陥によるリスク)

当社グループは、所定の品質基準に基づき、製品およびサービスの品質保持に万全の注意を払っておりますが、予期せぬ事態により、大規模なリコールや製造物責任賠償につながるような品質問題が発生する可能性は皆無ではありません。このような事態が生じた場合、当社グループの業績及び財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

3【経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

当連結会計年度における当社グループ（当社、連結子会社及び持分法適用会社）の財政状態、経営成績及びキャッシュ・フロー（以下、「経営成績等」という。）の状況の概要並びに経営者の視点による当社グループの経営成績等の状況に関する認識及び分析・検討内容は次のとおりであります。

なお、文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において判断したものであり、その達成を保証するものではありません。

また、「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」（企業会計基準第28号 平成30年2月16日）等を当連結会計年度の期首から適用しており、前連結会計年度の数値は当該会計基準等を遡って適用した後の数値となっております。

(1) 重要な会計方針及び見積り

当社グループの連結財務諸表は、わが国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に基づき作成されております。また、連結財務諸表を作成する際には、当連結会計年度末日時点の資産・負債及び当連結会計年度の収益・費用を認識・測定するため、合理的な見積り及び仮定を使用する必要があります。当社グループが採用している会計方針のうち重要なものについては、「第5 経理の状況」の「連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項」及び「重要な会計方針」に記載しております。

（注）本報告書の「第2 事業の状況」から「第5 経理の状況」までの金額には、特に記載のない限り消費税及び地方消費税は含まれておりません。

(2) 経営成績

① 経営成績

当連結会計年度の日本経済は、良好な雇用環境や設備投資を中心とした内需の下支えにより前半は底堅く推移したものの、後半は中国や欧州経済の減速から輸出や生産が弱含む展開となりました。世界経済につきましても、中国での米中貿易摩擦や自国経済の先行き不透明感から消費や投資を控える動きが他国経済へも影響を与え、徐々に減速傾向が強まる展開となりました。

当社グループを取り巻く事業環境につきましては、上期は概ね堅調に推移したものの、2018年後半から中国や欧州における自動車生産の減少が顕著となり、スマートフォンの世界的販売不振や超硬工具の一部市場での需要減退もあり次第に厳しさが増す状況となりました。このような環境のもと、当連結会計年度の連結決算は、売上高は3,177,985百万円（前連結会計年度3,082,247百万円、3.1%増）と前連結会計年度比で増収を確保いたしました。利益面では、グローバルでのコスト低減を推進したものの、将来に向けた研究開発費の増加に加えて、自動車事業における価格低下や米中間追加関税などのコスト上昇要因により、営業利益は166,260百万円（前連結会計年度173,139百万円、4.0%減）と前連結会計年度に比べ減益、営業利益率は5.2%（前連結会計年度5.6%、0.4ポイント低下）となりました。営業外収益は、受取配当金の増加などにより2,156百万円増の45,275百万円、営業外費用は、支払利息の増加などにより1,638百万円増の22,886百万円となり、経常利益は188,649百万円（前連結会計年度195,010百万円、3.3%減）と前連結会計年度に比べ減益となりました。特別利益では退職給付信託返還益8,905百万円を計上しました。特別損失では、固定資産除却損3,094百万円、減損損失10,715百万円に加え、事業構造改善費用2,357百万円を計上し、合計では16,166百万円となりました。この結果、税金等調整前当期純利益は181,388百万円となりました。ここから法人税等51,181百万円及び非支配株主に帰属する当期純利益12,144百万円を差し引いた結果、親会社株主に帰属する当期純利益は118,063百万円（前連結会計年度120,328百万円、1.9%減）と前連結会計年度に比べ減益となりました。

② 生産、受注及び販売の実績

当社及び連結子会社の生産・販売品目は広範囲かつ多種多様であり、同種の製品であっても、その容量、構造、形式等は必ずしも一様ではなく、また受注生産形態をとらない製品も多く、セグメントごとに生産規模及び受注規模を金額あるいは数量で示すことはしていません。

このため生産、受注及び販売の状況については、「(5) セグメントごとの財政状態及び経営成績の状況に関する認識及び分析・検討内容」に関連付けて示しております。

(3) 財政状態

当連結会計年度末の資産合計は、退職給付信託の一部返還などにより退職給付に係る資産が減少した一方、たな卸資産の増加や設備投資による有形固定資産の増加により、前連結会計年度末に比べ53,360百万円増加し、3,053,263百万円となりました。

当連結会計年度末の負債合計は、主に借入金の増加により、前連結会計年度末に比べ41,133百万円増加し、1,276,950百万円となりました。

当連結会計年度末の純資産合計は、配当金の支払や退職給付に係る調整累計額の減少などがあった一方、親会社株主に帰属する当期純利益の計上により、前連結会計年度末に比べ12,227百万円増加し1,776,313百万円となりました。自己資本比率は50.8%と、前連結会計年度末対比0.5ポイント低下しております。

(4) キャッシュ・フロー

① キャッシュ・フロー

まず、営業活動によるキャッシュ・フローで177,656百万円の資金を獲得（前連結会計年度比61,917百万円の収入減少）しました。これは、税金等調整前当期純利益181,388百万円と減価償却費148,916百万円との合計、すなわち事業の生み出したキャッシュ・フローが330,304百万円あり、これに運転資本の増減などを差し引いた結果であります。

投資活動によるキャッシュ・フローでは、184,601百万円の資金を使用（前連結会計年度比10,336百万円の支出増加）しました。これは、設備投資に伴う有形固定資産の取得による支出178,046百万円などがあったことによるものであります。

なお、営業活動によるキャッシュ・フローから投資活動によるキャッシュ・フローを差し引いたフリー・キャッシュ・フローは、6,945百万円のマイナス（前連結会計年度は65,308百万円のプラス）となりました。

財務活動によるキャッシュ・フローでは、4,324百万円の資金の減少（前連結会計年度は66,795百万円の資金の減少）となりました。これは、借入金の増加額から、配当金の支払を差し引いたことなどによるものであります。

以上により、当連結会計年度末における現金及び現金同等物は、前連結会計年度末より11,235百万円（6.2%）減少し168,873百万円となりました。また、当連結会計年度末における有利子負債は、前連結会計年度末より48,178百万円増加し540,745百万円となり、有利子負債から現金及び現金同等物を差し引いたネット有利子負債は、59,413百万円増加し371,872百万円となりました。

② 資本の財源及び資金の流動性

当社グループの資金需要のうち主なものは、事業運営に必要な設備資金や運転資金であり、必要資金については自己資金の充当及び金融機関からの借入や社債発行等により調達する予定であります。

なお、当社は、当連結会計年度末現在において、日本格付研究所（JCR）より「AA（長期）、J-1+（短期）」、格付投資情報センター（R&I）より「AA-（長期）、a-1+（短期）」の格付を取得しております。また、金融機関とコミットメントライン契約を締結し、流動性リスクに備えております。

(5) セグメントごとの財政状態及び経営成績の状況に関する認識及び分析・検討内容

セグメントごとの財政状態及び経営成績の状況に関する認識及び分析・検討内容は次のとおりであります。

自動車関連事業は、ワイヤーハーネスや自動車電装部品、防振ゴムで積極的に拡販を進め、売上高は1,709,426百万円と77,474百万円（4.7%）の増収となりました。営業利益は価格低下や将来に向けた研究開発費の増加に加えて、米中間道加関税や防振ゴムにおける収益悪化もあり、84,669百万円と12,136百万円の減益となりました。売上高営業利益率は5.0%と0.9ポイント低下しました。

セグメント資産は、前連結会計年度末に比べ33,361百万円増加の1,387,003百万円となりました。

情報通信関連事業は、光ファイバ・ケーブルなどで拡販を進めたものの、一部事業を他セグメントへ移管した影響などにより、売上高は208,420百万円と11,906百万円（5.4%）の減収となりました。営業利益は生産性改善によるコスト低減を推進したものの競争環境激化による価格低下などにより16,398百万円と2,205百万円の減益となりました。売上高営業利益率は7.9%と0.5ポイント低下しました。

セグメント資産は、前連結会計年度末に比べ39,797百万円減少の243,908百万円となりました。

エレクトロニクス関連事業は、電子ワイヤーや照射チューブで拡販を進めたものの、携帯機器用FPCの減少などにより、売上高は228,933百万円と17,386百万円（7.1%）の減収となりました。営業利益は徹底したコスト低減の取組みなどによる採算改善により、7,016百万円と1,606百万円の増益となりました。売上高営業利益率は3.1%と0.9ポイント上昇しました。

セグメント資産は、前連結会計年度末に比べ477百万円減少の180,258百万円となりました。

環境エネルギー関連事業は、電力用電線ケーブルの拡販を進めたことに加え、住友電設(株)における電気工事案件の増加などもあり、売上高は759,786百万円と41,814百万円（5.8%）の増収となり、営業利益は30,062百万円と5,942百万円の増益となりました。売上高営業利益率は4.0%と0.6ポイント上昇しました。なお、工事・プラント受注高は287,059百万円と、前連結会計年度比18,670百万円（6.1%）減少しました。

セグメント資産は、前連結会計年度末に比べ45,589百万円増加の678,351百万円となりました。

産業素材関連事業他は、超硬工具を中心に拡販を進め、売上高は357,824百万円と14,698百万円（4.3%）の増収となり、営業利益は28,193百万円と22百万円の増益となりました。売上高営業利益率は7.9%と0.3ポイント低下しました。

セグメント資産は、前連結会計年度末に比べ29,384百万円増加の647,964百万円となりました。

なお、各セグメントの営業利益又は営業損失は、連結損益計算書の営業利益又は営業損失に対応しております。

(6) 経営者の視点による経営成績等の状況に関する認識及び分析・検討内容

当社グループの経営成績等に重要な影響を与える要因や当該要因への対応については、「第2 事業の状況

1. (2) 会社の対処すべき課題」をご参照下さい。

(7) 経営方針、経営戦略、経営上の目標の達成状況を判断するための客観的な指標等

当社グループは、「売上高」、「営業利益」、「投下資産営業利益率（ROIC）*」及び「自己資本当期純利益率（ROE）」を重要な指標として位置付けております。当連結会計年度における「売上高」は3,177,985百万円（前連結会計年度比95,738百万円増）、「営業利益」は166,260百万円（前連結会計年度比6,879百万円減）、「投下資産営業利益率（ROIC）」は7.3%（前連結会計年度比0.6ポイント低下）、「自己資本当期純利益率（ROE）」は7.6%（前連結会計年度比0.5ポイント低下）となりました。

なお、2018年5月25日公表の当社中期経営計画「22VISION」において、2020年度の間目標として、売上高3兆4,000億円、営業利益2,000億円、ROIC8.5%以上、ROE8%以上を、また、2022年度の最終目標として、売上高3兆6,000億円、営業利益2,300億円、ROIC9%以上、ROE8%以上をそれぞれ掲げております。これらの目標の達成に向け、収益基盤の強化及び資本効率の改善に取り組んでまいります。

* 投下資産営業利益率（ROIC）＝営業利益/（総資産－無利子負債）

4 【経営上の重要な契約等】

当連結会計年度において、経営上の重要な契約等の決定又は締結等はありません。

5 【研究開発活動】

当社及び連結子会社は経営理念にあります「技術を創造し、変革を生み出し、絶えざる成長に努めます」という理念の下、伸長分野に焦点を合わせ、オリジナリティがありかつ収益力のある新事業・新製品の開発に努めております。また、将来の技術ニーズを踏まえ、当社グループの次代の成長を担う研究テーマの発掘・育成にも積極的に取り組んでおります。

自動車関連事業、情報通信関連事業、エレクトロニクス関連事業、環境エネルギー関連事業、産業素材関連事業他の各事業分野における当連結会計年度の主な成果は以下のとおりであります。

また、当連結会計年度における研究開発費の総額は129,627百万円であります。

(1) 自動車関連事業

ワイヤーハーネス及び車載エレクトロニクス機器については、当社、住友電装㈱及び両社の共同出資による㈱オートネットワーク技術研究所を中心に、当社固有の材料技術・解析技術を活かして安全・快適・環境のニーズに対応した新製品の開発を行っております。

ワイヤーハーネスについては、次世代車載システムにパワー供給や情報伝送するためのハーネスアーキテクチャを構築し、システム設計を行うとともに、それに必要な要素技術の開発を進めております。また環境対応としてハーネスの軽量化に取り組んでおり、銅に比べ軽量のアルミを使ったワイヤーハーネスの量産、さらに高強度な電線の開発によるエンジンルーム等への適用範囲拡大を進めております。市場規模が拡大してきた電気自動車

（EV）・ハイブリッド自動車（HEV）用高圧ハーネスやコネクタ、バッテリー内配線モジュールの開発等にも取り組んでおります。車載エレクトロニクス機器に関しては、電源系、情報系のネットワーク化に対応すべく、電源制御機器や半導体デバイス、ボディ制御ECU、ゲートウェイなど、高速大容量通信に適用可能な次世代車載LAN（Local Area Network）製品の開発を進めております。さらに当社事業であるエネルギーや通信の社会基盤と車が繋がる変革に対応した新製品・新技術の開発にも取り組んでおります。

また、交通インフラ関連では、信号制御アルゴリズム、自動走行支援を含む高度走行支援システムの開発を行っております。

一方、新製品の開発効率化や高いレベルの品質確保に向け、要素技術開発や信頼性確保に不可欠な試験・分析・評価・解析技術の開発を推進しております。環境試験装置や分析装置等の評価設備の充実を図るとともに、CAE（Computer-Aided Engineering）技術を用いたシミュレーション技術も充実させております。

住友理工㈱では、自動車用品分野においては、「新規顧客開拓」を推進する体制を整え、「防振ゴム」「ホース」「ウレタン製品（制遮音品・内装品）」の既存3分野以外の自動車用新商品を開発・育成していくために、2016年8月に設置した「自動車新商品開発センター」において、体圧を検知する「スマートラバー（SR）センサ」を自動車のシートに埋め込み、呼吸や心拍などのバイタル情報によってドライバーの異変を検知、危険を回避する乗員状態検知機能の実用化に向けた開発や、電気自動車（EV）及び燃料電池自動車（FCV）向けの環境対応製品の技術開発などに引き続き取り組んでおります。

当事業に係る研究開発費は81,850百万円であります。

(2) 情報通信関連事業

光通信関連製品、通信用デバイス・化合物半導体材料、ネットワーク・システム製品などの分野において、総合的に研究開発を行っております。

光通信関連製品では、光ファイバ通信のさらなる高速化・長距離化に向けて、海底ケーブル用途の低損失低非線形光ファイバの研究開発を進め、生産性と品質のさらなる向上に取り組んでおります。

また、伝送容量の飛躍的な拡大に向けて、1本の光ファイバに複数本のコアを形成するマルチコア型光ファイバの研究開発を進めており、その実用化に不可欠な光増幅や接続技術の開発に取り組んでおります。

一方で、データセンタにおける情報機器内や情報機器間的高速大容量伝送に適した光配線製品を、従来のテレコム光通信で培った技術を活用して開発しております。特に、データセンタ内で使用される新型光コネクタや情報機器内の高密度光配線を実現する光部品などの製品開発と市場開拓を進めております。

そのほか、光ファイバ製造技術を活用した新材料の開発、光ファイバ実装・光学設計などの基盤技術を活用した新製品の開発を進めており、自動車、エレクトロニクス、ライフサイエンスなどの新たな分野への光技術の展開を図っております。

デバイス関連分野では、数十mの短距離伝送から数千kmの長距離伝送に対応するハイエンドの光通信用デバイス及び高効率・高出力特性を有する無線通信用電子デバイス技術を活かして、新製品をいち早く市場に投入することにより、事業拡大に努めております。

光通信用デバイス関連製品においては、イーサネットに代表される支線系用光トランシーバQSFP28を製品化するとともに、次世代の400Gbpsに対応した製品開発も進めております。数百kmから数千kmの幹線系対応として、コヒーレント伝送デバイスを開発しております。波長多重技術を用いることにより、数Tbps伝送を可能といたします。構成要素である波長可変半導体レーザ、光多値位相変調デバイス、ホモダイン光受信デバイスは、化合物半導体を用いた光集積回路技術を用いて製品化しており、更なる高機能化を目指した開発を進めております。それらを用いた光トランシーバの開発も進めております。ごく短距離の数十mの建屋内配線市場においても、100Gbps以上の大容量化が検討されており、キーデバイスとなる超低消費電力で光学実装性の優れた面発光型半導体レーザ（VCSEL）の高速化・多波長化を進めております。

無線通信デバイス関連製品では、世界に先駆けて高効率・高出力のGaN（窒化ガリウム）トランジスタを開発し、携帯基地局用途に製品化しました。本製品は低消費電力化やLTEへの移行など市場の要請に合致し、国内外で既存のSi（シリコン）トランジスタからGaNへの移行を牽引しました。現在は、LTEに次ぐ第5世代移動通信システム用途を見据え、更なる効率改善を図るとともに、微細化技術開発を推し進めることにより、20GHzから80GHz帯までを視野に入れた高周波／広帯域化を実現する計画としております。

さらに、レーダ用途を目指し10GHz帯での高出力・高効率化を図るとともに、20GHz帯、80GHz帯（ミリ波帯）でのMMIC（Microwave Monolithic IC）の開発を進めております。これらのデバイスは、小型化、経済化を目指した、当社独自の3次元配線技術及びWLCSP（Wafer Level Chip Size Package）の特徴を生かして、適用領域の拡大、新規分野への展開を進めてまいります。

これらデバイス技術の蓄積を活かし、ライフサイエンス、環境関連、インフラや工業プロセス管理など多様な分野への応用が期待できる高感度な近赤外イメージセンサ（ $\sim 3\mu\text{m}$ ）の実用化開発を行うとともに、さらなる用途拡大を目指し、中赤外領域（ $3\mu\text{m}$ ）の量子カスケードレーザ（QCL-LD）、超格子型イメージセンサの開発も進めております。

化合物半導体では、情報通信を支える高速通信用の光デバイスや無線通信用電子デバイスなどに用いられるインジウムリン及びガリウムヒ素系エピタキシャルウエハの新製品開発を進めております。また、青紫色レーザダイオード、白色LEDやパワーデバイス等に应用されるGaN基板の高品質化に加え、それら材料からデバイス技術の研究とその応用製品の開発も行っております。これまでの発光特性と高周波特性に着眼した材料開発に加え、さらに、全く新しい機能を有する光デバイスや電子デバイス用途の半導体材料の開発にも取り組んでおります。

ネットワーク・システム関連分野では、情報通信技術の革新により、安全・安心・快適かつ持続可能な社会の実現を目指した情報通信機器の研究開発を推進しております。

有線通信システム関連では、10G-EPON等、より高速化した次世代システムの研究開発に、無線通信システム関連では、携帯基地局向けの高周波増幅器モジュールの開発と第5世代移動通信システム向けの新製品の検討に取り組んでおります。

当事業に係る研究開発費は18,171百万円であります。

(3) エレクトロニクス関連事業

当社固有のマイクロ・ナノテクノロジーをベースに、FPC、電子ワイヤー製品、照射架橋製品、ふっ素樹脂製品など広範な新材料や部品の開発を行っております。FPCでは、携帯機器等向けの次世代微細回路製品や車載向けの高耐熱性電子回路製品、配線部材の開発に取り組んでおります。また、金属材料とセラミックスを複合化した電子デバイス用の低線膨張率の高放熱素材、独自の多孔化技術を適用した半導体用途向けの微細多孔質ふっ素樹脂膜の開発にも注力しております。

当事業に係る研究開発費は3,327百万円であります。

(4) 環境エネルギー関連事業

超電導や次世代送電網の分野でのネットワーク技術を活用したエネルギーソリューション事業など、新しい分野への進出を図るとともに、蓄電池などエネルギー分野での積極的な開発を推進しております。

超電導分野では、ビスマス系高温超電導線材の特性と量産性を大幅に向上させ、世界各国のケーブルプロジェクトやモータ、マグネット用などに線材を納入するなど、商業ベースでの販売本格化を図りつつあります。2015年4月、従来と比較し、約50～60%の引張り強度の向上を実現した400メガパスカル級の超高強度超電導線材の開発に成功し、販売を開始しました。これにより、核磁気共鳴(NMR)装置などの超高磁場マグネットへの適用範囲が広がりました。

産業応用では超電導マグネットシステムの開発を進めており、2014年7月に小型軽量冷凍機冷凍型マグネットシステム(±6T-Φ70mm)の販売を開始し、磁気特性評価装置への適用、さらに産業界での実用化、用途開拓に注力しているところであります。またビスマス系とは異なる次世代の超電導線材の研究も行っており、結晶配向した金属基板、中間層、超電導層からなる薄膜超電導線の特性向上にも注力しております。

次世代送電網の分野では、自然エネルギーの導入、省エネルギー、電力網の分散管理といった社会ニーズに対応すべく、2011年6月から、当社大阪製作所において、複数の自然エネルギー発電装置と小型レドックスフロー電池(蓄電池)等を直流電力ケーブルで連結したマイクロスマートグリッドシステムの実証試験を実施しております。2012年7月から、当社横浜製作所において、メガワット級の出力・容量を有するレドックスフロー電池と出力100kWの集光型太陽光発電(CPV)から成る大規模蓄電システムを開発し、実際の工場電力運用の中で、製品化のための実証運転を実施しております。2015年12月からは、北海道電力(株)南早来変電所において、大型蓄電システム(レドックスフロー電池、容量60MWh)の実証試験を実施しております(経済産業省の大型蓄電システム緊急実証事業に北海道電力(株)と共同で応募し、採択されたものであります)。2016年11月には、モロッコ王国において出力1MWのCPVプラント運用実証を開始しました。2017年3月には、米国カリフォルニア州において容量8MWhのレドックスフロー電池の実証運転を開始しました(これは当社がNEDOより実証委託を受け、実施するものであります)。また、電力需給逼迫時に電力使用量の調整を行うデマンドレスポンス自動化サーバ、宅内の電力使用量を最適化するシステム(HEMS)、電力線通信(PLC)によるメガソーラー監視システム、非常用の小型蓄電池やパワーコンディショナ等の開発にも注力しております。

蓄電池分野では、リチウムイオン電池やキャパシタなどの蓄電デバイスの高性能化に貢献する集電材料として、当社独自の熔融塩めっき技術を用いた金属多孔体「アルミセルメット」を開発しており、量産化に向けた生産技術開発に注力するとともに、ニーズの調査、顧客での評価を進めております。また、EVやHEV等の環境対応車の分野では、固有の高分子材料の合成技術を駆使し、駆動モータ等に適用する高性能平角巻線の開発にも取り組んでおり、モータの高性能化に貢献する薄肉皮膜で高度な電気絶縁性を発揮する次世代平角巻線の開発に注力しております。

住友電設(株)では、社会や顧客の多様化するニーズに応えるべく、太陽光発電システム用保守監視システム、監視・エネルギー管理等のビル・マネジメントシステム、工場向け統合セキュリティシステム、異常通報装置、超電導冷却システム、バーチャルパワープラント、クラウド活用など、最新技術、情報化技術を活用し、新技術、新工法、各種システムの開発に取り組んでおります。

日新電機(株)では、電力機器分野をはじめ、新エネルギー・環境分野及びライフサイクルエンジニアリング分野にかかわる技術開発・製品開発並びにソリューション開発に注力しております。電力機器分野においては、縮小化及び環境負荷の低減を狙いとした製品開発と共に、太陽光発電をはじめ、多様な分散型電源が導入拡大される社会を支えるための技術研究や製品開発、並びにシステム開発に取り組んでおります。ビーム・真空応用分野では、新たなコーティング薄膜や用途拡大に向けた研究開発、半導体製造用イオン注入装置や電子線照射装置などの次世代製品の研究開発に注力しております。また新エネルギー・環境分野においては、太陽光発電用パワーコンディショナの縮小化及び環境負荷の低減を狙いとした製品開発に注力すると共に、エネルギー管理システム(EMS)関連やIoT関連の技術研究を進めております。

当事業に係る研究開発費は17,881百万円であります。

(5) 産業素材関連事業他

超硬合金、ダイヤモンド、立方晶窒化硼素、コーティング薄膜、特殊鋼線、鉄系焼結部品やセラミックスに関する当社固有の材料技術とプロセス技術を駆使し、切削用工具や超精密加工用工具、各種自動車機構部品・機能部品、家電部品等の開発を進めております。

切削用工具開発においては、今後、市場が伸長していく航空機分野を重点ターゲットとし、計算科学を活用した硬質合金の開発、コーティング技術開発を進めております。また切削加工のIoT化に向け、切削工具に各種センサを内蔵させたスマートツールの開発にも取り組んでおります。

ダイヤモンドでは、超精密加工や高品位加工用工具素材として使用することを目的として、独自の原料技術や超高压技術で機械特性を向上させた単結晶ダイヤモンド素材や新材料の開発及び高硬度素材の精密加工技術の開発に注力しております。

焼結部品の関連では、粉末冶金技術の特長である均質性や組成自由度を活かした高強度焼結ギアの開発や、自動車の電動化ニーズに対応し磁気特性と造形性に優れた圧粉軟磁性材料を使った小型・高出力モータの開発に注力しております。

当事業に係る研究開発費は8,398百万円であります。

今後の成長を担う新規分野への挑戦として、水素エネルギー社会を実現する技術開発、ライフサイエンス分野では医療機器及び健康介護の分野向けの製品販売を開始しております。また次世代の電線や高強度材料として期待されるカーボンナノチューブの長尺化にも独自製法で取り組んでおります。新しい軽量材料として当社が世界で初めて開発に成功した、アルミ9%と亜鉛1%を添加したマグネシウム合金板材は、すでに大手のパソコンメーカーの筐体での採用が進んでいるほか、輸送機分野での需要拡大に向けた取り組みを進めております。

そのほか、当社の持つ材料技術を活かして、省エネルギー化のために期待されているSiCパワーデバイスを、結晶（基板）から、エピ、デバイスまで一貫して開発しております。2018年度は、前年度に販売開始しましたSiC高品質エピ基板の品質を更に改善し、無欠陥領域率を95%にまで高め、量産活動を推進しております。またデバイスについては、国立研究開発法人産業技術総合研究所（産総研）と協力してつくばに立ち上げた専用6インチ・ラインで製造したサンプルの販売を開始するとともに、産総研との共同研究で、世界最小のオン抵抗をもつトランジスタの開発にも成功し、今後の製品拡大に向けた活動を行っております。

以上の5分野他の研究開発及びグループ全体の生産、品質などを支える解析技術の分野では、ナノスケールの構造解析や、ポリマーの分子構造解析など、世界トップレベルの分析を行っております。これに加え、九州シンクロトロン光研究センターに当社グループ専用のビームラインを建設し、放射光施設を利用した世界トップ水準の原子スケール解析を実現し、製品開発の加速や知的財産権の強化などに利用しております。また、高速計算機を用いた高度な計算機シミュレーション技術の開発にも注力しており、生産プロセスの改善、革新と多くの製品の信頼性に直結する強度解析、電磁波解析など、各種新製品設計に活用することで他社との差別化につながる解析技術の開発を推進しております。その他、中国・蘇州市に中国解析センターを設置し、当社グループのグローバル展開を支えています。

生産技術分野では、IoTに向けた高度なサービス実現の基盤となる省電力無線センサ技術、AI・データ分析技術を用いた設備故障の予兆診断等の研究にも取り組んでおります。

当社は大阪製作所内の研究本館「Wind Lab」を研究・開発活動の中核とし、海外についても米国カリフォルニア州のICS（Innovation Core SEI）等を拠点として、さらなる事業の成長を目指します。また、グループ全体として、これらの研究開発成果を早期に確保すべく努めるとともに、企業の社会的責任を自覚し、省エネ、省資源、環境保護に関する研究にも注力してまいります。

第3【設備の状況】

1【設備投資等の概要】

当社及び連結子会社は、競争力強化のための効率化・合理化投資を行っております。当連結会計年度の設備投資（有形固定資産受入ベースの数値）は190,314百万円となりました。セグメント別の内訳は、次のとおりであります。

- (1) 自動車関連事業
ワイヤーハーネス、防振ゴムの増産及び合理化などで91,043百万円の設備投資を行いました。
- (2) 情報通信関連事業
光・電子デバイス製品、光ファイバ・ケーブルの増産及び合理化などで18,676百万円の設備投資を行いました。
- (3) エレクトロニクス関連事業
フレキシブルプリント回路、電子ワイヤーの増産及び合理化などで19,185百万円の設備投資を行いました。
- (4) 環境エネルギー関連事業
電力機器、巻線の増産及び合理化などで29,575百万円の設備投資を行いました。
- (5) 産業素材関連事業他
超硬工具、焼結部品の増産及び合理化などで31,835百万円の設備投資を行いました。

なお、当連結会計年度において、重要な設備の除却、売却はありません。

2【主要な設備の状況】

当社及び連結子会社における主要な設備は、以下のとおりであります。

(1) 提出会社

(2019年3月31日現在)

事業所名 (所在地)	セグメントの名称	設備の内容	帳簿価額（百万円）					従業員数 (人)
			建物及び 構築物	機械装置 及び運搬具	土地 (面積千㎡)	その他	合計	
大阪製作所 (大阪市此花区)	環境エネルギー関連事業 等	研究施設、導電製品等製造設 備	17,278	6,973	1,940 (317)	5,456	31,647	1,706
伊丹製作所 (兵庫県伊丹市)	産業素材関連事業他 等	研究施設、特殊金属線等製造 設備	14,606	6,340	539 (359)	3,087	24,572	716
横浜製作所 (横浜市栄区)	情報通信関連事業 等	研究施設、光ファイバ・ケー ブル等製造設備	10,630	5,690	2,342 (401)	2,830	21,492	929

(2) 国内子会社

(2019年3月31日現在)

会社名	事業所名 (所在地)	セグメントの 名称	設備の内容	帳簿価額 (百万円)					従業員数 (人)
				建物及び 構築物	機械装置 及び運搬具	土地 (面積千㎡)	その他	合計	
住友電装(株)	(三重県四日市 市他)	自動車関連事 業	ワイヤーハーネス、 ハーネス用部品製造 設備	10,951	18,315	5,572 (415)	10,046	44,884	6,412
住友理工(株)	本社及び小牧製 作所他 (愛知県小牧市 及び名古屋市 中村区他)	自動車関連事 業	防振ゴム、ホース、 樹脂製品等製造設備	14,648	13,452	7,081 (552)	4,091	39,272	3,033
住友電工デバイス・イ ノベーション(株)	(横浜市栄区他)	情報通信関連 事業	光・電子デバイス製 品等製造設備	6,831	10,241	3,026 (130)	5,731	25,829	1,256
日新電機(株)	本社工場他 (京都市右京区 他)	環境エネルギ ー関連事業	受変電・調相設備及 び制御システム等生 産設備	9,023	3,775	5,164 (373)	1,438	19,404	1,947
㈱アライドマテリアル	(東京都港区他)	産業素材関連 事業他	タンダステン・モリ ブデン製品等製造設 備	8,278	3,822	3,325 (218)	2,394	17,819	1,224
住友電工焼結合金(株)	(岡山県高梁市 他)	産業素材関連 事業他	焼結部品製造設備	4,535	9,711	813 (113)	1,896	16,955	874
住友電工ハードメタル (株)	(兵庫県伊丹市 他)	産業素材関連 事業他	超硬工具等製造設備	3,162	11,556	263 (24)	1,219	16,200	629
北海道住電精密(株)	(北海道空知郡)	産業素材関連 事業他	超硬工具等製造設備	4,082	6,983	289 (190)	2,941	14,295	550
住友電工ウインテック (株)	(滋賀県甲賀市 他)	環境エネルギ ー関連事業	巻線製造設備	4,182	5,679	1,411 (119)	1,680	12,952	405
㈱ジェイ・パワーシス テムズ	(茨城県日立市 他)	環境エネルギ ー関連事業	送配電用電線・ケー ブル製造設備	1,101	8,885	— (—)	927	10,913	471
住友電設(株)	大阪本社他 (大阪市西区他)	環境エネルギ ー関連事業	事務所・独身寮等	1,832	163	4,091 (41)	426	6,515	1,244

(3) 在外子会社

(2019年3月31日現在)

会社名	事業所名 (所在地)	セグメントの 名称	設備の内容	帳簿価額 (百万円)					従業員数 (人)
				建物及び 構築物	機械装置 及び運搬具	土地 (面積千㎡)	その他	合計	
スミトモ エレクトリック ワイヤリング システムズ インク	(米国ケンタッキー州他)	自動車関連事業	ワイヤーハーネス、ハーネス用部品製造設備	4,129	21,505	102 (281)	7,193	32,929	29,272
スミトモ エレクトリック ボードネットエスエー	(ドイツ ウォルフスブルグ市他)	自動車関連事業	ワイヤーハーネス製造設備	8,153	15,400	311 (179)	7,587	31,451	33,547
スミトモ エレクトリック ワイヤリング システムズ (ヨーロッパ) リミテッド	(英国スタッフォードシャー州他)	自動車関連事業	ワイヤーハーネス、ハーネス用部品製造設備	7,103	16,760	982 (367)	—	24,845	25,864
エスイーアイ エレクトロニック コンポーネツ (ベトナム) リミテッド	(ベトナム ハノイ市)	エレクトロニクス関連事業	フレキシブルプリント回路製造設備	6,173	13,969	— (—)	545	20,687	5,705
エスイーアイ タイ エレクトリック コンダクター カンパニー リミテッド	(タイ ラヨン県)	環境エネルギー関連事業	導電製品製造設備	4,521	8,629	623 (125)	723	14,496	420
スミリコー テネシー インク	(米国テネシー州)	自動車関連事業	防振ゴム、ホース製造設備	4,671	8,114	60 (444)	1,508	14,353	1,566
ソウズ コンポーネツ (タイランド) リミテッド	(タイ ラヨン県)	自動車関連事業	ハーネス用部品製造設備	1,759	7,216	222 (49)	1,242	10,439	1,220
住友電工電子製品 (深セン) 有限公司	(中国広東省深セン市)	エレクトロニクス関連事業	電子ワイヤー、フレキシブルプリント回路製造設備	870	6,812	— (—)	1,235	8,917	5,652

(注) 1. 帳簿価額のうち「その他」は、工具、器具及び備品、建設仮勘定及びリース資産の合計であります。

2. 土地の面積 () には貸与分を含んでおります。

3. 従業員数は就業人員数であります。

4. 各事業所の土地・建物及び構築物には、主に関係会社への貸与分や、各事業所周辺の厚生施設等を含んでおります。

5. 現在休止中の主要な設備はありません。

6. 主要な賃借及びリース設備はありません。

3 【設備の新設、除却等の計画】

(1) 新設・改修

当社及び連結子会社は、多種多様な事業を国内外で行っており、当連結会計年度末時点では設備の新設、改修の計画を個々のプロジェクトごとには決定しておりません。そのため、セグメントごとの数値を開示する方法によっております。

当連結会計年度後1年間の設備投資は、主として受注対応や合理化を目的として193,000百万円を計画しており、セグメントごとの内訳は以下のとおりであります。

セグメントの名称	2019年3月末 計画金額（百万円）	計画の主な内容
自動車関連事業	106,000	ワイヤーハーネス、防振ゴム製造設備投資 等
情報通信関連事業	17,000	光ファイバ・ケーブル、光・電子デバイス製品製造設備投資 等
エレクトロニクス 関連事業	16,000	電子ワイヤー、フレキシブルプリント回路、 電子線照射製品製造設備投資 等
環境エネルギー関連事業	28,000	導電製品、送配電用電線・ケーブル・機器、電力機器、 ビーム・真空応用装置、巻線製造設備投資 等
産業素材関連事業他	26,000	特殊金属線、超硬工具、ダイヤモンド・CBN工具、 焼結部品、タングステン・モリブデン金属製品製造設備投資 等
合計	193,000	

(注) 今後の所要資金については、自己資金及び借入等により充当する予定であります。

(2) 除・売却

経常的な設備更新のための除・売却を除き、重要な設備の除・売却計画はありません。

第4【提出会社の状況】

1【株式等の状況】

(1)【株式の総数等】

①【株式の総数】

種類	発行可能株式総数（株）
普通株式	3,000,000,000
計	3,000,000,000

②【発行済株式】

種類	事業年度末現在発行数(株) (2019年3月31日)	提出日現在発行数(株) (2019年6月21日)	上場金融商品取引所名又は登録 認可金融商品取引業協会名	内容
普通株式	793,940,571	793,940,571	東京証券取引所 名古屋証券取引所 ：以上各市場第一部 福岡証券取引所	単元株式数 100株
計	793,940,571	793,940,571	—	—

(2)【新株予約権等の状況】

①【ストックオプション制度の内容】

該当事項はありません。

②【ライツプランの内容】

該当事項はありません。

③【その他の新株予約権等の状況】

該当事項はありません。

(3)【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】

該当事項はありません。

(4)【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式 総数増減数 (千株)	発行済株式 総数残高 (千株)	資本金 増減額 (百万円)	資本金 残高 (百万円)	資本準備金 増減額 (百万円)	資本準備金 残高 (百万円)
2008年4月1日 ～2009年3月31日（注）	4,439	793,941	2,823	99,737	2,823	177,659

（注）新株予約権の行使（旧商法に基づき発行された転換社債の株式への転換）による増加であります。

(5)【所有者別状況】

(2019年3月31日現在)

区分	株式の状況（1単元の株式数100株）								単元未満 株式の状況 (株)
	政府及び 地方公共 団体	金融機関	金融商品 取引業者	その他の 法人	外国法人等		個人 その他	計	
					個人以外	個人			
株主数 (人)	—	192	49	624	705	53	55,237	56,860	—
所有株式数 (単元)	—	3,312,033	280,553	361,900	2,952,340	616	1,029,130	7,936,572	283,371
所有株式数 の割合 (%)	—	41.73	3.53	4.56	37.20	0.01	12.97	100.00	—

（注）自己株式13,857,589株は「個人その他」の欄に138,575単元、「単元未満株式の状況」の欄に89株含まれております。

(6) 【大株主の状況】

(2019年3月31日現在)

氏名又は名称	住所	所有株式数 (千株)	発行済株式(自己株式を除く。)の 総数に対する所有 株式数の割合 (%)
日本マスタートラスト 信託銀行株式会社(信託口)	東京都港区浜松町二丁目11番3号	60,928	7.81
日本トラスティ・サービス 信託銀行株式会社 (信託口)	東京都中央区晴海一丁目8番11号	58,646	7.52
日本生命保険相互会社	東京都千代田区丸の内一丁目6番6号	24,703	3.17
JP MORGAN CHASE BANK 385151	25 BANK STREET, CANARY WHARF, LONDON, E14 5JP, UNITED KINGDOM	16,231	2.08
NORTHERN TRUST CO. (AVFC) RE SILCHESTER INTERNATIONAL INVESTORS INTERNATIONAL VALUE EQUITY TRUST	50 BANK STREET CANARY WHARF LONDON E14 5NT, UK	15,929	2.04
住友生命保険相互会社	東京都中央区築地七丁目18番24号	15,556	1.99
日本トラスティ・サービス 信託銀行株式会社 (信託口5)	東京都中央区晴海一丁目8番11号	14,505	1.86
日本トラスティ・サービス 信託銀行株式会社 (信託口4)	東京都中央区晴海一丁目8番11号	11,948	1.53
STATE STREET BANK WEST CLIENT - TREATY 505234	1776 HERITAGE DRIVE, NORTH QUINCY, MA 02171, U. S. A.	11,700	1.50
STATE STREET BANK AND TRUST COMPANY 505225	P. O. BOX 351 BOSTON MASSACHUSETTS 02101 U. S. A.	11,101	1.42
計	—	241,252	30.93

(7) 【議決権の状況】

① 【発行済株式】

(2019年3月31日現在)

区分	株式数(株)	議決権の数(個)	内容
無議決権株式	—	—	—
議決権制限株式(自己株式等)	—	—	—
議決権制限株式(その他)	—	—	—
完全議決権株式(自己株式等)	普通株式 14,176,700	—	単元株式数100株
完全議決権株式(その他)	普通株式 779,480,500	7,794,805	同上
単元未満株式	普通株式 283,371	—	—
発行済株式総数	793,940,571	—	—
総株主の議決権	—	7,794,805	—

②【自己株式等】

(2019年3月31日現在)

所有者の氏名 又は名称	所有者の住所	自己名義 所有株式数(株)	他人名義 所有株式数(株)	所有株式数の 合計(株)	発行済株式総数に 対する所有株式数 の割合(%)
住友電気工業 株式会社	大阪市中央区北浜 四丁目5番33号	13,857,500	—	13,857,500	1.75
大電株式会社	福岡県久留米市南 二丁目15番1号	1,500	190,500	192,000	0.02
太陽機械商事 株式会社	大阪府東大阪市西石切町 五丁目6番38号	74,600	26,000	100,600	0.01
株式会社 テクノアソシエ	大阪市西区土佐堀 三丁目3番17号	26,600	—	26,600	0.00
計	—	13,960,200	216,500	14,176,700	1.79

(注) 各社の所有株式数のうち、他人名義株式については、住電共栄会（大阪市中央区北浜四丁目5番33号）名義になっております。

2【自己株式の取得等の状況】

【株式の種類等】 会社法第155条第7号に基づく普通株式の取得

(1)【株主総会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(2)【取締役会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(3)【株主総会決議又は取締役会決議に基づかないものの内容】

区分	株式数(株)	価額の総額(円)
当事業年度における取得自己株式	2,022	3,354,966
当期間における取得自己株式	297	441,926

(注) 当期間における取得自己株式には、2019年6月1日からこの有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取による株式は含まれておりません。

(4)【取得自己株式の処理状況及び保有状況】

区分	当事業年度		当期間	
	株式数 (株)	処分価額の総額 (円)	株式数 (株)	処分価額の総額 (円)
引き受ける者の募集を行った取得自己株式	—	—	—	—
消却の処分を行った取得自己株式	—	—	—	—
合併、株式交換、会社分割に係る移転を 行った取得自己株式	—	—	—	—
その他(単元未満株式買増請求による売渡)	66	97,419	—	—
保有自己株式数	13,857,589	—	13,857,886	—

(注) 1. 当期間における取得自己株式の処理状況には、2019年6月1日からこの有価証券報告書提出日までの単元未満株式の売渡による株式は含まれておりません。

2. 当期間における保有自己株式数には、2019年6月1日からこの有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取及び売渡による株式数の増減は含めておりません。

3 【配当政策】

当社は、株主各位への配当については、安定的な配当の維持を基本に、連結業績、配当性向、内部留保の水準等を総合的に判断し行っていきたいと考えており、また、中間配当と期末配当の年2回の剰余金の配当を行うことを基本方針としております。

これらの剰余金の配当の決定機関は、期末配当については株主総会、中間配当については取締役会であります。

当事業年度の期末配当金については、上記方針に基づき1株当たり24円とし、年間では48円といたしました。

内部留保については、将来の収益力維持向上を図るため、設備投資や研究開発などの先行投資に活用する所存であります。

当社は、取締役会の決議によって、毎年9月30日の最終の株主名簿に記録された株主又は登録株式質権者に対し、中間配当金として剰余金の配当を行うことができる旨を定款に定めております。

なお、当事業年度に係る剰余金の配当は以下のとおりであります。

決議年月日	配当金の総額 (百万円)	1株当たり配当額 (円)
2018年11月1日 取締役会	18,722	24.00
2019年6月21日 定時株主総会	18,722	24.00

4 【コーポレート・ガバナンスの状況等】

(1) 【コーポレート・ガバナンスの概要】

① コーポレート・ガバナンスに関する基本的な考え方

企業統治の体制につきましては、「第2 事業の状況 1. (1) 会社の経営の基本方針」に記載のとおりであります。

② 企業統治の体制の概要及び当該体制を採用する理由

当社では、経営の健全性確保において監査役及び監査役会が一定の役割を果たして来たことから、監査役会設置会社制度を選択しており、取締役会、業務執行体制、監査役及び監査役会が、それぞれの責務を果たすことにより、基本理念の下で持続的な成長と中長期的な企業価値の向上を図ります。

・取締役会は、会社の持続的成長と中長期的な企業価値の向上、収益力・資本効率等の改善を図るため、経営の基本方針その他会社の重要事項について審議・決定するとともに、各取締役の職務執行の監督を行うことを主な役割としております。なお、取締役会がこれらの役割を適切に発揮することができるよう、投資等の個別案件の審議は重要性の高いものに限定するとともに、中期経営計画やそれを踏まえた年度計画の審議や当該計画の四半期ごとのトレース等に重点を置いた運営を行っております。さらに、取締役会において、多角的かつ十分な検討が行われるよう、独立社外取締役を選任しているほか、独立社外監査役にも積極的にご発言いただいております。また、取締役会の監督機能については、独立性・客観性確保のため、独立社外取締役を中心とした独立社外役員の見解を尊重することとしております。独立社外取締役につきましては2名以上の体制としているほか、支援体制や独立社外監査役を含む監査役、会計監査人、内部監査部門との連携体制の強化を図ってまいります。

取締役会は、毎月1回定期的に開催するほか、必要に応じて臨時開催しており、取締役会長が議長となり、上記の事項の審議・決定等のほか、内部統制システムの基本方針の決定や同システムの整備・運用状況の監督等を行っております。

・加えて、取締役・監査役候補の指名、取締役の報酬の決定を行うにあたり、透明性・公正性を確保することを目的として、独立社外取締役を委員長とし、独立社外役員が過半数を占める経営陣幹部・取締役等の指名及び報酬に関する諮問委員会を設置しております。指名諮問委員会においては、主に取締役・監査役の候補者案について、報酬諮問委員会については主に取締役・執行役員報酬制度案、個人別報酬額の案等について審議し、決議した内容を取締役会に答申する体制としております。

・執行体制としては、権限及び責任を明確化し、事業環境の変化に応じた機動的な業務執行体制を確立することを目的として執行役員制並びに事業本部制を導入しており、事業本部に対し、責任を明確化しながら業務執行に係る権限委譲を行うとともに、併せて内部牽制機能を確立するため、社内規程においてコーポレートスタッフ部門を含めたそれぞれの組織権限や実行責任者、適切な業務手続を定めております。

- ・監査役及び監査役会については、監査役の過半数をさまざまな専門知識や多面的な視点を持つ独立社外監査役とし、これらの監査役と常勤の監査役や監査役専任のスタッフが内部監査部門や会計監査人と連携して適法かつ適正な経営が行われるよう監視する体制としております。なお、具体的な内容については「(3) 監査の状況」に記載のとおりであります。

※主な機関の構成員は以下のとおりであります。

- ・取締役会：松本 正義（議長）、井上 治、西田 光男、牛島 望、賀須井 良有、西村 陽、羽藤 秀雄、伊藤 順司、白山 正樹、小林 伸行、佐藤 廣士（社外取締役）、土屋 裕弘（社外取締役）、クリスティーナ・アメージャン（社外取締役） 計13名
- ・監査役会：小椋 悟（議長）、林 昭、渡辺 捷昭（社外監査役）、上原 理子（社外監査役）、吉川 郁夫（社外監査役） 計5名
- ・指名諮問委員会、報酬諮問委員会
：佐藤 廣士（委員長、社外取締役）、松本 正義、井上 治、土屋 裕弘（社外取締役）、渡辺 捷昭（社外監査役） 計5名

以上の体制により、当社のコーポレート・ガバナンスは十分に機能していると考えておりますが、「コーポレートガバナンス・ガイドライン」に基づき、さらなる体制充実に取り組んでまいります。

③ 内部統制システムに関する基本的な考え方

a. 取締役の職務の執行に係る情報の保存及び管理に関する体制

取締役会の議事録を作成し保存するとともに、情報管理規程、文書規程及び書類保存規程に定めるところに従い、起案決裁書等、取締役の職務の執行及び決裁に係る情報について記録し、適切に管理するものとする。

b. 損失の危険の管理に関する規程その他の体制

災害、品質、安全、環境、与信及び貿易管理などのグループ横断的な主要リスクについては、各リスクを所管するコーポレートスタッフ部門や当該部門担当の取締役等（「役付取締役、役付執行役員」をいう。以下同じ）が主催する委員会がグループ内に展開する対応策や事故事例・防止策に従い、各部門が所管事業の遂行に伴うリスクを再評価のうえリスク管理を行うものとする。

なお、サイバー攻撃の増加・巧妙化に対応したサイバーセキュリティ、グローバルな事業展開に伴い重要性が増している贈賄防止、機密情報・個人情報管理や法務、労務、税務等の喫緊の課題については、リスク管理委員会主導の下、関係部門が連携して体制の整備や取組みの強化を図ることとしている。

また、部門に固有のリスクについては、専門的知見を有するコーポレートスタッフ部門や外部専門家の支援を適宜受けながらリスクの軽減等を行う。

これらの活動は、リスク管理委員会が、リスク管理規程に従い統轄し、監査役、内部監査部門及び各リスクを所管するコーポレートスタッフ部門とも連携しながらモニタリングする。

さらに、重大なリスクが顕在化し緊急の対応が必要な場合には、リスク管理実務委員会が危機レベルの判定や対策本部の設置等を行う。

c. 取締役の職務の執行が効率的に行われることを確保するための体制

取締役等や基幹職の職務執行が効率的且つ適正に行われるよう、職制及び業務規程において担当部門、職務権限及び各組織の所管業務を定める。

また、執行役員制及び事業本部制を採用し、各事業本部、営業本部及び研究開発本部が、本部長のもと、環境変化や顧客ニーズに応じた機動的な事業運営を行う体制とする。

なお、各本部の業績等については、中期計画及びその達成に向けた年度計画を策定し、経理部門及び経理担当役員が月次単位で達成状況を把握・分析のうえ、経営会議・取締役会に報告して所要の対策について検討する体制とする。

T V会議やコンピュータ・情報通信システムの活用を推進し、経営情報の効率的な収集・分析及び活用・共有を図る。

d. 取締役及び使用人の職務の執行が法令及び定款に適合することを確保するための体制

住友の事業精神並びに経営理念を敷衍した企業行動憲章やコンプライアンスに関するグループ共通の通則であるCode of Conductの浸透に努めるほか、トップの発言・行動を通じ、法令遵守、企業倫理の維持が経営の根幹をなすものであることを徹底する。

社長を委員長とするコンプライアンス委員会において、グループ横断的なコンプライアンス・リスクの把握・分析、Code of Conductの作成・見直し、研修の企画・実施、違反事例に係わる原因の究明や再発防止策の立案並びにそれらのグループ内への周知徹底及びコンプライアンス推進活動のモニタリング等を行う。

一方、各部門においては、部門特有のリスクを含め、コンプライアンス・リスクを把握、分析のうえ発生防止策を講じることとしており、コンプライアンス委員会、法務部、監査役及び内部監査部門は連携して、そのモニタリングを行う。

なお、国内外の競争法の遵守については、グループ内における疑わしい行為を含むカルテル・談合行為根絶のため、競争法に関する教育を継続的に実施するとともに、コンプライアンス委員会の下で、コンプライアンス・リスク管理室が、各本部の専任組織もしくは競争法コンプライアンス推進責任者と連携して、競争法コンプライアンス規程の運用及び遵守状況のモニタリングを行い、また、その他の競争法コンプライアンスに関する施策を企画・実行する。

また、コンプライアンス委員会は社内及び社外に設置した相談・申告窓口へ寄せられた情報につき、適切に状況の把握を行い、必要な対策をとるものとする。

e. 財務報告の適正性を確保するための体制

社長を委員長とする財務報告内部統制委員会を設置するとともに、コーポレートスタッフ部門に推進組織を設け、それらの方針・指導・支援のもと、各部門・子会社において、金融商品取引法及び金融庁が定める評価・監査の基準・実施基準に沿った、内部統制システムの整備及び適切な運用を進め、財務報告の適正性を確保するための体制の一層の強化を図る。監査部は、各事業年度毎にグループ全体の内部統制システムの有効性についての評価を行い、その結果をもとに金融庁に提出する内部統制報告書を取りまとめ、財務報告内部統制委員会及び取締役会の承認を得るものとする。

f. 当社及び子会社から成る企業集団における業務の適正を確保するための体制

住友の事業精神並びに経営理念を敷衍した企業行動憲章について、グループ会社にも浸透を図り、事業運営上、尊重・遵守していくべき事項の共有化に努める。

関係会社管理規程に基づき、当社経営会議、取締役会で報告・付議すべき決定事項・発生事実やリスク管理、コンプライアンス等に関する一定の事項について子会社から報告を受け、又は必要により当社と協議を行うものとする。

加えて、各子会社の取締役ないし監査役に、所管本部等の関係者や経理部門の基幹職等が就任し、各社の経営状況の把握に努めるほか、グループ監査役会や当社人事部門、総務部門、経理部門等のコーポレートスタッフ部門による子会社関係部門との交流を通じて、リスク管理やコンプライアンスの体制等に関する情報交換を行うものとする。なお、リスク管理やコンプライアンスに関する主な活動は、当社本体のみならず、上場会社及びその子会社を除く国内外の子会社を対象に行っている。

グループ横断的な主要リスクについては、当社の担当部門等がグループ内に展開する対応策や事故事例・防止策に従い、各子会社が自社事業の遂行に伴うリスクを再評価のうえリスク管理を行うほか、各社固有のリスクについても、当社の支援を受け、リスクの軽減等を行う。

コンプライアンスに関しても、当社のコンプライアンス委員会や法務部門等が、グループ内に展開する主要なコンプライアンス・リスク及び発生防止策に従い、各子会社において、自社特有のリスクを含め、対策を講じる体制としている。なお、内部通報のための相談・申告窓口は、各子会社に対し、独自の社内窓口の設置について指導するとともに、国内・海外それぞれにおいて、グループ共通の社外窓口を設ける。

各子会社の事業は、事業本部制の下で機動的に運営される体制となっている。各子会社の事業計画は、各本部の中期計画及び年度計画の一環として策定され、各本部の業績が月次単位で経営会議、取締役会に報告されて、所要の対策等が検討される体制としている。また、子会社におけるコンピュータ、情報通信システム等の活用についても、グループ共通の基盤の利用を推進している。

g. 監査役職務を補助すべき使用人に関する事項、当該使用人の取締役からの独立性及び当該使用人に対する指示の実効性の確保に関する事項

専ら監査役職務を補助すべき部門として監査役室を設置し、専任の者を含む使用人（以下「監査役スタッフ」という）を配置するものとする。監査役スタッフの人事異動、人事評価に際しては、あらかじめ監査役会に相談して、意見を求めることとし、監査役スタッフは、監査役の指揮命令に従うものとする。

h. 当社の取締役及び使用人、子会社の取締役及び使用人又はこれらの者から報告を受けた者が当社監査役に報告をするための体制その他の当社監査役への報告に関する体制

監査役は、当社のグループ全体の運営を所管する経営会議、リスク管理委員会、コンプライアンス委員会等の重要な各種会議に陪席することとする。その他、グループ内の突発の法令・定款違反行為や重要な業務執行、内部統制システムの変更（軽微なものを除く）等について、取締役、部門長又は子会社社長等から適宜監査役に報告する体制とする。

i. 監査役へ報告をした者が当該報告をしたことを理由として不利な取扱いを受けないことを確保するための体制

内部通報窓口制度に関する規程において、監査役スタッフに情報提供を行ったことを理由として解雇その他の不利益な取扱いを行わない旨を規定するなど、当社及び各子会社は、監査役に前項h.の報告をしたことを理由として、当該報告をした者に対して不利な取扱いを行わない。

j. 監査役職務の執行について生ずる費用又は債務の処理に係る方針に関する事項

監査役職務の執行について生ずる費用又は債務の処理のために、毎年度、監査役承認のもと必要な予算を設定し、監査役から前払又は支出した費用等の償還、負担した債務の弁済の請求があった場合には、速やかに対応するものとする。

また、監査役がその職務の執行に関連して弁護士、公認会計士等の外部専門家に相談する場合の費用は、会社が負担することとする。

k. その他監査役職務の執行が実効的に行われることを確保するための体制

監査役が取締役及び部門長からヒアリングを行う機会を適宜確保するとともに、取締役会長、社長及びコーポレートスタッフ部門担当役員等と監査役との意見交換会を定期的に開催する。

また、内部監査部門は監査役と連携して活動を進める。

④ 責任限定契約の内容の概要

当社は、定款において、社外取締役及び社外監査役の責任限定契約に関する規定を設けております。当該定款の規定に基づいて、当社が社外取締役及び社外監査役の全員との間で締結している責任限定契約の内容の概要は次のとおりであります。

社外取締役又は社外監査役は、本契約締結後、会社法第423条第1項の責任について、その職務を行うにつき善意でありかつ重大な過失がなかったときは、金10百万円又は会社法第425条第1項に定める最低責任限度額のいずれか高い額を限度として損害賠償責任を負担するものとする。

⑤ 取締役の員数

当社は、取締役の員数を3名以上とする旨定款に定めております。

⑥ 取締役の選任及び解任の決議要件

当社は、取締役の選任及び解任の決議について、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の過半数をもって行う旨定款に定めております。また、取締役の選任決議は、累積投票によらないものとする旨も定款に定めております。

⑦ 株主総会決議事項を取締役会で決議できるとした事項

a. 自己の株式の取得

当社は、企業環境の変化に応じた機動的な経営を可能にするため、会社法第165条第2項の規定により、取締役会の決議によって市場取引等により自己の株式を取得することができる旨定款に定めております。

b. 中間配当

当社は、株主への機動的な利益還元の実施を可能にするため、会社法第454条第5項の規定により、取締役会の決議によって、毎年9月30日の最終の株主名簿に記録された株主又は登録株式質権者に対し、中間配当金として剰余金の配当を行うことができる旨定款に定めております。

⑧ 株主総会の特別決議要件

当社は、会社法第309条第2項に定める株主総会の特別決議要件について、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の3分の2以上に当たる多数をもって行う旨定款に定めております。これは、株主総会における特別決議の定足数を緩和することにより、株主総会の円滑な運営を行うことを目的とするものであります。

(2) 【役員の状況】

① 役員一覧

男性16名 女性2名 (役員のうち女性の比率11.1%)

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (株)
(代表取締役) 取締役会長	松本 正義	1944年9月18日生	1967年4月 当社入社 1997年6月 取締役 1999年6月 常務取締役 2003年6月 専務取締役 2004年6月 社長 2017年6月 取締役会長(現)	(注) 1	60,700
(代表取締役) 社長	井上 治	1952年8月25日生	1975年4月 当社入社 2001年1月 自動車部長 2003年7月 自動車事業本部業務部長 2004年6月 執行役員、自動車事業本部副本部長、同上 2006年1月 住友電装(株)執行役員、支配人 2006年6月 住友電装(株)取締役、常務執行役員、企画本部長、 関係会社本部長 2007年6月 住友電装(株)取締役、専務執行役員 2008年6月 当社常務取締役、自動車事業本部長 2009年4月 取締役、 スミトモ エレクトリック ボードネットエー ゲー エム ベーハー (現 スミトモ エレクトリック ボードネットエー エスエー) 社長 2012年6月 自動車事業本部副本部長、住友電装(株)取締役、社長 2017年4月 常務執行役員、住友電装(株)取締役 2017年6月 社長(現)	(注) 1	25,510
(代表取締役) 副社長	西田 光男	1948年2月11日生	1972年4月 当社入社 2005年6月 住友電装(株)取締役、専務執行役員 2007年6月 当社常務執行役員、自動車事業本部副本部長 2009年4月 常務執行役員、自動車事業本部長 2009年6月 常務取締役、自動車事業本部長 2010年6月 専務取締役、自動車事業本部長 2014年6月 副社長、自動車事業本部長 2017年4月 副社長、生産技術本部長、自動車事業本部長、 住友電装(株)取締役会長(現)	(注) 1	22,890
(代表取締役) 副社長	牛島 望	1957年5月21日生	1980年4月 当社入社 2005年6月 産業素材事業本部業務部長 2010年6月 執行役員、ハードメタル事業部長、 住友電工ハードメタル(株)社長 2011年6月 執行役員、産業素材事業本部副本部長、 ハードメタル事業部長、住友電工ハードメタル(株)社長 2012年6月 常務執行役員、アドバンストマテリアル事業本部長 2013年6月 常務取締役、アドバンストマテリアル事業本部長 2017年6月 専務取締役、アドバンストマテリアル事業本部長 2019年6月 副社長、アドバンストマテリアル事業本部長(現)	(注) 1	18,500
(代表取締役) 専務取締役	賀須井 良有	1959年5月15日生	1983年4月 当社入社 2008年12月 人事総務部長 2012年6月 執行役員、生産技術本部副本部長、同上 2013年6月 常務執行役員、生産技術本部副本部長、人事総務部長 2014年6月 常務取締役、生産技術本部副本部長、人事総務部長 2015年10月 常務取締役、生産技術本部副本部長 2018年6月 専務取締役、生産技術本部副本部長(現)	(注) 1	16,900

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (株)
専務取締役	西村 陽	1958年4月7日生	1984年4月 当社入社 2010年4月 光通信事業部長 2013年6月 執行役員、情報通信事業本部副本部長、同上 2015年6月 常務執行役員、情報通信事業本部副本部長、 光通信事業部長 2015年7月 常務執行役員、情報通信事業本部副本部長 2016年6月 常務取締役、情報通信事業本部長 2019年6月 専務取締役、情報通信事業本部長（現）	(注) 1	10,900
専務取締役	羽藤 秀雄	1957年9月3日生	1981年4月 通商産業省入省 2007年7月 経済産業省大臣官房審議官 2008年7月 資源エネルギー庁省エネルギー・新エネルギー部長 2009年9月 消費者庁審議官 2011年7月 独立行政法人新エネルギー・産業技術総合開発機構 (現 国立研究開発法人新エネルギー・産業技術総合 開発機構) 副理事長 2013年6月 特許庁長官 2014年7月 退官 2016年6月 当社入社、常務執行役員 2017年6月 常務取締役 2018年4月 同上、自動車事業本部副本部長 2018年6月 同上、新規事業開発本部長 2019年6月 専務取締役、新規事業開発本部長、 自動車事業本部副本部長（現）	(注) 1	7,300
常務取締役	伊藤 順司	1954年10月6日生	1984年4月 通商産業省工業技術院電子技術総合研究所（現 国立 研究開発法人産業技術総合研究所）入所 2001年4月 独立行政法人産業技術総合研究所（現 同上）エレクトロ ニクス研究部門長 2007年4月 独立行政法人産業技術総合研究所理事 2010年4月 当社入社、パワーシステム研究所長 2011年6月 執行役員、パワーシステム研究所長 2013年6月 常務執行役員、研究統轄本部副本部長、 パワーシステム研究開発センター長 2014年6月 常務取締役、研究統轄本部副本部長、 パワーシステム研究開発センター長 2015年6月 常務取締役、研究開発本部長、 パワーシステム研究開発センター長、 新領域技術研究所長 2016年6月 常務取締役、研究開発本部長、新領域技術研究所長 2018年1月 常務取締役、研究開発本部長（現）	(注) 1	19,000
常務取締役	白山 正樹	1961年11月29日生	1985年4月 当社入社 2012年6月 新規事業開発部長 2013年6月 執行役員、ネットワーク営業本部副本部長、 新規事業マーケティング部長、 新規事業開発本部営業推進部長 2014年6月 常務執行役員、社会システム営業本部長 2017年6月 常務取締役、社会システム営業本部長 2018年6月 常務取締役、電線・エネルギー事業本部長（現）	(注) 1	10,600
常務取締役	小林 伸行	1961年5月31日生	1985年4月 当社入社 2016年1月 経理部長 2016年6月 執行役員、同上 2019年6月 常務取締役（現）	(注) 2	5,000

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (株)
取締役	佐藤 廣士	1945年9月25日生	1970年4月 ㈱神戸製鋼所入社 1992年4月 同社技術開発本部材料研究所表面制御研究室長 1993年4月 同社技術開発本部材料研究所長 1995年4月 同社技術開発本部開発企画部長 1996年6月 同社取締役 1999年4月 同上、執行役員 1999年6月 同社常務執行役員 2000年6月 同社取締役、同上 2002年6月 同社取締役、専務執行役員 2003年6月 同社専務取締役 2004年6月 同社取締役副社長 2009年4月 同社取締役社長 2013年4月 同社取締役会長 2016年4月 同社取締役相談役 2016年6月 同社相談役、当社取締役 2018年4月 同社顧問、当社取締役(現)	(注) 1	3,000
取締役	土屋 裕弘	1947年7月12日生	1976年4月 田辺製薬㈱(現 田辺三菱製薬㈱)入社 2001年6月 同社取締役 2003年6月 同社常務取締役 2005年6月 同社取締役、常務執行役員 2006年6月 同社代表取締役、専務執行役員 2007年10月 田辺三菱製薬㈱取締役、副社長執行役員 2008年6月 同上、㈱三菱ケミカルホールディングス取締役 2009年6月 田辺三菱製薬㈱代表取締役社長 社長執行役員、 ㈱三菱ケミカルホールディングス取締役 2014年6月 田辺三菱製薬㈱代表取締役会長 2016年6月 同社取締役会長 2017年6月 同社相談役 2018年6月 同上、当社取締役 2019年6月 当社取締役(現)	(注) 1	1,200
取締役	クリスティーナ・ アメージャン	1959年3月5日生	1995年1月 コロンビア大学ビジネススクール助教授 2001年10月 一橋大学大学院国際企業戦略研究科助教授 2004年1月 同大学大学院国際企業戦略研究科教授 2010年4月 同大学大学院国際企業戦略研究科研究科長 2012年4月 同大学大学院商学研究科教授 2018年4月 同大学大学院経営管理研究科教授 2018年6月 同上、当社取締役(現)	(注) 1	1,100
監査役 (常勤)	小椋 悟	1957年2月23日生	1982年4月 当社入社 2004年4月 法務部長 2009年6月 執行役員、生産技術本部副本部長、同上 2010年6月 同上、競争法コンプライアンス室長 2012年6月 執行役員、競争法コンプライアンス室長、法務部長 2012年7月 執行役員、競争法コンプライアンス室長 2015年6月 監査役(現)	(注) 3	8,900
監査役 (常勤)	林 昭	1958年6月30日生	1981年4月 当社入社 2009年7月 監査部長 2011年5月 経理部長 2016年1月 支配人 2017年6月 監査役(現)	(注) 3	23,200

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (株)
監査役	渡辺 捷昭	1942年2月13日生	1964年4月 トヨタ自動車工業(株) (現 トヨタ自動車(株)) 入社 1992年9月 トヨタ自動車(株)取締役 1997年6月 同社常務取締役 1999年6月 同社専務取締役 2001年6月 同社取締役副社長 2005年6月 同社取締役社長 2009年6月 同社取締役副会長 2011年6月 同社相談役 2013年6月 同上、当社監査役 2015年6月 同社顧問、当社監査役 2018年7月 当社監査役 (現)	(注) 4	10,300
監査役	上原 理子	1949年12月24日生	1976年4月 神戸地方裁判所判事補 1979年4月 神戸地方裁判所尼崎支部判事補 1982年4月 大阪地方裁判所判事補 1986年4月 福岡地方裁判所判事 1989年3月 退官 1989年5月 弁護士登録 2016年6月 当社監査役 (現)	(注) 5	2,900
監査役	吉川 郁夫	1944年12月13日生	1969年1月 監査法人等松・青木会計事務所 (現 有限責任監査法人 トーマツ) 入所 1986年5月 等松・青木監査法人 (現 同上) 代表社員 2008年6月 監査法人トーマツ (現 同上) 退職 2009年4月 関西学院大学専門職大学院経営戦略研究科教授 2013年4月 同大学専門職大学院経営戦略研究科客員教授 2018年6月 同上、当社監査役 (現)	(注) 6	900
計					248,800

(注) 1. 2018年6月開催の定時株主総会から2年間

2. 2019年6月開催の定時株主総会から1年間

3. 2019年6月開催の定時株主総会から4年間

4. 2017年6月開催の定時株主総会から4年間

5. 2016年6月開催の定時株主総会から4年間

6. 2018年6月開催の定時株主総会から4年間

7. 取締役 佐藤 廣士、土屋 裕弘及びクリスティーナ・アメージャンは、社外取締役であり、また(株)東京証券取引所等の定めに基づく独立役員であります。

8. 監査役 渡辺 捷昭、上原 理子及び吉川 郁夫は、社外監査役であり、また(株)東京証券取引所等の定めに基づく独立役員であります。

9. 当社は、執行役員制を導入しており、2019年6月21日現在の執行役員は、常務執行役員 宮田 康弘、柿井 俊昭、中島 成、上宮 崇文、漆畑 憲一、小林 正宏、長野 友明、柴田 泰行、佐野 裕一、佐橋 稔之、斉藤 英敏の11名、執行役員 林 哲也、徳丸 亀鶴、四方 洋、岩野 宏、山本 崇晶、清川 浩、緒方 佳幸、関 総一郎、戸川 契、後藤 光宏、早味 宏、井上 雅貴、石黒 英俊、新倉 耕治、末森 茂、中田 将稔、原田 和平、横井 清則、橘高 淳、村山 敦の20名、合計31名であります。

② 社外役員の状況

当社は、社外の視点を入れて取締役会の監督機能を一層強化し、経営の透明性や客観性を高めていくために、社外取締役3名を選任しております。また、適法かつ適正な経営が行われるよう監視する体制を強化するため、監査役の過半数を占めるように、さまざまな専門知識や多面的な視点を持つ社外監査役3名を選任しております。

社外取締役及び社外監査役が、現在業務執行者であるか、又は過去10年内において業務執行者であった他の会社等と当社との間に、2018年度以降に生じた取引関係等は次のとおりですが、いずれにおいてもその職務の遂行に影響を及ぼすような特別な利害関係はありません。

- ・社外取締役佐藤廣士氏は、2016年3月31日まで、株式会社神戸製鋼所の取締役会長でありました。当社と同社との間には、製品の販売・購入の取引関係がありますが、その取引の規模等に照らして、佐藤廣士氏の独立性に影響を与えるものではありません。
- ・社外取締役土屋裕弘氏は、2017年6月21日まで、田辺三菱製薬株式会社の取締役会長でありました。当社と同社との間には、取引はありません。
- ・社外取締役クリスティーナ・アメージャン氏は、一橋大学の教授であります。当社と同大学との間には、取引や当社からの寄付はありません。
- ・社外監査役渡辺捷昭氏は、2011年6月17日まで、トヨタ自動車株式会社の取締役副会長でありました。当社と同社との間には、製品の販売・購入の取引関係がありますが、その取引の規模等に照らして、渡辺捷昭氏の独立性に影響を与えるものではありません。
- ・社外監査役吉川郁夫氏は、関西学院大学専門職大学院の客員教授であります。当社は、同大学を運営する学校法人関西学院が2010年4月に統合した中学・高等学校に対し、社会貢献の一環として統合以前より寄付を行っておりますが、当社と同学校法人との間にそれ以外の取引や当社からの寄付はなく、当該寄付の金額、性質等に照らして、吉川郁夫氏の独立性に影響を与えるものではありません。
- ・社外監査役上原理子氏と当社との間に、取引関係等はありません。

当社は、社外役員にその役割を十分に果たしていただくためには、当社からの独立性が必要であると考えております。そのため、当社は独立社外取締役・監査役の独立性判断基準を制定しており、当社との利害関係の有無を慎重に調査・確認のうえ、候補者を選定しております。なお、当該基準は当社ウェブサイト

(<https://sei.co.jp/company/governance.html>)に掲載しております。現在の社外役員は、全員が(株)東京証券取引所等の定める独立性に関する判断基準の要件に照らしても問題はなく、社外取締役又は社外監査役としての職務を適切に遂行していただけるものと考えており、一般株主との間で利益相反の生じるおそれはないものと判断し、社外役員全員について、同取引所等が規定する独立役員として指定しております。なお、社外取締役及び社外監査役による当社株式の保有状況は①役員一覧の「所有株式数」欄に記載のとおりであります。

③ 社外取締役又は社外監査役による監督又は監査と内部監査、監査役監査及び会計監査との相互連携並びに内部統制部門との関係

当社では、社外取締役及び社外監査役が取締役会に出席し、独立した視点から発言を行うこと等により、経営の透明性・客観性を高め、取締役会の監督機能の一層の強化を図ることとしています。なお、取締役会においては、定期的に内部統制システムの整備・運用状況についての報告がなされております。

また、社外監査役が常勤監査役とともに「(3) 監査の状況」に記載の職務を行うこと等により、会計監査人、内部監査部門と連携して適法かつ適正な経営が行われるよう監視する体制としております。

さらに、社外取締役及び社外監査役を含む監査役と取締役会長、社長、コーポレートスタッフ部門を所管する業務執行取締役との意見交換会を定期的開催しているほか、社外取締役と社外監査役が適宜会合を持ち、必要に応じこれに常勤監査役も出席するなど、相互の情報共有と意見交換を行っております。

(3) 【監査の状況】

① 監査役監査の状況

当社では、適法かつ適正な経営を確保するために、監査役監査、内部監査及び会計監査人監査の三様監査を受けております。監査役監査については、社外監査役3名を含む合計5名の監査役が監査役スタッフ（監査役室）を活用して取締役の職務執行及び内部統制システムの構築・運用状況を監査しております。

なお、常勤監査役林昭氏は、当社の経理・財務部門内における長年の経験があり、財務及び会計に関する相当程度の知見を有しております。

また、社外監査役吉川郁夫氏は、監査法人に属する公認会計士として長年に亘り監査実務に携わったほか、会計学を専門とする大学教授としての経験もあり、財務及び会計に関する相当程度の知見を有しております。

各監査役は、監査役会が定めた監査基準・方針・分担に従い、取締役会等重要な会議への出席、取締役、内部監査部門その他の使用人等からの職務状況の聴取、重要な決裁書類の閲覧、主要な事業所等の往査等を実施するとともに、他の監査役から監査状況等の報告を受け、また会計監査人とは適宜情報交換等を行っております。

② 内部監査の状況

当社における内部監査は、所管部門として監査部（2019年3月31日現在の人員：48名）を設置しております。同部は、当社グループ会社を含めた事業所往査等の監査を通じて適正かつ効率的な業務実施のための問題点の調査や改善提案を行っており、また監査役及び会計監査人とも適宜連携を取って監査を実施しております。

③ 会計監査の状況

a. 監査法人の名称

有限責任 あずさ監査法人

b. 業務を執行した公認会計士

業務執行社員 谷尋史氏

業務執行社員 前田俊之氏

業務執行社員 松本光弘氏

c. 監査業務に係る補助者の構成

当社の会計監査業務に係る補助者は、公認会計士18名、その他18名であります。

d. 監査法人の選定方針と理由

当社の監査役及び監査役会は、監査関係業務について要望した事項への当該監査法人の対応状況等は妥当と認められること、執行部からも当該監査法人の再任について推薦があったこと、及び当該監査法人からの監査品質等に関する説明の内容は妥当であることも踏まえ、会計監査人の解任又は不再任の決定の方針（*）に該当する事情の有無のほか、当該監査法人の内部管理体制、監査報酬の水準、独立性、知識・経験・能力、海外対応力、会社とのコミュニケーションの各項目について評価した結果、当該監査法人を再任することは妥当と判断し、会計監査人として選定しております。

（*）会計監査人の解任又は不再任の決定の方針

当社では、会社法第340条第1項各号に該当するときは、会計監査人を解任する方針です。その他、会計監査人においてその職務遂行に関する公正性の確保ができないものと合理的に疑うべき事情が判明し当該会計監査人による監査の継続が不適当であると判断される場合には、当該事情に応じ解任又は不再任といたします。

e. 監査役及び監査役会による監査法人の評価

監査役及び監査役会は、当該監査法人の内部管理体制、監査報酬の水準、独立性、知識・経験・能力、海外対応力、会社とのコミュニケーションの各項目について評価した結果、それぞれ再任することが妥当な水準にあると判断しております。

④ 監査報酬の内容等

「企業内容等の開示に関する内閣府令の一部を改正する内閣府令」（平成31年1月31日内閣府令第3号）による改正後の「企業内容等の開示に関する内閣府令」第二号様式記載上の注意(56) d (f) i から iii の規定に経過措置を適用しております。

a. 監査公認会計士等に対する報酬

区分	前連結会計年度		当連結会計年度	
	監査証明業務に基づく報酬（百万円）	非監査業務に基づく報酬（百万円）	監査証明業務に基づく報酬（百万円）	非監査業務に基づく報酬（百万円）
提出会社	165	19	163	72
連結子会社	456	51	454	72
計	621	70	617	144

（前連結会計年度）

当社が監査公認会計士等に対して報酬を支払っている非監査業務の内容は、子会社の財務調査に関する指導・助言等であります。

（当連結会計年度）

当社が監査公認会計士等に対して報酬を支払っている非監査業務の内容は、グループ会計基準の策定に関する指導・助言等であります。

b. その他重要な報酬の内容

（前連結会計年度）

海外連結子会社の主な監査証明業務及び税務申告業務に関するアドバイザー業務などの非監査証明業務の委託先である当社の監査公認会計士等と同一のネットワークに属する監査人に対して報酬を支払っております。

（当連結会計年度）

海外連結子会社の主な監査証明業務及び税務申告業務に関するアドバイザー業務などの非監査証明業務の委託先である当社の監査公認会計士等と同一のネットワークに属する監査人に対して報酬を支払っております。

c. 監査報酬の決定方針

監査公認会計士等に対する報酬の額の決定に関する方針について、当社では特段の定めはありませんが、業務執行部門において監査日数や当社の規模・業務の特性等の要素を勘案して適切に報酬の額を決定したうえで、会社法第399条に基づく監査役会の同意を得ております。

d. 監査役会が会計監査人の報酬等に同意した理由

取締役会が提案した会計監査人に対する報酬等に対して、監査役会は、当事業年度の監査計画の内容、前年度の監査実績、報酬の前提となる見積の算出根拠等を精査した結果、会計監査人の報酬額は妥当であると判断したことから、会社法第399条第1項にかかる同意をしております。

(4) 【役員の報酬等】

① 役員の報酬等の額又はその算定方法の決定に関する方針に係る事項

a. 役員の報酬等の額又はその算定方法の決定に関する方針及び決定方法

取締役報酬は、月報酬、賞与により構成しております。

月報酬については、事業内容、規模等の類似する企業を対象とした、役員報酬に関する第三者の調査を活用することにより、報酬水準の客観性を確保した上で、職位毎の役割や責任度合い並びに会社業績への貢献度に基づいて、職位毎に月報酬テーブルを設定しております。各人に適用するテーブルの金額については、中長期的な観点も踏まえ、役割や責任度合い、担当領域の規模や複雑性、難易度並びに会社業績への貢献度を勘案し、決定しております。なお、支給総額については、株主総会において承認決議をいただいた報酬額の枠内で決定いたします。

賞与については、業績連動報酬とし、その総額については、事業内容、規模等の類似する企業を対象とした、役員報酬に関する第三者の調査を活用することにより、報酬水準の客観性を確保した上で、毎期の会社業績、特に利益指標、配当水準等をもとに、株主総会の決議を経て決定いたします。各人への配分は、中長期的な観点も踏まえ、職位や責任度合い、主要目標の達成度、毎期の会社業績への貢献度に基づいて決定いたします。社外取締役については、独立性を確保する観点から賞与は支払いません。

業績連動報酬に係る指標に関し、総額については、毎期の会社業績、特に当社が企業戦略上重視する営業利益やROIC、及び株主価値との連動性の高い当期純利益等を選択し、また配当水準も勘案しております。各人への配分については、中長期的な観点も踏まえ、職位や責任度合い、所管部門における主要目標（売上高、営業利益、当期純利益、ROIC等）の達成度、毎期の会社業績への貢献度、及びこれらを達成するために必要な資質等の定性的要素も考慮しております。

業績連動報酬に係る指標の最近事業年度における目標及び実績は下表のとおりとなります。

	売上高 (百万円)	営業利益 (百万円)	営業利益率	経常利益 (百万円)	親会社株主に帰属する 当期純利益 (百万円)	ROIC	ROE
目標	3,180,000	175,000	5.5%	193,000	122,000	8.5%以上	8%以上
実績	3,177,985	166,260	5.2%	188,649	118,063	7.3%	7.6%

(注) 目標として記載している売上高、営業利益、営業利益率、経常利益及び親会社株主に帰属する当期純利益については、2019年3月期第3四半期決算発表時の修正後連結業績予想であります。

またROIC及びROEについては、中期経営計画「22VISION」における2020年度(中間)目標であります。

取締役の月報酬及び賞与は、報酬諮問委員会にて客観的観点から審議し取締役会に答申を行い、取締役会はこれを踏まえ、取締役の月報酬及び賞与に関する考え方について審議を行い決定いたします。また、取締役会は毎期の賞与の総額のほか、月報酬総額の上限を見直す場合の株主総会の議案内容を決定いたします。

個人別の具体的な金額、支給時期及び方法等の決定については、社長に決定を一任することを取締役会で決議し、これに基づき社長が決定しております。

報酬諮問委員会は、委員長を社外取締役とし、過半数を社外役員とした5名の委員で構成しており、当社の取締役、執行役員の報酬制度案や個人別の報酬額案、及びそれらに関する会社の重要な規程等の制定、改廃案等について審議を行っております。

監査役の報酬については、株主総会において承認決議をいただいた報酬額の枠内で、監査役の協議により決定いたします。

なお、当社の業績向上に対する意欲や士気をより一層高めるとともに、株主価値を重視した経営を推進するために、社内取締役には、一定の目標水準を定めて役員持株会を通じた自社株の保有を促し、当該自社株は在任期間中継続して保有することとしております。

b. 役員の報酬等に関する株主総会の決議について

取締役の月報酬額の総枠については、2016年6月24日の株主総会にて、取締役の報酬額を月額70百万円以内(うち、社外取締役分は月額6百万円以内)とする内容で決議をいただいております。なお、その時点での員数は13名(うち社外取締役は2名)でありました。また、取締役の賞与については、2019年6月21日の株主総会にて、取締役10名(社外取締役3名を除く)に対して、総額240百万円を支給する内容で決議をいただいております。監査役の月報酬額の総枠については、2007年6月27日の株主総会にて、監査役の報酬額を月額10百万円以内とする内容で決議を頂いております。

c. 最近事業年度の役員報酬等の額の決定過程における、取締役会及び報酬諮問委員会の活動について

最近事業年度の役員報酬等については、2018年9月26日の取締役会において、月報酬及び賞与の枠組みや算定方法に関する当年度の方針並びに役員報酬の具体的金額について報酬諮問委員会への諮問を行い、2018年10月16日、12月10日、2019年2月4日、4月9日、6月4日の報酬諮問委員会において、賞与の総額や各人の報酬額の妥当性のほか、社会動向等を踏まえた当社の役員報酬制度のあり方などについて審議を行いました。その答申を受けて、2019年6月21日の取締役会にて、取締役の月報酬及び賞与に関する考え方について審議を行い、具体的な金額、支給時期及び方法等の決定については社長に一任することを決議いたしました。

② 役員区分ごとの報酬等の総額、報酬等の種類別の総額及び対象となる役員の員数

役員区分	報酬等の総額 (千円)	報酬等の種類別の総額 (千円)			対象となる 役員の員数 (人)
		固定報酬	業績連動報酬	退職慰労金	
取締役 (社外取締役を除く)	830,400	590,400	240,000	—	12
監査役 (社外監査役を除く)	60,000	60,000	—	—	2
社外役員	104,100	104,100	—	—	8

③ 役員ごとの連結報酬等の総額等

氏名	連結報酬等の総額 (千円)	役員区分	会社区分	連結報酬等の種類別の額 (千円)		
				固定報酬	業績連動報酬	退職慰労金
松本 正義	175,000	取締役会長	提出会社	120,000	55,000	—
井上 治	141,200	社長	提出会社	108,000	33,200	—

(注) 連結報酬等の総額が1億円以上である者に限定して記載しております。

④ 使用人兼務役員の使用人分給与のうち重要なもの
該当事項はありません。

(5) 【株式の保有状況】

① 投資株式の区分の基準及び考え方

当社は、原則として、純投資目的である投資株式は保有しないこととしており、関係会社株式を除く上場株式及び非上場株式を純投資目的以外の目的である投資株式として保有しております。

② 保有目的が純投資目的以外の目的である投資株式

a. 保有方針及び保有の合理性を検証する方法並びに個別銘柄の保有の適否に関する取締役会等における検証の内容

当社は、保有目的が純投資目的以外の目的である投資株式を、取引先との長期的・安定的な関係の構築・強化や事業・技術提携の円滑化を主たる目的として、ROE、ROICへの影響や寄与等を勘案し、中長期的な企業価値向上に資するかという観点より保有しており、保有目的に適さなくなった株式、あるいは中長期的な企業価値向上に資することのなくなった株式は処分の検討を行うこととしております。毎年、個別の保有目的が純投資目的以外の目的である投資株式につき、上記の目的・観点及び取引状況を踏まえて精査し、取締役会にて保有の適否を検証しております。

当事業年度においても、個別の保有目的が純投資目的以外の目的である投資株式につき、上記の目的・観点及び取引状況を踏まえて精査し、取締役会にて保有の適否を検証いたしました。

b. 銘柄数及び貸借対照表計上額

	銘柄数 (銘柄)	貸借対照表計上額の 合計額 (百万円)
非上場株式	122	5,161
非上場株式以外の株式	86	86,200

(当事業年度において株式数が増加した銘柄)

	銘柄数 (銘柄)	株式数の増加に係る取得 価額の合計額 (百万円)	株式数の増加の理由
非上場株式	1	50	企業間取引の維持・強化のため
非上場株式以外の株式	—	—	—

(当事業年度において株式数が減少した銘柄)

	銘柄数 (銘柄)	株式数の減少に係る売却 価額の合計額 (百万円)
非上場株式	5	51
非上場株式以外の株式	3	22

c. 特定投資株式及びみなし保有株式の銘柄ごとの株式数、貸借対照表計上額等に関する情報

特定投資株式

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、定量的な保有効果 及び株式数が増加した理由	当社の株式の 保有の有無
	株式数 (株)	株式数 (株)		
	貸借対照表計上額 (百万円)	貸借対照表計上額 (百万円)		
(株)ミライト・ホールディングス (注) 2	14,560,525	—	企業間取引の維持・強化のため	有 (注6)
	23,544	—		
住友不動産(株)	1,981,500	1,981,500	企業間取引の維持・強化のため	有
	9,087	7,797		

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、定量的な保有効果 及び株式数が増加した理由	当社の株式の 保有の有無
	株式数 (株)	株式数 (株)		
	貸借対照表計上額 (百万円)	貸借対照表計上額 (百万円)		
本田技研工業(株)	2,002,000	2,002,000	企業間取引の維持・強化のため	有
	5,996	7,327		
(株)明電舎	2,631,385	13,156,926	企業間取引の維持・強化のため	無
	3,992	5,342		
ダイキン工業(株)	300,000	300,000	企業間取引の維持・強化のため	有
	3,891	3,521		
住友金属鉱山(株)	731,250	731,250	企業間取引の維持・強化のため	有
	2,391	3,276		
東海旅客鉄道(株)	82,000	82,000	企業間取引の維持・強化のため	無
	2,108	1,651		
住友商事(株)	1,356,500	1,356,500	企業間取引の維持・強化のため	有
	2,077	2,429		
(株)三井住友フィナン シャルグループ	473,400	473,400	企業間取引の維持・強化のため	有(注6)
	1,835	2,110		
阪急阪神ホールディ ングス(株)	412,712	412,712	企業間取引の維持・強化のため	無
	1,713	1,628		
近鉄グループホール ディングス(株)	321,439	321,439	企業間取引の維持・強化のため	無
	1,659	1,332		
日本リーテック(株)	1,056,000	1,056,000	企業間取引の維持・強化のため	有
	1,489	1,523		
(株)デンソー	309,000	309,000	企業間取引の維持・強化のため	無
	1,334	1,798		
(株)エヌ・ティ・ ティ・ドコモ	500,000	500,000	企業間取引の維持・強化のため	無
	1,226	1,358		
(株)ピーエス三菱	1,834,800	1,834,800	企業間取引の維持・強化のため	有
	1,215	1,277		
(株)富士ピー・エス	2,383,650	2,383,650	企業間取引の維持・強化のため	無
	1,197	1,652		
新日鐵住金(株) (注) 3	604,000	604,000	企業間取引の維持・強化のため	有
	1,180	1,411		

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、定量的な保有効果 及び株式数が増加した理由	当社の株式の 保有の有無
	株式数 (株)	株式数 (株)		
	貸借対照表計上額 (百万円)	貸借対照表計上額 (百万円)		
マツダ(株)	928,400	928,400	企業間取引の維持・強化のため	無
	1,150	1,306		
日本電気(株)	306,600	306,600	企業間取引の維持・強化のため	有
	1,148	917		
(株)きんでん	604,303	604,303	企業間取引の維持・強化のため	無
	1,108	1,065		
日本電信電話(株)	224,400	224,400	企業間取引の維持・強化のため	無
	1,055	1,100		
三菱電機(株)	680,000	680,000	企業間取引の維持・強化のため	無
	967	1,157		
(株)山善	805,000	805,000	企業間取引の維持・強化のため	有
	939	894		
華新麗華	14,470,782	14,470,782	企業間取引の維持・強化のため	無
	919	937		
東北電力(株)	611,151	611,151	企業間取引の維持・強化のため	無
	863	868		
(株)ダイヘン	282,600	1,413,000	企業間取引の維持・強化のため	有
	804	1,154		
トヨタ自動車(株)	117,000	117,000	企業間取引の維持・強化のため	有
	759	799		
三菱マテリアル(株)	242,000	242,000	企業間取引の維持・強化のため	有
	707	774		
大和ハウス工業(株)	200,000	200,000	企業間取引の維持・強化のため	無
	704	820		
中部電力(株)	401,014	401,014	企業間取引の維持・強化のため	無
	693	603		
日本碍子(株)	403,000	403,000	企業間取引の維持・強化のため	有
	648	739		
東日本旅客鉄道(株)	50,000	50,000	企業間取引の維持・強化のため	無
	534	493		

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、定量的な保有効果 及び株式数が増加した理由	当社の株式の 保有の有無
	株式数 (株)	株式数 (株)		
	貸借対照表計上額 (百万円)	貸借対照表計上額 (百万円)		
住友大阪セメント(株)	106,000	1,060,000	企業間取引の維持・強化のため	有
	462	500		
住友ベークライト(株)	115,400	577,000	企業間取引の維持・強化のため	有
	458	542		
西日本旅客鉄道(株)	50,000	50,000	企業間取引の維持・強化のため	無
	417	372		
日本電設工業(株)	170,000	170,000	企業間取引の維持・強化のため	無
	392	358		
(株)三菱UFJフィナンシャル・グループ	664,500	664,500	企業間取引の維持・強化のため	有(注6)
	365	463		
(株)安川電機	100,000	100,000	企業間取引の維持・強化のため	無
	348	483		
(株)大林組	309,000	309,000	企業間取引の維持・強化のため	有
	344	360		
(株)阿波銀行	107,380	536,900	企業間取引の維持・強化のため	有
	302	366		
(株)ファインシンター	129,260	129,260	企業間取引の維持・強化のため	有
	292	295		
南海電気鉄道(株)	92,365	92,365	企業間取引の維持・強化のため	無
	282	246		
(株)トーエネック	83,500	83,500	企業間取引の維持・強化のため	有
	254	259		
中国電力(株)	174,834	174,834	企業間取引の維持・強化のため	無
	241	224		
オーナンバ(株)	550,000	550,000	企業間取引の維持・強化のため	有
	220	246		
四国電力(株)	156,468	156,468	企業間取引の維持・強化のため	無
	211	197		
(株)伊予銀行	286,580	286,580	企業間取引の維持・強化のため	有
	168	230		

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、定量的な保有効果 及び株式数が増加した理由	当社の株式の 保有の有無
	株式数 (株)	株式数 (株)		
	貸借対照表計上額 (百万円)	貸借対照表計上額 (百万円)		
北海道電力(株)	260,814	260,814	企業間取引の維持・強化のため	無
	166	182		
(株)みずほフィナン シャルグループ	928,040	928,040	企業間取引の維持・強化のため	有 (注6)
	159	178		
(株)UACJ	74,251	74,251	企業間取引の維持・強化のため	無
	154	203		

みなし保有株式

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、定量的な保有効果 及び株式数が増加した理由	当社の株式の 保有の有無
	株式数 (株)	株式数 (株)		
	貸借対照表計上額 (百万円)	貸借対照表計上額 (百万円)		
トヨタ自動車(株)	6,802,000	6,802,000	議決権行使の指図	有
	44,125	46,424		
住友商事(株)	9,256,500	9,256,500	議決権行使の指図	有
	14,172	16,578		
日本電気(株)	2,288,000	2,288,000	議決権行使の指図	有
	8,569	6,843		
三井住友トラスト・ ホールディングス(株)	1,798,686	1,798,686	議決権行使の指図	有 (注6)
	7,152	7,747		
KDDI(株)	2,724,600	2,724,600	議決権行使の指図	無
	6,498	7,401		
住友金属鉱山(株)	1,825,750	1,825,750	議決権行使の指図	有
	5,970	8,179		
(株)協和エクシオ	1,500,000	3,766,900	議決権行使の指図	有
	4,583	10,721		
(株)三井住友フィナン シャルグループ	1,180,000	1,180,000	議決権行使の指図	有 (注6)
	4,574	5,260		
関西電力(株)	1,851,633	1,851,633	議決権行使の指図	無
	3,022	2,531		
MS&ADインシュ アランスグループホ ールディングス(株)	896,636	896,636	議決権行使の指図	有 (注6)
	3,022	3,008		

- (注) 1. 貸借対照表計上額の上位銘柄を選定する段階で、特定投資株式とみなし保有株式を合算しておりません。
2. (株)ミライト・ホールディングスは、前事業年度末において当社の関連会社に該当していましたが、2018年11月に一部株式を売却したことにより保有目的が純投資目的以外の目的である投資株式に該当することとなりました。
3. 新日鐵住金(株)は、2019年4月1日付で日本製鉄(株)に商号変更しております。
4. 定量的な保有効果については、測定が困難であるため記載を省略しております。保有の合理性の検証方法は、取引先との長期的・安定的な関係の構築・強化や事業・技術提携の円滑化という保有の主たる目的、また、ROE、ROICへの影響や寄与等を勘案し、中長期的な企業価値向上に資するかという観点及び取引状況を踏まえて精査し、取締役会にて保有の適否を検証しております。
5. (株)ミライト・ホールディングスは、関係会社からの区分変更により増加しておりますが、その他に前事業年度から株式数が増加した銘柄はございません。
6. (株)ミライト・ホールディングス、(株)三井住友フィナンシャルグループ、(株)三菱UFJフィナンシャル・グループ、(株)みずほフィナンシャルグループ、三井住友トラスト・ホールディングス(株)、MS&ADインシュアランスグループホールディングス(株)の各社は、当該各社の子会社が当社の株式を保有しております。

- ③ 保有目的が純投資目的である投資株式
該当ありません。

第5【経理の状況】

1. 連結財務諸表及び財務諸表の作成方法について

(1) 当社の連結財務諸表は、「連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」（昭和51年大蔵省令第28号。以下「連結財務諸表規則」という。）に基づいて作成しております。

なお、当連結会計年度（2018年4月1日から2019年3月31日まで）の連結財務諸表に含まれる比較情報のうち、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則等の一部を改正する内閣府令」（平成30年3月23日内閣府令第7号。以下「改正府令」という。）による改正後の連結財務諸表規則第15条の5第2項第2号及び同条第3項に係るものについては、改正府令附則第3条第2項により、改正前の連結財務諸表規則に基づいて作成しております。

(2) 当社の財務諸表は、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則」（昭和38年大蔵省令第59号。以下「財務諸表等規則」という。）に基づいて作成しております。

また、当社は、特例財務諸表提出会社に該当し、財務諸表等規則第127条の規定により財務諸表を作成しております。

2. 監査証明について

当社は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、連結会計年度（2018年4月1日から2019年3月31日まで）の連結財務諸表及び事業年度（2018年4月1日から2019年3月31日まで）の財務諸表について、有限責任あずさ監査法人による監査を受けております。

3. 連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みについて

当社は、連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みを行っております。具体的には、会計基準等の内容を適切に把握し、会計基準等の変更についての的確に対応することができる体制を整備するため、公益財団法人財務会計基準機構へ加入し、同法人などが主催しているセミナー等に参加しております。

1 【連結財務諸表等】

(1) 【連結財務諸表】

① 【連結貸借対照表】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	178,918	167,225
受取手形及び売掛金	668,616	708,617
有価証券	2,065	2,084
たな卸資産	※1 466,437	※1 528,789
その他	88,277	108,534
貸倒引当金	△2,616	△1,609
流動資産合計	1,401,697	1,513,640
固定資産		
有形固定資産		
建物及び構築物	666,919	690,809
減価償却累計額	△393,688	△412,336
建物及び構築物（純額）	273,231	278,473
機械装置及び運搬具	1,364,367	1,427,685
減価償却累計額	△987,922	△1,022,419
機械装置及び運搬具（純額）	376,445	405,266
工具、器具及び備品	279,129	292,452
減価償却累計額	△228,496	△240,358
工具、器具及び備品（純額）	50,633	52,094
土地	88,461	89,229
建設仮勘定	51,705	52,747
その他	7,956	11,080
減価償却累計額	△2,597	△3,066
その他（純額）	5,359	8,014
有形固定資産合計	※3 845,834	※3 885,823
無形固定資産		
のれん	9,128	2,488
その他	39,987	38,207
無形固定資産合計	49,115	40,695
投資その他の資産		
投資有価証券	※2 478,761	※2 446,559
退職給付に係る資産	134,470	87,569
繰延税金資産	42,989	33,382
その他	49,171	47,822
貸倒引当金	△2,134	△2,227
投資その他の資産合計	703,257	613,105
固定資産合計	1,598,206	1,539,623
資産合計	2,999,903	3,053,263

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
負債の部		
流動負債		
支払手形及び買掛金	367,297	379,844
短期借入金	※3 186,931	※3 248,583
未払法人税等	17,935	22,845
役員賞与引当金	916	874
完成工事補償引当金	1,343	1,196
受注損失引当金	4,576	2,614
その他	224,670	224,795
流動負債合計	803,668	880,751
固定負債		
社債	74,805	74,828
長期借入金	※3 226,627	※3 213,330
繰延税金負債	57,663	36,690
役員退職慰労引当金	1,110	715
退職給付に係る負債	54,661	55,867
その他	17,283	14,769
固定負債合計	432,149	396,199
負債合計	1,235,817	1,276,950
純資産の部		
株主資本		
資本金	99,737	99,737
資本剰余金	170,849	170,868
利益剰余金	1,160,601	1,216,207
自己株式	△20,749	△20,749
株主資本合計	1,410,438	1,466,063
その他の包括利益累計額		
その他有価証券評価差額金	86,251	83,430
繰延ヘッジ損益	△230	△128
為替換算調整勘定	238	△13,927
退職給付に係る調整累計額	42,756	15,445
その他の包括利益累計額合計	129,015	84,820
非支配株主持分	224,633	225,430
純資産合計	1,764,086	1,776,313
負債純資産合計	2,999,903	3,053,263

②【連結損益計算書及び連結包括利益計算書】

【連結損益計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
売上高	3,082,247	3,177,985
売上原価	※2, ※3 2,507,434	※2, ※3 2,593,363
売上総利益	574,813	584,622
販売費及び一般管理費	※1, ※2 401,674	※1, ※2 418,362
営業利益	173,139	166,260
営業外収益		
受取利息	1,178	1,192
受取配当金	4,023	4,609
持分法による投資利益	27,813	25,051
その他	10,105	14,423
営業外収益合計	43,119	45,275
営業外費用		
支払利息	5,514	6,897
その他	15,734	15,989
営業外費用合計	21,248	22,886
経常利益	195,010	188,649
特別利益		
退職給付信託返還益	—	※4 8,905
投資有価証券売却益	13,506	—
特別利益合計	13,506	8,905
特別損失		
固定資産除却損	※5 3,728	※5 3,094
減損損失	※6 3,439	※6 10,715
事業構造改善費用	※7 3,951	※7 2,357
海外工事事故関連損失	※8 4,061	—
特別損失合計	15,179	16,166
税金等調整前当期純利益	193,337	181,388
法人税、住民税及び事業税	48,918	51,118
法人税等調整額	4,431	63
法人税等合計	53,349	51,181
当期純利益	139,988	130,207
非支配株主に帰属する当期純利益	19,660	12,144
親会社株主に帰属する当期純利益	120,328	118,063

【連結包括利益計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
当期純利益	139,988	130,207
その他の包括利益		
その他有価証券評価差額金	8,360	△527
繰延ヘッジ損益	△377	135
為替換算調整勘定	1,594	1,123
退職給付に係る調整額	20,450	△26,463
持分法適用会社に対する持分相当額	10,788	△19,042
その他の包括利益合計	※ 40,815	※ △44,774
包括利益	180,803	85,433
(内訳)		
親会社株主に係る包括利益	158,163	73,835
非支配株主に係る包括利益	22,640	11,598

③【連結株主資本等変動計算書】

前連結会計年度（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）

（単位：百万円）

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	99,737	170,849	1,074,770	△20,736	1,324,620
当期変動額					
剰余金の配当			△34,324		△34,324
親会社株主に帰属する 当期純利益			120,328		120,328
自己株式の取得				△13	△13
自己株式の処分		0		0	0
連結範囲の変動			△84		△84
持分法の適用範囲の変動			△89		△89
非支配株主との取引に係る 親会社の持分変動					—
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）					
当期変動額合計	—	0	85,831	△13	85,818
当期末残高	99,737	170,849	1,160,601	△20,749	1,410,438

	その他の包括利益累計額					非支配株主 持分	純資産合計
	その他有価証 券評価差額金	繰延ヘッジ 損益	為替換算調整 勘定	退職給付に係 る調整累計額	その他の包括 利益累計額合計		
当期首残高	78,725	56	△9,019	21,372	91,134	212,861	1,628,615
当期変動額							
剰余金の配当							△34,324
親会社株主に帰属する 当期純利益							120,328
自己株式の取得							△13
自己株式の処分							0
連結範囲の変動							△84
持分法の適用範囲の変動							△89
非支配株主との取引に係る 親会社の持分変動							—
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）	7,526	△286	9,257	21,384	37,881	11,772	49,653
当期変動額合計	7,526	△286	9,257	21,384	37,881	11,772	135,471
当期末残高	86,251	△230	238	42,756	129,015	224,633	1,764,086

当連結会計年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

（単位：百万円）

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	99,737	170,849	1,160,601	△20,749	1,410,438
当期変動額					
剰余金の配当			△38,224		△38,224
親会社株主に帰属する 当期純利益			118,063		118,063
自己株式の取得				△3	△3
自己株式の処分		△0		3	3
連結範囲の変動			△299		△299
持分法の適用範囲の変動			△23,934		△23,934
非支配株主との取引に係る 親会社の持分変動		19			19
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）					
当期変動額合計	－	19	55,606	0	55,625
当期末残高	99,737	170,868	1,216,207	△20,749	1,466,063

	その他の包括利益累計額					非支配株主 持分	純資産合計
	その他有価証 券評価差額金	繰延ヘッジ 損益	為替換算調整 勘定	退職給付に係 る調整累計額	その他の包括 利益累計額合計		
当期首残高	86,251	△230	238	42,756	129,015	224,633	1,764,086
当期変動額							
剰余金の配当							△38,224
親会社株主に帰属する 当期純利益							118,063
自己株式の取得							△3
自己株式の処分							3
連結範囲の変動							△299
持分法の適用範囲の変動							△23,934
非支配株主との取引に係る 親会社の持分変動							19
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）	△2,821	102	△14,165	△27,311	△44,195	797	△43,398
当期変動額合計	△2,821	102	△14,165	△27,311	△44,195	797	12,227
当期末残高	83,430	△128	△13,927	15,445	84,820	225,430	1,776,313

④【連結キャッシュ・フロー計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
営業活動によるキャッシュ・フロー		
税金等調整前当期純利益	193,337	181,388
減価償却費	141,439	148,916
減損損失	3,751	11,879
のれん償却額	2,205	2,140
受取利息及び受取配当金	△5,201	△5,801
支払利息	5,514	6,897
持分法による投資損益(△は益)	△27,813	△25,051
固定資産売却損益(△は益)	△600	△1,777
投資有価証券売却損益(△は益)	△13,462	△212
固定資産除却損	4,410	3,094
投資有価証券評価損益(△は益)	34	28
退職給付信託返還益	—	△8,905
売上債権の増減額(△は増加)	△18,750	△41,044
たな卸資産の増減額(△は増加)	△17,568	△60,006
仕入債務の増減額(△は減少)	△11,572	12,824
退職給付に係る資産負債の増減額	△5,734	7,916
その他	19,346	△26,620
小計	269,336	205,666
利息及び配当金の受取額	15,313	14,930
利息の支払額	△5,833	△6,901
和解金の支払額	△3,676	—
法人税等の支払額	△35,567	△36,039
営業活動によるキャッシュ・フロー	239,573	177,656
投資活動によるキャッシュ・フロー		
有形固定資産の取得による支出	△171,951	△178,046
有形固定資産の売却による収入	4,046	5,484
投資有価証券の取得による支出	△2,462	△2,411
投資有価証券の売却による収入	17,464	7,445
その他	△21,362	△17,073
投資活動によるキャッシュ・フロー	△174,265	△184,601

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
財務活動によるキャッシュ・フロー		
短期借入金の純増減額 (△は減少)	△5,143	49,043
長期借入れによる収入	22,865	48,464
長期借入金の返済による支出	△36,428	△51,221
社債の発行による収入	15,000	—
社債の償還による支出	△15,000	—
自己株式の取得による支出	△4	△3
配当金の支払額	△34,324	△38,224
非支配株主への配当金の支払額	△10,991	△9,926
連結の範囲の変更を伴わない子会社株式の取得による支出	△4	△1,698
その他	△2,766	△759
財務活動によるキャッシュ・フロー	△66,795	△4,324
現金及び現金同等物に係る換算差額	1,262	△639
現金及び現金同等物の増減額 (△は減少)	△225	△11,908
現金及び現金同等物の期首残高	180,002	180,108
新規連結に伴う現金及び現金同等物の増加額	127	673
非連結子会社との合併に伴う現金及び現金同等物の増加額	204	—
現金及び現金同等物の期末残高	※ 180,108	※ 168,873

【注記事項】

(連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項)

1. 連結の範囲に関する事項

(1) 連結の範囲に含めた子会社の数

357社

当連結会計年度より、株式取得、新規設立又は相対的重要性の増大により、3社を連結の範囲に含めております。

また、合併又は清算終了により、4社を連結の範囲から除外しております。

主要な連結子会社名は、本報告書の「第1 企業の概況 4. 関係会社の状況」に記載しているため省略しております。

(2) 主要な非連結子会社の名称等

主要な非連結子会社の名称

エス イー アイ エイチアール サービスズ インク

なお、非連結子会社は、いずれも小規模であり、合計の総資産、売上高、当期純損益及び利益剰余金等は、いずれも連結財務諸表に重要な影響を及ぼしておりません。

2. 持分法の適用に関する事項

(1) 持分法を適用した非連結子会社及び関連会社の数

持分法を適用した非連結子会社の数 2社

持分法を適用した関連会社の数 31社

株式会社ミライト・ホールディングスの当社保有株式の一部売却等により、関連会社4社を持分法適用の範囲から除外しております。

主要な持分法適用会社名は、本報告書の「第1 企業の概況 4. 関係会社の状況」に記載しているため省略しております。

(2) 持分法を適用していない非連結子会社及び関連会社の名称等

主要な会社等の名称

近畿電機株式会社

なお、持分法を適用していない非連結子会社及び関連会社は、当期純損益及び利益剰余金等からみて、持分法の対象から除いても連結財務諸表に及ぼす影響が軽微であり、かつ、全体としても重要性が乏しく、連結財務諸表に重要な影響を及ぼしておりません。

3. 連結子会社の事業年度等に関する事項

決算日が連結決算日と異なる連結子会社は、連結財務情報のより適正な開示を図るため、連結決算日において仮決算を実施した上で連結しております。

4. 会計方針に関する事項

(1) 重要な資産の評価基準及び評価方法

① 有価証券

満期保有目的の債券

償却原価法を採用しております。

その他有価証券

時価のあるもの

決算日の市場価格等に基づく時価法（評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定）を採用しております。

時価のないもの

移動平均法による原価法を採用しております。

② デリバティブ

時価法を採用しております。

③ たな卸資産

主として総平均法による原価法（貸借対照表価額については収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定）を採用しております。

(2) 重要な減価償却資産の減価償却の方法

有形固定資産（リース資産を除く）

定額法を採用しております。

(3) 重要な引当金の計上基準

① 貸倒引当金

債権の貸倒による損失に備えるため、一般債権については、貸倒実績率により算定した額を、貸倒懸念債権については、担保処分等による回収見込額を控除した残額のうち債務者の財政状況等を考慮して算定した額を、破産更生債権等については、担保処分等による回収見込額を控除した残額をそれぞれ貸倒見積額として計上しております。

② 役員退職慰労引当金

一部の国内連結子会社は、役員に対する退職慰労金の支払に充てるため、内規に基づく基準額を引当計上しております。

③ 役員賞与引当金

当社及び一部の国内連結子会社は、役員賞与の支出に備えて、当連結会計年度における支給見込額に基づき計上しております。

④ 完成工事補償引当金

一部の連結子会社は、完成工事に係る瑕疵担保の費用に備えるため、将来の見積補修額に基づいて計上しております。

⑤ 受注損失引当金

当社及び一部の連結子会社は、手持受注工事等のうち期末において損失が確実視され、かつ、その金額を合理的に見積ることができる工事等については、翌連結会計年度以降に発生が見込まれる損失を引当計上しております。

(4) 退職給付に係る会計処理の方法

① 退職給付見込額の期間帰属方法

退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当連結会計年度末までの期間に帰属させる方法については、給付算定式基準によっております。

② 数理計算上の差異及び過去勤務費用の費用処理方法

過去勤務費用は、その発生時の従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数（主として5年）による定額法により、また、一部の連結子会社は発生時に一括して費用処理しております。

数理計算上の差異は、各連結会計年度の発生時における従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数（主として14年）による定額法により按分した額をそれぞれ発生の翌連結会計年度から費用処理することとしております。なお、一部の連結子会社は発生時に一括して費用処理しております。

(5) 重要な収益及び費用の計上基準

完成工事高及び完成工事原価の計上基準

当連結会計年度末までの進捗部分について成果の確実性が認められる工事

工事進行基準（工事の進捗率の見積りは原価比例法）を適用しております。

その他の工事

工事完成基準を適用しております。

(6) 重要なヘッジ会計の方法

① ヘッジ会計の方法

繰延ヘッジ処理を採用しております。

なお、為替予約及び通貨スワップについては振当処理の要件を満たしている場合は振当処理を採用しております。また、金利スワップについては特例処理の要件を満たしている場合は特例処理を採用しております。

② ヘッジ手段とヘッジ対象

<u>ヘッジ手段</u>	<u>ヘッジ対象</u>
為替予約	外貨建債権債務及び外貨建予定取引
通貨スワップ	外貨建借入金等
金利スワップ	借入金等
商品先渡取引等	原材料

③ ヘッジ方針

当社及び連結子会社が実施している為替予約、通貨スワップ、金利スワップ及び商品先渡取引等は、各社の内部規程などにに基づき、為替変動リスク、金利変動リスク及び価格変動リスクを回避するために行っております。

④ ヘッジ有効性評価の方法

ヘッジ取引毎に、ヘッジ手段とヘッジ対象の対応関係を確認して評価しております。ただし、特例処理によっている金利スワップについては、有効性の評価を省略しております。

(7) のれんの償却方法及び償却期間

のれんの償却については、収益獲得見込期間等を勘案し、20年以内で均等償却を行っております。

なお、当連結会計年度における償却期間は主として5年又は10年となっております。

(8) 連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲

連結キャッシュ・フロー計算書における資金（現金及び現金同等物）は、手許現金、随時引き出し可能な預金及び容易に換金可能であり、かつ、価値の変動について僅少なリスクしか負わない取得日から3か月以内に償還期限の到来する短期投資からなっております。

(9) その他連結財務諸表作成のための重要な事項

① 消費税等の会計処理

消費税及び地方消費税の会計処理は、税抜方式によっております。

② 連結納税制度の適用

当社及び一部の連結子会社は、連結納税制度を適用しております。

(未適用の会計基準等)

(当社及び国内連結子会社)

- ・「収益認識に関する会計基準」(企業会計基準第29号 平成30年3月30日 企業会計基準委員会)
- ・「収益認識に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第30号 平成30年3月30日 企業会計基準委員会)

(1) 概要

国際会計基準審議会 (IASB) 及び米国財務会計基準審議会 (FASB) は、共同して収益認識に関する包括的な会計基準の開発を行い、2014年5月に「顧客との契約から生じる収益」(IASBにおいてはIFRS第15号、FASBにおいてはTopic606)を公表しており、IFRS第15号は2018年1月1日以後開始する事業年度から、Topic606は2017年12月15日より後に開始する事業年度から適用される状況を踏まえ、企業会計基準委員会において、収益認識に関する包括的な会計基準が開発され、適用指針と合わせて公表されたものであります。

企業会計基準委員会の収益認識に関する会計基準の開発にあたっての基本的な方針として、IFRS第15号と整合性を図る便益の一つである財務諸表間の比較可能性の観点から、IFRS第15号の基本的な原則を取り入れることを出発点とし、会計基準を定めることとされ、また、これまで我が国で行われてきた実務等に配慮すべき項目がある場合には、比較可能性を損なわせない範囲で代替的な取扱いを追加することとされております。

(2) 適用予定日

2021年3月期の期首からの適用を現在検討中であります。

(3) 当該会計基準等の適用による影響

影響額は、当連結財務諸表の作成時において評価中であります。

(在外連結子会社)

- ・「リース」(IFRS第16号 2016年1月13日、ASU第2016-02号 2016年2月25日)

(1) 概要

本会計基準は、リースの借手において、原則としてすべてのリースについて資産及び負債を認識すること等を要求するものであります。

(2) 適用予定日

IFRS第16号については、2020年3月期より適用予定であります。ASU第2016-02号については、2021年3月期より適用予定であります。

(3) 当該会計基準等の適用による影響

影響額は、当連結財務諸表の作成時において評価中であります。

(表示方法の変更)

(連結損益計算書)

前連結会計年度において、独立掲記しておりました「営業外費用」の「クレーム損」は金額的重要性が乏しくなったため、当連結会計年度においては「その他」に含めて表示しております。この表示方法の変更を反映させるため、前連結会計年度の連結財務諸表の組替えを行っております。

この結果、前連結会計年度の連結損益計算書において、「営業外費用」の「クレーム損」に表示していた5,334百万円は、「その他」として組み替えております。

(「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」の適用に伴う変更)

「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」(企業会計基準第28号 平成30年2月16日。以下「税効果会計基準一部改正」という。)を当連結会計年度の期首から適用しており、繰延税金資産は投資その他の資産の区分に表示し、繰延税金負債は固定負債の区分に表示する方法に変更するとともに、税効果会計関係注記を変更しております。

この結果、前連結会計年度の連結貸借対照表において、「流動資産」の「繰延税金資産」43,422百万円は、「固定負債」の「繰延税金負債」75,028百万円の内17,400百万円と相殺の上、「投資その他の資産」の「繰延税金資産」42,989百万円に含めて表示しております。また、「流動負債」の「その他」に表示していた繰延税金負債35百万円は、「固定負債」の「繰延税金負債」57,663百万円に含めて表示しております。なお、同一の納税主体の繰延税金資産と繰延税金負債を相殺した影響により、変更を行う前と比べて資産合計と負債合計はそれぞれ17,400百万円減少しております。

また、税効果会計関係注記において、税効果会計基準一部改正第3項から第5項に定める「税効果会計に係る会計基準」注解(注8)(評価性引当額の合計額を除く。)及び同注解(注9)に記載された内容を追加しております。ただし、当該内容のうち前連結会計年度に係る内容については、税効果会計基準一部改正第7項に定める経過的な取り扱いに従って記載しておりません。

(連結貸借対照表関係)

※1 たな卸資産の内訳は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
商品及び製品	148,328百万円	162,318百万円
仕掛品	160,647	181,055
原材料及び貯蔵品	157,462	185,416

※2 非連結子会社及び関連会社に対するものは、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
投資有価証券(株式)	311,435百万円(22,802百万円)	276,257百万円(21,806百万円)

上記のうち、()内書は共同支配企業に対する投資の金額を示しております。

※3 担保資産及び担保付債務

担保に供している資産は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
有形固定資産	2,554百万円(一百万円)	2,370百万円(一百万円)

担保付債務は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
短期借入金	377百万円(一百万円)	483百万円(一百万円)
長期借入金	238(一)	124(一)
計	615(一)	607(一)

上記のうち、()内書は財団抵当並びに当該債務を示しております。

4 保証債務

保証先の銀行借入金等に対する債務保証及び保証予約等は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)		当連結会計年度 (2019年3月31日)
富通住電特種光纜（天津）有限公司	1,907百万円	富通住電光纜（嘉興）有限公司	1,895百万円
富通住電光纜（嘉興）有限公司	1,501	大興住理工橡塑材料（塩城）有限公司	857
従業員（財形銀行融資等）	302	従業員（財形銀行融資等）	236
その他	638	その他	296
計	4,348	計	3,284

5 受取手形割引高

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
受取手形割引高	2,177百万円	－百万円

6 受取手形裏書譲渡高

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
受取手形裏書譲渡高	446百万円	677百万円

7 その他

前連結会計年度（2018年3月31日）

自動車関連事業分野の競争法違反行為について、一部の自動車メーカーと損害賠償に関する交渉を行っております。

当連結会計年度（2019年3月31日）

自動車関連事業分野の競争法違反行為について、一部の自動車メーカーと損害賠償に関する交渉を行っております。

（連結損益計算書関係）

※1 販売費及び一般管理費のうち主要な費目及び金額は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
荷造費、運送費及び販売諸経費	81,026百万円	86,684百万円
給料手当及び福利費	143,731	146,188
退職給付費用	1,581	△1,897
研究開発費	58,109	65,051

※2 一般管理費及び当期製造費用に含まれる研究開発費の総額は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
	117,735百万円	129,627百万円

※3 売上原価に含まれる受注損失引当金繰入額は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
	5,935百万円	3,027百万円

※4 退職給付信託返還益

当連結会計年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

当社及び一部の連結子会社で退職給付信託の一部返還に伴い当該返還額に対応する未認識数理計算上の差異を一括処理したものです。

※5 固定資産除却損の主な内容は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
建物及び構築物	1,470百万円	762百万円
機械装置及び運搬具	1,609	1,805
工具、器具及び備品	526	466

※6 減損損失

前連結会計年度（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）

当社グループは以下の資産グループについて減損損失を計上しました。

場所	用途	種類	減損損失 (百万円)
—	販売用ソフトウェア	無形固定資産	568
中国広東省深セン市	フレキシブルプリント回路製造設備等	機械装置等	417
愛知県小牧市	一般産業用品製造設備等	機械装置等	364
伊丹製作所（兵庫県伊丹市）	研究開発設備等	建物、機械装置等	294
大阪製作所（大阪市此花区）他	建屋、製造設備等	建物、機械装置等	2,108
合計			3,751

上記のうち、減損損失として表示したもの

3,439

上記のうち、事業構造改善費用として表示したもの（※7参照）

312

当社グループは、主として事業部別にグルーピングを行っており、合計3,751百万円を特別損失（うち312百万円は事業構造改善費用として表示しております。※7参照）に計上しました。

その内訳は、機械装置及び運搬具2,047百万円、無形固定資産648百万円、建物及び構築物427百万円、工具、器具及び備品他629百万円であります。

上記の販売用ソフトウェアは、北米CATV事業者向けアクセス系ネットワーク機器事業に関する販売用ソフトウェアについて、業務提携先に対し技術情報の開示を行ったことに伴い、未償却残高が翌期以降の見込販売収益の額を上回ることとなったため、当該超過額を損失処理しております。

上記のフレキシブルプリント回路製造設備等は、製品のモデルチェンジ等に伴い、将来の使用見込みがなくなった資産について、帳簿価額を回収可能価額まで減額しております。回収可能価額は主として正味売却価額により測定しており、売却可能価額等に基づいた時価で評価しております。

上記の一般産業用品製造設備等は、当初想定していた収益性が見込まれなくなったことから、帳簿価額を回収可能価額まで減額しております。回収可能価額は使用価値により測定しており、将来キャッシュ・フローを5%で割り引いて算定しております。

上記の研究開発設備等は、当社伊丹製作所の研究棟整備に伴い、将来の使用見込みがなくなった資産について、帳簿価額を回収可能価額まで減額しております。回収可能価額は主として正味売却価額により測定しており、売却可能価額等に基づいた時価で評価しております。

上記のほか、遊休状態にあり将来の用途が定まっていない又は将来遊休化する見込みである建屋や製造設備等についても帳簿価額を回収可能価額まで減額しております。回収可能価額は主として正味売却価額により測定しており、売却可能価額等に基づいた時価で評価しております。

当連結会計年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

当社グループは以下の資産グループについて減損損失を計上しました。

場所	用途	種類	減損損失 (百万円)
—	その他	のれん	4,537
千葉県松戸市他	独身寮等	土地、建物等	2,548
ドイツ ヘッセン州他	自動車用防振ゴム製造設備等	機械装置、無形固定資産等	2,213
山梨県中巨摩郡他	光デバイス製造設備等	機械装置等	952
伊丹製作所（兵庫県伊丹市）他	製造設備等	機械装置等	1,629
合計			11,879

上記のうち、減損損失として表示したもの 10,715

上記のうち、事業構造改善費用として表示したもの（※7参照） 1,164

当社グループは、主として事業部別にグルーピングを行っており、合計11,879百万円を特別損失（うち1,164百万円は事業構造改善費用として表示しております。※7参照）に計上しました。

その内訳は、のれん4,537百万円、機械装置及び運搬具2,615百万円、土地1,771百万円、建物及び構築物1,275百万円、無形固定資産929百万円、工具、器具及び備品他752百万円であります。

上記ののれんの減損損失は、欧州の自動車用防振ゴム事業会社を買収した際に計上したのれんについて、欧州市場の低迷が長期化していることなどをを受け事業計画を見直した結果、投資の全額を回収するには長期間を要すると判断し、「連結財務諸表における資本連結手続に関する実務指針」（会計制度委員会報告第7号 平成30年2月16日）第32項の規定に基づき、当該のれんを減損処理したものであります。

上記の独身寮等は、閉鎖・売却する方針を決議したことに伴い、帳簿価額を回収可能価額まで減額しております。回収可能価額は正味売却価額により測定しており、主として不動産鑑定評価額に基づいて評価しております。

上記の自動車用防振ゴム製造設備等は、当初想定していた収益性が見込めなくなったことから、帳簿価額を回収可能価額まで減額しております。回収可能価額は主として使用価値に基づき測定しており、将来キャッシュ・フローを8～20%で割引いて算定しております。

上記の光デバイス製造設備等は、一部製品からの撤退等に伴い、将来の使用見込みがなくなった資産について、帳簿価額を回収可能価額まで減額しております。回収可能価額は主として正味売却価額により測定しており、売却可能価額等に基づいた時価で評価しております。

上記のほか、遊休状態にあり将来の用途が定まっていない又は将来遊休化する見込みである製造設備等についても帳簿価額を回収可能価額まで減額しております。回収可能価額は主として正味売却価額により測定しており、売却可能価額等に基づいた時価で評価しております。

※7 事業構造改善費用

前連結会計年度（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）

ワイヤーハーネス事業等の効率化を目的とした事業拠点の再編に伴うものであり、主な内容は特別退職金2,121百万円及び固定資産除却損682百万円であります。

当連結会計年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

光デバイス事業等の効率化を目的とした一部製品からの撤退等に伴うものであり、主な内容は減損損失1,164百万円及びたな卸資産評価損578百万円であります。

※8 海外工事故関連損失

前連結会計年度（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）

海外での高圧電力海底ケーブル工事において、布設済ケーブルが外部要因により損傷した事故に関連する復旧費用等を計上しております。なお、事故に関する受取保険金や補償金は、受取保険金のうち入金がほぼ確実となった部分については収益を計上しておりますが、その他の部分については現時点で確定していないため計上しておりません。

(連結包括利益計算書関係)

※ その他の包括利益に係る組替調整額及び税効果額

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
その他有価証券評価差額金：		
当期発生額	24,905百万円	12百万円
組替調整額	△13,404	△531
税効果調整前	11,501	△519
税効果額	△3,141	△8
その他有価証券評価差額金	8,360	△527
繰延ヘッジ損益：		
当期発生額	△160	307
組替調整額	△432	△153
税効果調整前	△592	154
税効果額	215	△19
繰延ヘッジ損益	△377	135
為替換算調整勘定：		
当期発生額	1,477	1,123
組替調整額	117	—
税効果調整前	1,594	1,123
税効果額	—	—
為替換算調整勘定	1,594	1,123
退職給付に係る調整額：		
当期発生額	32,736	△25,906
組替調整額	△3,639	△12,113
税効果調整前	29,097	△38,019
税効果額	△8,647	11,556
退職給付に係る調整額	20,450	△26,463
持分法適用会社に対する持分相当額：		
当期発生額	10,861	△18,673
組替調整額	△73	△369
持分法適用会社に対する持分相当額	10,788	△19,042
その他の包括利益合計	40,815	△44,774

(注) 持分法適用会社に対する持分相当額の組替調整額は資産の取得原価調整額を含めて表示しております。

(連結株主資本等変動計算書関係)

前連結会計年度(自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)

1. 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

	当連結会計年度期首 株式数(千株)	当連結会計年度 増加株式数(千株)	当連結会計年度 減少株式数(千株)	当連結会計年度末 株式数(千株)
発行済株式				
普通株式	793,941	—	—	793,941
合計	793,941	—	—	793,941
自己株式				
普通株式(注)1, 2	14,049	8	0	14,057
合計	14,049	8	0	14,057

(注) 1. 普通株式の自己株式の株式数の増加8千株は、単元未満株式の買取による増加2千株、持分法適用関連会社が取得した自己株式(当社株式)の当社帰属分6千株であります。

2. 普通株式の自己株式の株式数の減少0千株は、単元未満株式の買増請求による減少0千株であります。

2. 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
2017年6月28日 定時株主総会	普通株式	17,942	23.00	2017年3月31日	2017年6月29日
2017年11月7日 取締役会	普通株式	16,382	21.00	2017年9月30日	2017年12月1日

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	配当の原資	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
2018年6月27日 定時株主総会	普通株式	19,502	利益剰余金	25.00	2018年3月31日	2018年6月28日

当連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

1. 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

	当連結会計年度期首 株式数(千株)	当連結会計年度 増加株式数(千株)	当連結会計年度 減少株式数(千株)	当連結会計年度末 株式数(千株)
発行済株式				
普通株式	793,941	—	—	793,941
合計	793,941	—	—	793,941
自己株式				
普通株式(注)1, 2	14,057	7	18	14,047
合計	14,057	7	18	14,047

(注) 1. 普通株式の自己株式の株式数の増加7千株は、単元未満株式の買取による増加2千株、持分法適用関連会社が取得した自己株式(当社株式)の当社帰属分5千株であります。

2. 普通株式の自己株式の株式数の減少18千株は、単元未満株式の買増請求による減少0千株及び持分法の適用範囲から除外した関連会社の自己株式(当社株式)の当社帰属分17千株によるものであります。

2. 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
2018年6月27日 定時株主総会	普通株式	19,502	25.00	2018年3月31日	2018年6月28日
2018年11月1日 取締役会	普通株式	18,722	24.00	2018年9月30日	2018年12月3日

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	配当の原資	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
2019年6月21日 定時株主総会	普通株式	18,722	利益剰余金	24.00	2019年3月31日	2019年6月24日

(連結キャッシュ・フロー計算書関係)

※ 現金及び現金同等物の期末残高と連結貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
現金及び預金勘定	178,918百万円	167,225百万円
有価証券に含まれる現金同等物	2,065	2,084
預入期間が3か月を超える定期預金	△875	△436
現金及び現金同等物	180,108	168,873

(リース取引関係)

(借主側)

1. ファイナンス・リース取引

所有権移転外ファイナンス・リース取引

リース資産の減価償却の方法

リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法によっております。

2. オペレーティング・リース取引

オペレーティング・リース取引のうち解約不能のものに係る未経過リース料

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
1年内	4,859	5,254
1年超	16,781	15,225
合計	21,640	20,479

(金融商品関係)

1. 金融商品の状況に関する事項

(1) 金融商品に対する取組方針

当社グループは、事業運営に必要な設備資金や運転資金等をキャッシュ・フロー計画に基づき調達（主に銀行借入や社債発行）しております。一時的な余資は安全性の高い金融資産で運用しております。また、デリバティブは、後述するリスクを回避するために利用しており、投機的な取引は行わない方針であります。

(2) 金融商品の内容及びそのリスク

営業債権である受取手形及び売掛金は、顧客の信用リスクに晒されております。また、グローバルに事業を展開していることから生じている外貨建営業債権は、為替の変動リスクに晒されておりますが、原則として外貨建営業債務をネットしたポジションについて先物為替予約取引等を利用してヘッジしております。有価証券及び投資有価証券は、主に取引先企業との長期的な取引関係の維持構築等のために保有する株式であり、市場価格の変動リスクに晒されております。

営業債務である支払手形及び買掛金は、ほとんど1年以内の支払期日であります。また、その一部には、原料等の輸入に伴う外貨建のものがあり、為替の変動リスクに晒されておりますが、恒常的に同じ外貨建の売掛金残高の範囲内にあります。借入金及び社債は、主に設備投資や運転資金等に必要な資金の調達を目的としたものであります。このうち一部は、金利変動に伴うキャッシュ・フロー変動リスク又は公正価値の変動リスクをヘッジするためデリバティブ取引（金利スワップ取引等）を利用しております。

デリバティブ取引は、外貨建債権債務に係る為替の変動リスクに対するヘッジ取引を目的とした先物為替予約取引等、借入金及び社債に係る金利変動に伴うキャッシュ・フロー変動リスク又は公正価値変動リスクに対するヘッジ取引を目的とした金利スワップ取引等、原材料に係る価格変動リスクに対するヘッジ取引を目的とした商品先渡取引等であります。なお、ヘッジ会計に関するヘッジ手段とヘッジ対象、ヘッジ方針、ヘッジの有効性の評価方法等については、「連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項 4.

(6) 重要なヘッジ会計の方法」に記載しております。

(3) 金融商品に係るリスク管理体制

① 信用リスク（取引先の契約不履行等に係るリスク）の管理

当社は、与信管理規程に従い、営業債権について、各事業部門における営業部門が主要な取引先の状況を定期的にモニタリングし、取引相手ごとに期日及び残高を管理するとともに、財務状況等の悪化等による回収懸念の早期把握や軽減を図っております。連結子会社についても、当社の与信管理規程に準じて、同様の管理を行っております。

デリバティブ取引の利用にあたっては、カウンターパーティーリスクを軽減するために、信用力の高い金融機関及び商社とのみ取引を行っております。

② 市場リスク（為替や金利等の変動リスク）の管理

当社及び一部の連結子会社は、外貨建債権債務について、通貨別月別に把握された為替の変動リスクに対して、原則として先物為替予約取引等を利用してヘッジしております。予定取引により確実に発生すると見込まれる外貨建営業債権債務に対しても原則として先物為替予約取引等を行っております。また、当社及び一部の連結子会社は、借入金及び社債等の金融商品に係る金利変動に伴うキャッシュ・フローの変動リスク又は公正価値の変動リスクを抑制するために、金利スワップ取引等を利用しております。

有価証券及び投資有価証券については、定期的に時価や発行体（取引先企業）の財務状況等を把握し、継続保有の必要性を見直しております。

デリバティブ取引については、当社は取引権限や限度額等を定めたデリバティブ取引管理規程に基づき、取引主管部署が取引・記帳を行い、管理業務担当部署において契約先と残高照合等を行っております。一部の連結子会社についても、当社のデリバティブ取引管理規程に準じて、管理を行っております。

③ 資金調達に係る流動性リスク（支払期日に支払いを実行できなくなるリスク）の管理

当社は、各部署からの報告に基づき財務部が適時にキャッシュ・フロー計画を作成・更新するとともに、事業運営に必要な手許流動性を維持することなどにより管理しております。連結子会社についても、当社の運営方針に準じて管理を行っております。

(4) 金融商品の時価等に関する事項についての補足説明

金融商品の時価には、市場価格に基づく価額のほか、市場価格がない場合には合理的に算定された価額が含まれております。当該価額の算定においては変動要因を織り込んでいるため、異なる前提条件等を採用することにより、当該価額が変動することもあります。

また、「デリバティブ取引関係」注記におけるデリバティブ取引に関する契約額等については、その金額自体がデリバティブ取引に係る市場リスクを示すものではありません。

2. 金融商品の時価等に関する事項

連結貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額については、次のとおりであります。なお、時価を把握することが極めて困難と認められるものは、次表には含めておりません（（注）2. 参照）。

前連結会計年度（2018年3月31日）

	連結貸借対照表計上額 (百万円)	時価 (百万円)	差額 (百万円)
(1) 現金及び預金	178,918	178,918	—
(2) 受取手形及び売掛金	668,616	668,616	—
(3) 有価証券及び投資有価証券	384,356	624,336	239,980
資産計	1,231,890	1,471,870	239,980
(1) 支払手形及び買掛金	367,297	367,297	—
(2) 短期借入金	186,931	186,931	—
(3) 社債	74,805	75,338	533
(4) 長期借入金	226,627	229,801	3,174
負債計	855,660	859,367	3,707
デリバティブ取引（*）	422	422	—

（*） デリバティブ取引によって生じた正味の債権・債務は純額で表示しており、合計で正味の債務となる項目については（ ）で示しております。

当連結会計年度（2019年3月31日）

	連結貸借対照表計上額 (百万円)	時価 (百万円)	差額 (百万円)
(1) 現金及び預金	167,225	167,225	—
(2) 受取手形及び売掛金	708,617	708,617	—
(3) 有価証券及び投資有価証券	351,589	466,752	115,163
資産計	1,227,431	1,342,594	115,163
(1) 支払手形及び買掛金	379,844	379,844	—
(2) 短期借入金	248,583	248,583	—
(3) 社債	74,828	75,966	1,138
(4) 長期借入金	213,330	216,805	3,475
負債計	916,585	921,198	4,613
デリバティブ取引（*）	1,261	1,261	—

（*） デリバティブ取引によって生じた正味の債権・債務は純額で表示しており、合計で正味の債務となる項目については（ ）で示しております。

（注）1. 金融商品の時価の算定方法並びに有価証券及びデリバティブ取引に関する事項

資 産

(1) 現金及び預金、並びに (2) 受取手形及び売掛金

これらは短期間で決済されるため、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額によっております。

(3) 有価証券及び投資有価証券

有価証券は、短期間で決済されるため、時価は帳簿価額にほぼ等しいことから、当該帳簿価額によっております。投資有価証券は、市場価格のあるものは、市場価格によっており、市場価格のないものは、対象金融資産から発生する将来キャッシュ・フローを割り引くこと等により算定しております。また、保有目的ごとの有価証券に関する事項については、「有価証券関係」注記をご参照下さい。

負 債

(1) 支払手形及び買掛金

これらは短期間で決済されるため、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額によっております。

(2) 短期借入金

これらは1年以内に弁済期限が到来するため、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額によっております。

(3) 社債

これらの時価は、市場価格に基づいております。

(4) 長期借入金

これらの時価は、元利金の合計額を、新規に同様の借入を行った場合に想定される利率で割り引いた現在価値により算定しております。

デリバティブ取引

「デリバティブ取引関係」注記をご参照下さい。

2. 時価を把握することが極めて困難と認められる金融商品

(単位：百万円)

区分	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
非上場株式等(その他有価証券)	5,961	6,443
非上場関連会社株式等	90,509	90,611

これらについては、市場価格がなく、かつ将来キャッシュ・フローを見積ることなどができず、時価を把握することが極めて困難と認められるため、「(3)有価証券及び投資有価証券」には含めておりません。

3. 金銭債権及び満期のある有価証券の連結決算日後の償還予定額

前連結会計年度(2018年3月31日)

	1年以内 (百万円)	1年超 5年以内 (百万円)	5年超 10年以内 (百万円)	10年超 (百万円)
現金及び預金	178,918	—	—	—
受取手形及び売掛金	652,996	15,620	—	—
有価証券及び投資有価証券				
満期保有目的の債券				
(1) 国債・地方債等	—	—	—	—
(2) 社債	—	—	—	—
その他有価証券のうち満期があるもの				
(1) 債券	—	—	—	—
(2) その他	2,006	—	—	—
合計	833,920	15,620	—	—

当連結会計年度(2019年3月31日)

	1年以内 (百万円)	1年超 5年以内 (百万円)	5年超 10年以内 (百万円)	10年超 (百万円)
現金及び預金	167,225	—	—	—
受取手形及び売掛金	689,022	19,595	—	—
有価証券及び投資有価証券				
満期保有目的の債券				
(1) 国債・地方債等	—	—	—	—
(2) 社債	—	—	—	—
その他有価証券のうち満期があるもの				
(1) 債券	—	—	—	—
(2) その他	2,025	—	—	—
合計	858,272	19,595	—	—

4. 社債、長期借入金及びその他の有利子負債の連結決算日後の返済予定額

前連結会計年度(2018年3月31日)

	1年以内 (百万円)	1年超 2年以内 (百万円)	2年超 3年以内 (百万円)	3年超 4年以内 (百万円)	4年超 5年以内 (百万円)	5年超 (百万円)
短期借入金	136,648	—	—	—	—	—
社債	—	—	—	10,000	10,000	55,000
長期借入金	50,283	60,097	50,251	46,599	27,992	41,688
合計	186,931	60,097	50,251	56,599	37,992	96,688

当連結会計年度(2019年3月31日)

	1年以内 (百万円)	1年超 2年以内 (百万円)	2年超 3年以内 (百万円)	3年超 4年以内 (百万円)	4年超 5年以内 (百万円)	5年超 (百万円)
短期借入金	187,432	—	—	—	—	—
社債	—	—	10,000	10,000	—	55,000
長期借入金	61,151	50,979	46,619	43,039	35,203	37,490
合計	248,583	50,979	56,619	53,039	35,203	92,490

(有価証券関係)

1. その他有価証券

前連結会計年度 (2018年3月31日)

	種類	連結貸借対照表 計上額 (百万円)	取得原価 (百万円)	差額 (百万円)
連結貸借対照表計上額 が取得原価を超えるもの	(1) 株式	150,795	23,637	127,158
	(2) 債券			
	① 国債・地方債等	—	—	—
	② 社債	—	—	—
	③ その他	—	—	—
	(3) その他	10,266	10,000	266
	小計	161,061	33,637	127,424
連結貸借対照表計上額 が取得原価を超えないもの	(1) 株式	304	379	△75
	(2) 債券			
	① 国債・地方債等	—	—	—
	② 社債	—	—	—
	③ その他	—	—	—
	(3) その他	2,065	2,065	—
	小計	2,369	2,444	△75
合計		163,430	36,081	127,349

(注) 非上場株式等 (連結貸借対照表計上額5,961百万円) については、市場価格がなく、かつ将来キャッシュ・フローを見積ることなどができず、時価を把握することが極めて困難と認められるため、上表の「その他有価証券」には含めておりません。

当連結会計年度 (2019年3月31日)

	種類	連結貸借対照表 計上額 (百万円)	取得原価 (百万円)	差額 (百万円)
連結貸借対照表計上額 が取得原価を超えるもの	(1) 株式	151,795	24,892	126,903
	(2) 債券			
	① 国債・地方債等	—	—	—
	② 社債	—	—	—
	③ その他	—	—	—
	(3) その他	10,135	10,000	135
	小計	161,930	34,892	127,038
連結貸借対照表計上額 が取得原価を超えないもの	(1) 株式	1,929	2,242	△313
	(2) 債券			
	① 国債・地方債等	—	—	—
	② 社債	—	—	—
	③ その他	—	—	—
	(3) その他	2,084	2,084	—
	小計	4,013	4,326	△313
合計		165,943	39,218	126,725

(注) 非上場株式等 (連結貸借対照表計上額6,443百万円) については、市場価格がなく、かつ将来キャッシュ・フローを見積ることなどができず、時価を把握することが極めて困難と認められるため、上表の「その他有価証券」には含めておりません。

2. 売却したその他有価証券

前連結会計年度（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）

種類	売却額 (百万円)	売却益の合計額 (百万円)	売却損の合計額 (百万円)
(1) 株式	16,706	13,424	33
(2) 債券			
① 国債・地方債等	—	—	—
② 社債	—	—	—
③ その他	—	—	—
(3) その他	—	—	—
合計	16,706	13,424	33

当連結会計年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

種類	売却額 (百万円)	売却益の合計額 (百万円)	売却損の合計額 (百万円)
(1) 株式	2,906	517	24
(2) 債券			
① 国債・地方債等	—	—	—
② 社債	—	—	—
③ その他	—	—	—
(3) その他	—	—	—
合計	2,906	517	24

3. 保有目的を変更した有価証券

前連結会計年度（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）

該当事項はありません。

当連結会計年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

従来、関連会社株式として保有していた(株)ミライト・ホールディングスの株式は、当該株式の一部売却により、関連会社株式に該当しなくなったため、その他有価証券（連結貸借対照表計上額27,816百万円）に変更しております。

4. 減損処理を行った有価証券

前連結会計年度（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）

有価証券について34百万円（その他有価証券の株式34百万円）減損処理を行っております。

当連結会計年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

有価証券について28百万円（その他有価証券の株式28百万円）減損処理を行っております。

(デリバティブ取引関係)

1. ヘッジ会計が適用されていないデリバティブ取引

(1) 通貨関連

前連結会計年度 (2018年3月31日)

区分	取引の種類	契約額等 (百万円)	契約額等の うち1年超 (百万円)	時価 (百万円)	評価損益 (百万円)
市場取引以外の取引	為替予約取引等				
	売建				
	米ドル	6,719	2	48	48
	ユーロ	66,257	—	14	14
	その他	7,329	746	311	311
	買建				
	米ドル	10,682	—	△156	△156
	ユーロ	389	—	0	0
	タイバーツ	8,516	—	0	0
	その他	2,387	—	1	1
	合計	102,279	748	218	218

(注) 時価の算定方法 取引先金融機関等から提示された価格等に基づき算定しております。

当連結会計年度 (2019年3月31日)

区分	取引の種類	契約額等 (百万円)	契約額等の うち1年超 (百万円)	時価 (百万円)	評価損益 (百万円)
市場取引以外の取引	為替予約取引等				
	売建				
	米ドル	10,946	2	△70	△70
	ユーロ	63,920	—	575	575
	その他	7,385	802	102	102
	買建				
	米ドル	10,424	—	78	78
	ユーロ	600	—	2	2
	タイバーツ	11,889	—	△52	△52
	その他	2,481	—	7	7
	合計	107,645	804	642	642

(注) 時価の算定方法 取引先金融機関等から提示された価格等に基づき算定しております。

(2) 金利関連

前連結会計年度 (2018年3月31日)

区分	取引の種類	契約額等 (百万円)	契約額等の うち1年超 (百万円)	時価 (百万円)	評価損益 (百万円)
市場取引以外の取引	金利通貨スワップ取引 変動受取・固定支払	597	597	△56	△56
	合計	597	597	△56	△56

(注) 時価の算定方法 取引先金融機関等から提示された価格等に基づき算定しております。

当連結会計年度 (2019年3月31日)

区分	取引の種類	契約額等 (百万円)	契約額等の うち1年超 (百万円)	時価 (百万円)	評価損益 (百万円)
市場取引以外の取引	金利通貨スワップ取引 変動受取・固定支払	623	623	0	0
	合計	623	623	0	0

(注) 時価の算定方法 取引先金融機関等から提示された価格等に基づき算定しております。

(3) 商品関連

前連結会計年度 (2018年3月31日)

区分	取引の種類	契約額等 (百万円)	契約額等のうち1年超 (百万円)	時価 (百万円)	評価損益 (百万円)
市場取引以外の取引	銅LME先物取引				
	売建	1,721	—	19	19
	買建	749	—	1	1
	合計	2,470	—	20	20

(注) 時価の算定方法 取引先ブローカー等から提示された価格等に基づき算定しております。

当連結会計年度 (2019年3月31日)

区分	取引の種類	契約額等 (百万円)	契約額等のうち1年超 (百万円)	時価 (百万円)	評価損益 (百万円)
市場取引以外の取引	銅LME先物取引				
	売建	10,425	—	△106	△106
	買建	5,715	—	10	10
	合計	16,140	—	△96	△96

(注) 時価の算定方法 取引先ブローカー等から提示された価格等に基づき算定しております。

2. ヘッジ会計が適用されているデリバティブ取引

(1) 通貨関連

前連結会計年度 (2018年3月31日)

ヘッジ会計の方法	取引の種類	主な ヘッジ対象	契約額等 (百万円)	契約額等のうち1年超 (百万円)	時価 (百万円)
為替予約等の振当 処理	為替予約取引				
	売建				
	米ドル	外貨建 債権債務	102,966	1,715	172
	ユーロ		18,461	3,934	195
	その他		22,054	305	21
	買建				
	米ドル		23,238	—	△173
	ユーロ		1,586	81	25
その他		2,569	—	△57	
原則的処理方法	為替予約取引				
	売建				
	米ドル	外貨建 債権債務	162	—	7
	ユーロ		620	—	△34
	台湾ドル		19,235	—	33
	その他		607	—	33
	買建				
	米ドル		8	—	0
その他		2,074	—	90	
	合計		193,580	6,035	312

(注) 1. 時価の算定方法 先物為替相場等に基づいて算定しております。

2. 為替予約等の振当処理 (ただし、予定取引をヘッジ対象としている場合を除く。) によるものは、ヘッジ対象とされている外貨建債権債務と一体として処理されているため、その時価は、当該外貨建債権債務の時価に含めて記載しております。

当連結会計年度（2019年3月31日）

ヘッジ会計の方法	取引の種類	主なヘッジ対象	契約額等 (百万円)	契約額等の うち1年超 (百万円)	時価 (百万円)	
為替予約等の振当 処理	為替予約取引 売建	外貨建 債権債務				
	米ドル		104,068	229	△27	
	ユーロ		15,348	—	20	
	その他		27,368	1,452	△129	
	買建					
	米ドル		21,598	—	13	
	ユーロ		3,197	10	△44	
その他	7,835	5,633	87			
原則的処理方法	為替予約取引 売建	外貨建 債権債務				
	米ドル		139	—	0	
	ユーロ		5,305	—	132	
	台湾ドル		22,480	—	468	
	その他		312	—	△1	
	買建					
	米ドル		985	—	6	
ユーロ	38	—	—			
その他	2,450	—	16			
合計			211,123	7,324	541	

(注) 1. 時価の算定方法 先物為替相場等に基づいて算定しております。

2. 為替予約等の振当処理（ただし、予定取引をヘッジ対象としている場合を除く。）によるものは、ヘッジ対象とされている外貨建債権債務と一体として処理されているため、その時価は、当該外貨建債権債務の時価に含めて記載しております。

(2) 金利関連

前連結会計年度（2018年3月31日）

ヘッジ会計の方法	取引の種類	主なヘッジ対象	契約額等 (百万円)	契約額等の うち1年超 (百万円)	時価 (百万円)
金利スワップの特例 処理	金利スワップ取引 変動受取・固定支払	借入金	148,346	124,332	(*)
合計			148,346	124,332	—

(*) 金利スワップの特例処理によるものは、ヘッジ対象とされている借入金と一体として処理されているため、その時価は、当該借入金の時価に含めて記載しております。

(注) 時価の算定方法 取引先金融機関等から提示された価格等に基づき算定しております。

当連結会計年度（2019年3月31日）

ヘッジ会計の方法	取引の種類	主なヘッジ対象	契約額等 (百万円)	契約額等の うち1年超 (百万円)	時価 (百万円)
金利スワップの特例 処理	金利スワップ取引 変動受取・固定支払	借入金	124,620	100,581	(*)
合計			124,620	100,581	—

(*) 金利スワップの特例処理によるものは、ヘッジ対象とされている借入金と一体として処理されているため、その時価は、当該借入金の時価に含めて記載しております。

(注) 時価の算定方法 取引先金融機関等から提示された価格等に基づき算定しております。

(3) 商品関連

前連結会計年度 (2018年3月31日)

ヘッジ会計の方法	取引の種類	主なヘッジ対象	契約額等 (百万円)	契約額等の うち1年超 (百万円)	時価 (百万円)
原則的処理方法	銅LME先物取引 売建	原材料	989	—	△18
	買建		7	—	0
	ニッケルLME先物取引 売建	原材料	1,046	—	△80
	買建		151	—	△1
	アルミLME先物取引 売建	原材料	943	—	73
	買建		381	—	△26
	銅スワップ取引 変動受取・固定支払	原材料	1,341	187	△30
	固定受取・変動支払		76	48	14
	銀スワップ取引 変動受取・固定支払	原材料	143	90	1
	固定受取・変動支払		40	20	△5
合計			5,117	345	△72

(注) 時価の算定方法 取引先ブローカー等から提示された価格等に基づき算定しております。

当連結会計年度 (2019年3月31日)

ヘッジ会計の方法	取引の種類	主なヘッジ対象	契約額等 (百万円)	契約額等の うち1年超 (百万円)	時価 (百万円)	
原則的処理方法	銅LME先物取引 売建	原材料	2,882	—	△2	
	買建		16	—	1	
	ニッケルLME先物取引 売建	原材料	1,384	—	△69	
	買建		1,193	—	185	
	アルミLME先物取引 売建	原材料	570	—	△14	
	買建		86	—	1	
	銅スワップ取引 変動受取・固定支払	原材料	1,192	72	79	
	銀スワップ取引 変動受取・固定支払		84	28	△7	
	合計			7,407	100	174

(注) 時価の算定方法 取引先ブローカー等から提示された価格等に基づき算定しております。

(退職給付関係)

1. 採用している退職給付制度の概要

当社及び国内連結子会社は、確定給付型の制度として、企業年金基金制度、厚生年金基金制度、退職一時金制度及び社内年金制度等を設けております。また、当社及び一部の国内連結子会社は、確定拠出年金制度及び前払退職金制度を設けております。なお、従業員の退職等に関して、退職給付会計に準拠した数理計算による退職給付債務の対象とされない割増退職金を支払う場合があります。

また、当社及び一部の国内連結子会社の企業年金基金制度、退職一時金制度及び社内年金制度等において退職給付信託を設定しております。

なお、一部の海外連結子会社では確定給付型の制度及び確定拠出年金制度を設けております。

また、一部の連結子会社は、退職給付債務の算定にあたり、簡便法を採用しております。

2. 確定給付制度

(1) 退職給付債務の期首残高と期末残高の調整表 (簡便法を適用した制度を除く。)

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
退職給付債務の期首残高	315,441百万円	317,586百万円
勤務費用	14,449	14,582
利息費用	3,984	4,002
数理計算上の差異の発生額	△2,975	13,460
退職給付の支払額	△14,715	△16,484
その他	1,402	1,317
退職給付債務の期末残高	317,586	334,463

(2) 年金資産の期首残高と期末残高の調整表 (簡便法を適用した制度を除く。)

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
年金資産の期首残高	361,462百万円	399,643百万円
期待運用収益	3,750	7,764
数理計算上の差異の発生額	33,545	△9,494
事業主からの拠出額	10,618	12,838
退職給付の支払額	△10,232	△10,857
退職給付信託の返還	—	△31,674
その他	500	549
年金資産の期末残高	399,643	368,769

(3) 簡便法を適用した制度の、退職給付に係る負債 (又は資産) の期首残高と期末残高の調整表

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
退職給付に係る負債 (又は資産) の期首残高	1,835百万円	2,248百万円
退職給付費用	504	577
退職給付の支払額	△176	△140
制度への拠出額	△132	△93
その他	217	12
退職給付に係る負債 (又は資産) の期末残高	2,248	2,604

- (4) 退職給付債務及び年金資産の期末残高と連結貸借対照表に計上された退職給付に係る負債及び退職給付に係る資産の調整表

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
積立型制度の退職給付債務	285,264百万円	299,985百万円
年金資産	△401,361	△370,544
	△116,097	△70,559
非積立型制度の退職給付債務	36,288	38,857
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	△79,809	△31,702
退職給付に係る負債	54,661	55,867
退職給付に係る資産	△134,470	△87,569
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	△79,809	△31,702

(注) 簡便法を適用した制度を含みます。

- (5) 退職給付費用及びその内訳項目の金額

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
勤務費用	13,994百万円	14,116百万円
利息費用	3,984	4,002
期待運用収益	△3,750	△7,764
数理計算上の差異の費用処理額	△4,719	△7,043
過去勤務費用の費用処理額	271	1,559
簡便法で計算した退職給付費用	504	577
退職給付信託返還益	—	△8,905
その他	519	487
確定給付制度に係る退職給付費用	10,803	△2,971

(注) 1. 企業年金基金に対する従業員拠出額を「勤務費用」から控除しております。

2. 上記の退職給付費用以外に特別退職金を特別損失「事業構造改善費用」に、前連結会計年度2,121百万円、当連結会計年度465百万円計上しております。

- (6) 退職給付に係る調整額

退職給付に係る調整額（税効果控除前）の内訳は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
過去勤務費用	2,361百万円	△457百万円
数理計算上の差異	△31,458	38,476
合計	△29,097	38,019

- (7) 退職給付に係る調整累計額

退職給付に係る調整累計額に計上した項目（税効果控除前）の内訳は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
未認識過去勤務費用	2,324百万円	1,867百万円
未認識数理計算上の差異	△58,300	△19,826
合計	△55,976	△17,959

(8) 年金資産に関する事項

①年金資産の主な内訳

年金資産合計に対する主な分類ごとの比率は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
株式	48.5%	46.1%
債券	23.4	29.0
一般勘定	10.4	11.2
現金及び預金	5.3	1.9
その他	12.4	11.8
合計	100.0	100.0

(注) 年金資産合計には、企業年金制度に対して設定した退職給付信託が前連結会計年度46.7%、当連結会計年度40.8%含まれております。

②長期期待運用収益率の設定方法

年金資産の長期期待運用収益率を決定するため、現在及び予想される年金資産の配分と、年金資産を構成する多様な資産からの現在及び将来期待される長期の収益率を考慮しております。

(9) 数理計算上の計算基礎に関する事項

主要な数理計算上の計算基礎 (加重平均で表わしている。)

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
割引率	1.2%	0.9%
長期期待運用収益率	1.0	2.0

なお、当社及び一部の連結子会社はポイント制を採用しているため、退職給付債務の算定に際して予想昇給率を使用しておりません。

(注) 確定給付制度には、一部の連結子会社が加入している複数事業主による企業年金制度が含まれておりません。

3. 確定拠出制度及び前払退職金制度

当社及び連結子会社の確定拠出制度及び前払退職金制度の要支払額は、前連結会計年度5,486百万円、当連結会計年度5,783百万円であります。

(税効果会計関係)

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
繰延税金資産		
税務上の繰越欠損金(注)	47,285百万円	48,608百万円
固定資産	18,237	17,573
退職給付に係る負債	16,677	17,348
未払賞与	12,608	13,074
未実現利益	10,423	11,476
たな卸資産	9,683	10,458
外国税額控除	6,688	7,320
投資有価証券	2,855	3,326
未払事業税	1,677	1,367
貸倒引当金	1,274	899
その他	24,794	24,449
繰延税金資産小計	152,201	155,898
税務上の繰越欠損金に係る評価性引当額(注)	—	△41,524
将来減算一時差異等の合計に係る評価性引当額	—	△19,015
評価性引当額小計	△61,534	△60,539
繰延税金資産合計	90,667	95,359
繰延税金負債		
その他有価証券評価差額金	△38,557	△38,460
連結子会社等の留保利益金	△25,303	△26,645
退職給付に係る資産	△27,266	△18,748
在外連結子会社の減価償却費	△4,112	△6,185
全面時価評価法による評価差額	△4,999	△4,518
固定資産圧縮積立金	△940	△907
その他	△4,164	△3,204
繰延税金負債合計	△105,341	△98,667
繰延税金資産(負債)の純額	△14,674	△3,308

(注) 税務上の繰越欠損金及びその繰延税金資産の繰越期限別の金額

当連結会計年度(2019年3月31日)

	1年以内 (百万円)	1年超 2年以内 (百万円)	2年超 3年以内 (百万円)	3年超 4年以内 (百万円)	4年超 5年以内 (百万円)	5年超 (百万円)	合計 (百万円)
税務上の繰越欠 損金(*)	1,025	1,666	4,151	1,327	1,976	38,463	48,608
評価性引当額	△787	△1,275	△2,166	△1,268	△1,629	△34,399	△41,524
繰延税金資産	238	391	1,985	59	347	4,064	7,084

(*) 税務上の繰越欠損金は、法定実効税率を乗じた額であります。

(表示方法の変更)

前連結会計年度において、繰延税金資産の「その他」に含めておりました「外国税額控除」は、表示上の明瞭性を高めるため、当連結会計年度より独立掲記しております。この表示方法の変更を反映させるため、前連結会計年度の注記の組替えを行っております。

この結果、前連結会計年度において、繰延税金資産の「その他」に表示していた31,482百万円は、「外国税額控除」6,688百万円及び「その他」24,794百万円として組み替えております。

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主要な項目別の内訳

	前連結会計年度 (2018年3月31日)	当連結会計年度 (2019年3月31日)
法定実効税率 (調整)	30.8%	30.6%
持分法による投資利益	△4.4	△4.2
交際費の損金不算入額	0.2	0.2
受取配当金の益金不算入額	△0.1	△0.2
税額控除	△1.6	△2.4
在外連結子会社と日本の適用税率差異	△3.6	△2.1
評価性引当額の増減	0.6	△0.4
未実現利益	0.1	△0.3
連結子会社等の留保利益金の増減	1.1	0.7
のれんの償却	0.3	1.1
外国法人税	1.8	3.3
その他	2.4	1.9
税効果会計適用後の法人税等の負担率	27.6	28.2

(セグメント情報等)

【セグメント情報】

1. 報告セグメントの概要

当社の報告セグメントは、当社の構成単位のうち分離された財務情報が入手可能であり、最高意思決定機関である社長が、経営資源の配分の決定及び業績を評価するために、定期的に検討を行う対象となっているものであります。

当社は、製品の種類、製造方法、販売市場等の類似性を基礎とした事業本部制を採用しており、当社及び当社の関係会社における製品の開発、製造、販売、サービス等の事業を「自動車関連事業」「情報通信関連事業」「エレクトロニクス関連事業」「環境エネルギー関連事業」「産業素材関連事業他」の5事業部門に区分して包括的な戦略を立案し、事業活動を展開しております。したがって、当社は、「自動車関連事業」「情報通信関連事業」「エレクトロニクス関連事業」「環境エネルギー関連事業」「産業素材関連事業他」の5つを報告セグメントとしております。

各セグメントの主な事業に係る製品及びサービスは、以下のとおりであります。

- (1) 自動車関連事業……………ワイヤーハーネス、防振ゴム、自動車用ホース、自動車電装部品
- (2) 情報通信関連事業……………光ファイバ・ケーブル、通信用ケーブル・機器、光融着接続機、光データリンク・無線通信用デバイスなどの光・電子デバイス製品、アクセス系ネットワーク機器（GE-PON・セットトップボックス・CATV関連製品等）
- (3) エレクトロニクス関連事業……………電子ワイヤー、電子線照射製品、フレキシブルプリント回路、ふっ素樹脂製品
- (4) 環境エネルギー関連事業……………導電製品、送配電用電線・ケーブル・機器、巻線、空気ばね、受変電設備・制御システムなどの電力機器、ビーム・真空応用装置、電気・電力工事及びエンジニアリング、金属多孔体
- (5) 産業素材関連事業他……………PC鋼材、精密ばね用鋼線、スチールコード、超硬工具、ダイヤ・CBN工具、レーザ用光学部品、焼結部品、半導体放熱基板

2. 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産、負債その他の項目の金額の算定方法

報告されている事業セグメントの会計処理の方法は、「連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項」における記載と同一であります。

セグメント間の内部収益及び振替高は市場実勢価格に基づいております。

(表示方法の変更)に記載のとおり、「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」（企業会計基準第28号 平成30年2月16日）の適用により、表示方法の変更が遡及適用され、前連結会計年度については遡及適用後の数値となっております。

3. 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産、負債その他の項目の金額に関する情報

前連結会計年度（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）

(単位：百万円)

	自動車 関連事業	情報通信 関連事業	エレクトロ ニクス 関連事業	環境 エネルギー 関連事業	産業素材 関連事業他	合計	調整額 (注) 1	連結 財務諸表 計上額 (注) 2
売上高								
外部顧客への売上高	1,631,039	216,802	229,890	701,745	302,771	3,082,247	—	3,082,247
セグメント間の内部売上高 又は振替高	913	3,524	16,429	16,227	40,355	77,448	△77,448	—
計	1,631,952	220,326	246,319	717,972	343,126	3,159,695	△77,448	3,082,247
セグメント利益又は損失(△)	96,805	18,603	5,410	24,120	28,171	173,109	30	173,139
セグメント資産	1,353,642	283,705	180,735	632,762	618,580	3,069,424	△69,521	2,999,903
その他の項目								
減価償却費 (注) 3	75,540	14,956	17,905	16,539	21,158	146,098	—	146,098
のれんの償却額	1,235	—	14	46	910	2,205	—	2,205
持分法適用会社への投資額	201,937	39,271	651	6,256	53,441	301,556	—	301,556
有形固定資産及び無形固定資産 の増加額	83,550	30,904	11,273	26,899	29,589	182,215	—	182,215

(注) 1. 調整額は、以下のとおりであります。

(1) セグメント利益又は損失(△)の調整額30百万円は、主に未実現利益の消去であります。

(2) セグメント資産の調整額△69,521百万円は、主にセグメント間債権消去、当社の現金及び預金、投資有価証券であります。

2. セグメント利益又は損失(△)は、連結損益計算書の営業利益と調整を行っております。

3. 減価償却費には、長期前払費用の償却額を含んでおります。

当連結会計年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

（単位：百万円）

	自動車 関連事業	情報通信 関連事業	エレクトロ ニクス 関連事業	環境 エネルギー 関連事業	産業素材 関連事業他	合計	調整額 (注) 1	連結 財務諸表 計上額 (注) 2
売上高								
外部顧客への売上高	1,706,459	205,986	209,583	740,722	315,235	3,177,985	—	3,177,985
セグメント間の内部売上高 又は振替高	2,967	2,434	19,350	19,064	42,589	86,404	△86,404	—
計	1,709,426	208,420	228,933	759,786	357,824	3,264,389	△86,404	3,177,985
セグメント利益又は損失(△)	84,669	16,398	7,016	30,062	28,193	166,338	△78	166,260
セグメント資産	1,387,003	243,908	180,258	678,351	647,964	3,137,484	△84,221	3,053,263
その他の項目								
減価償却費 (注) 3	77,547	16,148	16,966	16,841	21,414	148,916	—	148,916
のれんの償却額	1,217	—	—	24	899	2,140	—	2,140
持分法適用会社への投資額	195,129	8,908	621	6,518	55,449	266,625	—	266,625
有形固定資産及び無形固定資産 の増加額	98,510	19,746	20,476	30,715	33,271	202,718	—	202,718

(注) 1. 調整額は、以下のとおりであります。

(1) セグメント利益又は損失(△)の調整額△78百万円は、主に未実現利益の消去であります。

(2) セグメント資産の調整額△84,221百万円は、主にセグメント間債権消去、当社の現金及び預金、投資有価証券であります。

2. セグメント利益又は損失(△)は、連結損益計算書の営業利益と調整を行っております。

3. 減価償却費には、長期前払費用の償却額を含んでおります。

【関連情報】

前連結会計年度（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）

1. 製品及びサービスごとの情報

（単位：百万円）

	ワイヤーハーネス	その他	合計
外部顧客への売上高	1,176,264	1,905,983	3,082,247

2. 地域ごとの情報

(1) 売上高

（単位：百万円）

日本	アジア		米州		欧州その他	合計
	中国	その他	米国	その他		
1,243,424	521,356	438,859	385,652	132,827	360,129	3,082,247

(注) 売上高は顧客の所在地を基礎とし、国又は地域に分類しております。

(2) 有形固定資産

（単位：百万円）

日本	アジア		米州	欧州その他	合計
	中国	その他			
442,575	87,225	153,964	84,741	77,329	845,834

3. 主要な顧客ごとの情報

外部顧客への売上高のうち、連結損益計算書の売上高の10%以上を占める相手先がないため、記載はありません。

当連結会計年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

1. 製品及びサービスごとの情報

(単位：百万円)

	ワイヤーハーネス	その他	合計
外部顧客への売上高	1,231,714	1,946,271	3,177,985

2. 地域ごとの情報

(1) 売上高

(単位：百万円)

日本	アジア		米州		欧州その他	合計
	中国	その他	米国	その他		
1,319,721	516,347	442,689	409,579	139,509	350,140	3,177,985

(注) 売上高は顧客の所在地を基礎とし、国又は地域に分類しております。

(2) 有形固定資産

(単位：百万円)

日本	アジア		米州	欧州その他	合計
	中国	その他			
461,606	85,660	162,219	91,171	85,167	885,823

3. 主要な顧客ごとの情報

外部顧客への売上高のうち、連結損益計算書の売上高の10%以上を占める相手先がないため、記載はありません。

【報告セグメントごとの固定資産の減損損失に関する情報】

前連結会計年度（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）

(単位：百万円)

	自動車 関連事業	情報通信 関連事業	エレクトロ ニクス 関連事業	環境 エネルギー 関連事業	産業素材 関連事業他	調整額	合計
減損損失	973	1,115	818	465	380	—	3,751

当連結会計年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

(単位：百万円)

	自動車 関連事業	情報通信 関連事業	エレクトロ ニクス 関連事業	環境 エネルギー 関連事業	産業素材 関連事業他	調整額	合計
減損損失	7,053	1,007	1,073	2,694	52	—	11,879

【報告セグメントごとののれんの償却額及び未償却残高に関する情報】

前連結会計年度（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）

(単位：百万円)

	自動車 関連事業	情報通信 関連事業	エレクトロ ニクス 関連事業	環境 エネルギー 関連事業	産業素材 関連事業他	合計
当期償却額	1,235	—	14	46	910	2,205
当期末残高	6,127	—	—	35	2,966	9,128

当連結会計年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

(単位：百万円)

	自動車 関連事業	情報通信 関連事業	エレクトロ ニクス 関連事業	環境 エネルギー 関連事業	産業素材 関連事業他	合計
当期償却額	1,217	—	—	24	899	2,140
当期末残高	280	—	—	11	2,197	2,488

【報告セグメントごとの負ののれん発生益に関する情報】

前連結会計年度（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）

該当事項はありません。

当連結会計年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

該当事項はありません。

【関連当事者情報】

1. 関連当事者との取引

前連結会計年度（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）

該当事項はありません。

当連結会計年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

連結財務諸表提出会社と関連当事者との取引

従業員のための企業年金等

種類	会社等の名称 又は氏名	所在地	資本金 又は 出資金 (百万円)	事業の 内容又は 職業	議決権等 の所有 (被所有) 割合 (%)	関連当事者 との関係	取引の 内容	取引金額 (百万円)	科目	期末残高 (百万円)
企業年金	退職給付 信託	—	—	—	—	退職給付会計 上の年金資産	資産の 一部返還	30,000	—	—

2. 親会社又は重要な関連会社に関する注記

重要な関連会社の要約財務情報

前連結会計年度（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）

重要な関連会社である住友ゴム工業㈱（決算日 2017年12月31日）の要約財務情報は以下のとおりであります。

流動資産合計	465,973百万円
非流動資産合計	552,293
流動負債合計	303,299
非流動負債合計	224,081
資本合計	490,886
売上収益	877,866
税引前利益	65,733
当期利益の帰属 親会社の所有者	46,979

当連結会計年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

重要な関連会社である住友ゴム工業㈱（決算日 2018年12月31日）の要約財務情報は以下のとおりであります。

流動資産合計	476,890百万円
非流動資産合計	525,493
流動負債合計	324,126
非流動負債合計	205,450
資本合計	472,807
売上収益	894,243
税引前利益	50,349
当期利益の帰属 親会社の所有者	36,246

(1株当たり情報)

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
1株当たり純資産額	1,973.95円	1,988.58円
1株当たり当期純利益	154.29円	151.38円
潜在株式調整後1株当たり当期純利益	152.88円	—

(注) 1株当たり当期純利益及び潜在株式調整後1株当たり当期純利益の算定上の基礎は、以下のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
1株当たり当期純利益		
親会社株主に帰属する当期純利益 (百万円)	120,328	118,063
普通株主に帰属しない金額(百万円)	—	—
普通株式に係る親会社株主に帰属する当期 純利益(百万円)	120,328	118,063
普通株式の期中平均株式数(千株)	779,888	779,897
潜在株式調整後1株当たり当期純利益		
親会社株主に帰属する当期純利益調整額 (百万円)	△1,101	—
(うち親会社の持分比率変動等によるもの(税 額相当額控除後)(百万円))	(△1,101)	(—)
(うち社債利息(税額相当額控除後) (百万円))	(△0)	(—)
普通株式増加数(千株)	2	—
(うち転換社債型新株予約権付社債 (千株))	(2)	(—)
希薄化効果を有しないため、潜在株式調整後1株 当たり当期純利益の算定に含めなかった潜在株式 の概要	—	—

(注) 当連結会計年度の潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。

(重要な後発事象)

当社は、2019年5月10日開催の取締役会において、当社の持分法適用関連会社である㈱テクノアソシエ（以下、対象者）につき、対象者を当社の連結子会社とすべく、対象者の普通株式を公開買付けにより取得することを決議いたしました。

1. 本公開買付けの目的

当社は、2018年5月に中期経営計画「22VISION」を公表いたしました。この中で、成長戦略の柱のひとつとして「イノベーションの創出」を掲げております。この実現に必要な要素として、開発提案型営業に定評のある対象者との更なる連携により、市場の創出や顧客基盤の開拓といったマーケティング機能が強化できるものと考えております。

また、①対象者が持つ広範な顧客ネットワークやグローバルな拠点網を活用した当社製品の拡販、②対象者のサプライヤーネットワークを通じた金属部品や樹脂加工部品などの有利調達、③両社の人材交流による営業人材の育成、④情報システムや経理・人事などのコーポレート部門でのリソースの共有化、といったシナジー効果も期待できるため、両社の企業価値向上の観点から当社の連結子会社とすることが望ましいと判断いたしました。

2. 対象者の概要

名称 株式会社テクノアソシエ

事業内容 鋸螺類、加工品、金属素材、電材品、化成品、産業機器、その他販売及び、これに付帯又は関連する事業

3. 本公開買付けの概要

(1) 本公開買付け前提条件

本公開買付けは、国内外の競争法に基づき必要な手続及び対応を終えること、対象者の取締役会が本公開買付けに賛同する旨の意見を行うことについて適法かつ有効に承認し、その旨の公表をしていること、及び対象者の財政状態に重大な悪影響を与える事由が生じていないことの各条件が充足された場合（又は当社がこれらの本公開買付け前提条件を放棄した場合）に実施いたします。

(2) 日程等

国内外の競争法に基づく必要な手続及び対応が完了する見込である2019年8月には本公開買付けを開始することを目指します。また、公開買付け期間は、原則として20営業日とする予定であります。

(3) 買付予定の株券等の数

買付予定数	2,734,100株
買付予定数の下限	一株
買付予定数の上限	2,734,100株

(注) 応募株券等の総数が買付予定数（2,734,100株）以下の場合は、応募株券等の全部の買付け等を行います。応募株券等の総数が買付予定数の上限（2,734,100株）を超える場合は、その超える部分の全部又は一部の買付け等を行わないものとし、金融商品取引法第27条の13第5項及び発行者以外の者による株券等の公開買付けの開示に関する内閣府令第32条に規定するあん分比例の方式により、株券等の買付け等に係る受渡しその他の決済を行います。

なお、当社が当社子会社を通じた間接所有分と合算して所有する対象者株式は合計6,761,126株（所有割合36.25%）であり、本公開買付けにより買付予定数の買付け等を行った後には9,495,226株（所有割合50.92%）となります。

(4) 買付け等の価格 普通株式1株につき、金1,380円

(5) 買付代金 3,773,058,000円（予定）

⑤【連結附属明細表】

【社債明細表】

会社名	銘柄	発行年月日	当期首残高 (百万円)	当期末残高 (百万円)	利率 (%)	担保	償還期限
住友電気工業(株)	第26回無担保社債	2017. 3. 1	20,000	20,000	0.30	無担保	2027. 3. 1
住友電気工業(株)	第27回無担保社債	2017. 3. 1	10,000	10,000	0.08	無担保	2022. 3. 1
住友理工(株)	第6回無担保社債	2013. 2. 28	9,977	9,982	0.936	無担保	2023. 2. 28
住友理工(株)	第7回無担保社債	2016. 9. 6	14,934	14,942	0.35	無担保	2026. 9. 4
住友理工(株)	第8回無担保社債	2016. 9. 6	4,968	4,971	0.63	無担保	2031. 9. 5
住友理工(株)	第9回無担保社債	2017. 9. 21	14,926	14,933	0.455	無担保	2027. 9. 21
合計		—	74,805	74,828	—	—	—

(注) 連結決算日後5年内における償還予定額は以下のとおりであります。

1年以内 (百万円)	1年超2年以内 (百万円)	2年超3年以内 (百万円)	3年超4年以内 (百万円)	4年超5年以内 (百万円)
—	—	10,000	10,000	—

【借入金等明細表】

区分	当期首残高 (百万円)	当期末残高 (百万円)	平均利率 (%)	返済期限
短期借入金	136,648	187,432	2.07	—
1年以内に返済予定の長期借入金	50,283	61,151	0.74	—
1年以内に返済予定のリース債務	1,089	1,095	—	—
長期借入金 (1年以内に返済予定のものを除く。)	226,627	213,330	0.41	2020年 ～2029年
リース債務 (1年以内に返済予定のものを除く。)	3,115	2,909	—	2020年 ～2047年
その他有利子負債	—	—	—	—
合計	417,762	465,917	—	—

(注) 1. 平均利率については、期末借入金残高に対する加重平均利率を記載しております。

2. リース債務の平均利率については、リース料総額に含まれる利息相当額を控除する前の金額でリース債務を連結貸借対照表に計上しているため、記載しておりません。

3. 長期借入金及びリース債務(1年以内に返済予定のものを除く。)の連結決算日後5年内における返済予定額は以下のとおりであります。

区分	1年超2年以内 (百万円)	2年超3年以内 (百万円)	3年超4年以内 (百万円)	4年超5年以内 (百万円)
長期借入金	50,979	46,619	43,039	35,203
リース債務	359	267	167	142

【資産除去債務明細表】

当連結会計年度期首及び当連結会計年度末における資産除去債務の金額が、当連結会計年度期首及び当連結会計年度末における負債及び純資産の合計額の100分の1以下であるため、連結財務諸表規則第92条の2の規定により記載を省略しております。

(2) 【その他】

当連結会計年度における四半期情報等

(累計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	当連結会計年度
売上高(百万円)	758,688	1,528,360	2,345,215	3,177,985
税金等調整前四半期(当期) 純利益(百万円)	36,049	72,404	126,248	181,388
親会社株主に帰属する四半期 (当期)純利益(百万円)	20,865	47,987	81,193	118,063
1株当たり四半期(当期) 純利益(円)	26.75	61.53	104.11	151.38

(会計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	第4四半期
1株当たり四半期純利益(円)	26.75	34.78	42.58	47.28

2 【財務諸表等】

(1) 【財務諸表】

① 【貸借対照表】

(単位：百万円)

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	19,314	7,133
受取手形	※1 19,077	※1 19,569
売掛金	※1 261,278	※1 284,113
たな卸資産	※2 22,210	※2 29,199
短期貸付金	※1 196,336	※1 207,127
その他	※1 75,049	※1 84,450
貸倒引当金	△2,201	△61
流動資産合計	591,062	631,529
固定資産		
有形固定資産		
建物	48,459	52,585
構築物	6,739	7,175
機械及び装置	21,052	21,771
土地	16,803	16,902
建設仮勘定	6,502	6,234
その他	9,934	10,038
有形固定資産合計	109,490	114,706
無形固定資産		
ソフトウェア	5,281	5,624
その他	112	103
無形固定資産合計	5,393	5,727
投資その他の資産		
投資有価証券	82,912	101,848
関係会社株式	417,752	429,788
長期貸付金	※1 29,184	※1 23,649
その他	※1 57,305	※1 47,162
貸倒引当金	△52	△184
投資損失引当金	△4,112	△3,197
投資その他の資産合計	582,989	599,065
固定資産合計	697,873	719,498
資産合計	1,288,934	1,351,028

(単位：百万円)

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
負債の部		
流動負債		
支払手形	725	708
買掛金	※1 169,780	※1 185,821
短期借入金	※1 148,112	※1 143,813
未払金	※1 16,774	※1 21,393
未払費用	※1 23,242	※1 24,179
その他	※1 11,222	※1 10,022
流動負債合計	369,856	385,936
固定負債		
社債	30,000	30,000
長期借入金	140,832	137,081
繰延税金負債	3,115	8,661
債務保証損失引当金	2,981	3,302
その他	2,986	3,020
固定負債合計	179,914	182,064
負債合計	549,769	568,000
純資産の部		
株主資本		
資本金	99,737	99,737
資本剰余金		
資本準備金	177,659	177,659
その他資本剰余金	24	24
資本剰余金合計	177,683	177,683
利益剰余金		
利益準備金	18,329	18,329
その他利益剰余金		
別途積立金	345,441	365,441
繰越利益剰余金	80,872	93,795
利益剰余金合計	444,641	477,565
自己株式	△20,577	△20,580
株主資本合計	701,485	734,405
評価・換算差額等		
その他有価証券評価差額金	37,700	48,606
繰延ヘッジ損益	△19	18
評価・換算差額等合計	37,680	48,623
純資産合計	739,165	783,028
負債純資産合計	1,288,934	1,351,028

②【損益計算書】

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当事業年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
売上高	※1 1,084,165	※1 1,142,621
売上原価	※1 998,994	※1 1,046,241
売上総利益	85,171	96,380
販売費及び一般管理費	※1, 2 72,457	※1, 2 79,459
営業利益	12,714	16,921
営業外収益		
受取利息及び受取配当金	※1 54,204	※1 51,835
その他	※1 4,449	※1 2,999
営業外収益合計	58,653	54,834
営業外費用		
支払利息	※1 1,537	※1 1,459
その他	※1 4,307	※1 4,449
営業外費用合計	5,844	5,908
経常利益	65,523	65,847
特別利益		
投資有価証券売却益	—	※3 2,909
退職給付信託返還益	—	8,461
特別利益合計	—	11,370
特別損失		
固定資産除却損	1,632	1,015
減損損失	1,327	—
事業構造改善費用	618	—
特別損失合計	3,577	1,015
税引前当期純利益	61,945	76,202
法人税、住民税及び事業税	△722	4,347
法人税等調整額	1,310	707
法人税等合計	589	5,054
当期純利益	61,357	71,147

③【株主資本等変動計算書】

前事業年度（自 2017年4月1日 至 2018年3月31日）

（単位：百万円）

	株主資本							
	資本金	資本剰余金			利益準備金	その他利益剰余金		利益剰余金合計
		資本準備金	その他 資本剰余金	資本剰余金 合計		別途積立金	繰越利益 剰余金	
当期首残高	99,737	177,659	24	177,683	18,329	345,441	53,839	417,609
当期変動額								
剰余金の配当							△34,324	△34,324
当期純利益							61,357	61,357
自己株式の取得								
自己株式の処分			0	0				
別途積立金の積立								—
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）								
当期変動額合計	—	—	0	0	—	—	27,033	27,033
当期末残高	99,737	177,659	24	177,683	18,329	345,441	80,872	444,641

	株主資本		評価・換算差額等			純資産合計
	自己株式	株主資本合計	その他有価証券 評価差額金	繰延ヘッジ損益	評価・換算差額等 合計	
当期首残高	△20,573	674,456	32,821	△172	32,649	707,105
当期変動額						
剰余金の配当		△34,324				△34,324
当期純利益		61,357				61,357
自己株式の取得	△4	△4				△4
自己株式の処分	0	0				0
別途積立金の積立		—				—
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）			4,879	153	5,031	5,031
当期変動額合計	△4	27,029	4,879	153	5,031	32,060
当期末残高	△20,577	701,485	37,700	△19	37,680	739,165

当事業年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

（単位：百万円）

	株主資本							利益剰余金 合計
	資本金	資本剰余金			利益準備金	その他利益剰余金		
		資本準備金	その他 資本剰余金	資本剰余金 合計		別途積立金	繰越利益 剰余金	
当期首残高	99,737	177,659	24	177,683	18,329	345,441	80,872	444,641
当期変動額								
剰余金の配当							△38,224	△38,224
当期純利益							71,147	71,147
自己株式の取得								
自己株式の処分			△0	△0				
別途積立金の積立						20,000	△20,000	—
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）								
当期変動額合計	—	—	△0	△0	—	20,000	12,923	32,923
当期末残高	99,737	177,659	24	177,683	18,329	365,441	93,795	477,565

	株主資本		評価・換算差額等			純資産合計
	自己株式	株主資本合計	その他有価証券 評価差額金	繰延ヘッジ損益	評価・換算差額等 合計	
当期首残高	△20,577	701,485	37,700	△19	37,680	739,165
当期変動額						
剰余金の配当		△38,224				△38,224
当期純利益		71,147				71,147
自己株式の取得	△3	△3				△3
自己株式の処分	0	0				0
別途積立金の積立		—				—
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）			10,906	37	10,943	10,943
当期変動額合計	△3	32,920	10,906	37	10,943	43,863
当期末残高	△20,580	734,405	48,606	18	48,623	783,028

【注記事項】

(重要な会計方針)

1. 資産の評価基準及び評価方法

(1) 有価証券の評価基準及び評価方法

①子会社株式及び関連会社株式

移動平均法による原価法を採用しております。

②その他有価証券

時価のあるもの

決算日の市場価格等に基づく時価法（評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定）を採用しております。

時価のないもの

移動平均法による原価法を採用しております。

(2) デリバティブの評価基準及び評価方法

時価法を採用しております。

(3) たな卸資産の評価基準及び評価方法

主として総平均法による原価法（貸借対照表価額については収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定）を採用しております。

2. 固定資産の減価償却の方法

有形固定資産

定額法を採用しております。

3. 引当金の計上基準

(1) 貸倒引当金

債権の貸倒による損失に備えるため、一般債権については、貸倒実績率により算定した額を、貸倒懸念債権については、担保処分等による回収見込額を控除した残額のうち債務者の財政状況等を考慮して算定した額を、破産更生債権等については、担保処分等による回収見込額を控除した残額をそれぞれ貸倒見積額として計上しております。

(2) 退職給付引当金

従業員の退職給付に備えるため、当事業年度末における退職給付債務及び年金資産の見込額に基づき計上しております。

①退職給付見込額の期間帰属方法

退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当事業年度末までの期間に帰属させる方法については、給付算定式基準によっております。

②数理計算上の差異の費用処理方法

数理計算上の差異は、各事業年度の発生時における従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数（14年）による定額法により按分した額をそれぞれ発生翌事業年度から費用処理することとしております。

(3) 投資損失引当金

子会社等に対する投資に係る損失に備えるため、当該会社の財政状態等を勘案して必要額を計上しております。

(4) 債務保証損失引当金

子会社等の借入等に対して差入れを行っている保証債務等の履行によって生ずる損失に備えるため、当該会社等の財政状態等を勘案して個別に算定した損失見込額を計上しております。

4. その他財務諸表作成のための基本となる重要な事項

(1) 退職給付に係る会計処理

退職給付に係る未認識数理計算上の差異の未処理額の会計処理の方法は、連結財務諸表における会計処理の方法と異なっております。

(2) 消費税等の会計処理

消費税及び地方消費税の会計処理は、税抜方式によっております。

(3) 連結納税制度の適用

連結納税制度を適用しております。

(表示方法の変更)

(「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」の適用に伴う変更)

「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」(企業会計基準第28号 平成30年2月16日。以下「税効果会計基準一部改正」という。)を当事業年度の期首から適用しており、繰延税金資産は投資その他の資産の区分に表示し、繰延税金負債は固定負債の区分に表示する方法に変更しました。

この結果、前事業年度の貸借対照表において、「流動資産」の「繰延税金資産」8,717百万円は、「固定負債」の「繰延税金負債」11,832百万円と相殺し、「固定負債」の「繰延税金負債」3,115百万円に組み替えており、変更を行う前と比べて資産合計と負債合計はそれぞれ8,717百万円減少しております。

(貸借対照表関係)

※1 関係会社に対する金銭債権及び金銭債務 (区分表示したものを除く)

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
短期金銭債権	422,725百万円	436,596百万円
短期金銭債務	258,588	249,322
長期金銭債権	29,081	23,572

※2 たな卸資産の内訳

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
製品	1,739百万円	1,973百万円
仕掛品	16,794	23,198
原材料及び貯蔵品	3,677	4,028

3 保証債務

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
保証	21,357百万円	24,712百万円
保証予約	26,946	17,244
経営指導念書	146,656	194,939
計	194,959	236,895

4 その他

前事業年度(2018年3月31日)

自動車関連事業分野の競争法違反行為について、一部の自動車メーカーと損害賠償に関する交渉を行っております。

当事業年度(2019年3月31日)

自動車関連事業分野の競争法違反行為について、一部の自動車メーカーと損害賠償に関する交渉を行っております。

(損益計算書関係)

※1 関係会社との取引高

	前事業年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当事業年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
営業取引による取引高		
売上高	557,712百万円	580,251百万円
仕入高	634,795	673,733
営業取引以外の取引高	134,103	136,514

※2 販売費に属する費用のおおよその割合は前事業年度15%、当事業年度15%、一般管理費に属する費用のおおよその割合は前事業年度85%、当事業年度85%であります。

販売費及び一般管理費のうち主要な費目及び金額は次のとおりであります。

	前事業年度 (自 2017年4月1日 至 2018年3月31日)	当事業年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)
給料手当及び福利費	18,061百万円	19,224百万円
研究開発費	32,437	33,695
業務委託料	6,801	8,384
控除額	△15,213	△14,960

控除額に含まれる主なものは、関係会社からの経営指導料（前事業年度△12,544百万円、当事業年度△12,326百万円）であります。

※3 投資有価証券売却益

当事業年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

関係会社株式売却益2,891百万円が含まれております。

(有価証券関係)

子会社株式及び関連会社株式

前事業年度（2018年3月31日）

区分	貸借対照表計上額 (百万円)	時価 (百万円)	差額 (百万円)
子会社株式	41,596	150,350	108,754
関連会社株式	25,933	184,475	158,542
合計	67,529	334,825	267,296

当事業年度（2019年3月31日）

区分	貸借対照表計上額 (百万円)	時価 (百万円)	差額 (百万円)
子会社株式	41,596	139,774	98,178
関連会社株式	22,565	107,831	85,266
合計	64,161	247,605	183,444

(注) 時価を把握することが極めて困難と認められる子会社株式及び関連会社株式の貸借対照表計上額

(単位：百万円)

区分	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
子会社株式	333,984	350,685
関連会社株式	16,239	14,941

これらについては、市場価格がなく、かつ将来キャッシュ・フローを見積ることなどができず、時価を把握することが極めて困難と認められることから、上表の「子会社株式及び関連会社株式」には含めておりません。

(税効果会計関係)

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
繰延税金資産		
投資有価証券	17,320百万円	18,253百万円
固定資産	4,981	4,443
たな卸資産	2,310	2,416
未払賞与	2,122	2,352
繰越欠損金	3,310	2,123
外国税額控除	2,258	1,670
債務保証損失引当金	912	1,010
投資損失引当金	1,258	978
その他	5,095	4,531
繰延税金資産小計	39,566	37,776
評価性引当額	△24,977	△22,075
繰延税金資産合計	14,589	15,701
繰延税金負債		
その他有価証券評価差額金	△16,036	△20,958
退職給付引当金	△1,567	△3,310
その他	△101	△94
繰延税金負債合計	△17,704	△24,362
繰延税金資産(負債)の純額	△3,115	△8,661

(表示方法の変更)

前事業年度において、繰延税金資産の「その他」に含めておりました「債務保証損失引当金」は、重要性が増したため、当事業年度より独立掲記しております。この表示方法の変更を反映させるため、前事業年度の注記の組替えを行っております。

この結果、前事業年度において、繰延税金資産の「その他」に表示していた6,007百万円は、「債務保証損失引当金」912百万円及び「その他」5,095百万円として組み替えております。

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主要な項目別の内訳

	前事業年度 (2018年3月31日)	当事業年度 (2019年3月31日)
法定実効税率	30.8%	30.6%
(調整)		
交際費の損金不算入額	0.2	0.2
受取配当金の益金不算入額	△24.2	△18.4
評価性引当額の増減	△7.0	△4.0
試験研究費の税額控除	△1.8	△2.2
外国法人税	1.7	1.4
その他	1.3	△1.0
税効果会計適用後の法人税等の負担率	1.0	6.6

(表示方法の変更)

前事業年度において、「その他」に含めておりました「試験研究費の税額控除」は、重要性が増したため、当事業年度より独立掲記しております。この表示方法の変更を反映させるため、前事業年度の注記の組替えを行っております。

この結果、前事業年度において、「その他」として表示しておりました△0.5%は、「試験研究費の税額控除」△1.8%及び「その他」1.3%として組み替えております。

(重要な後発事象)

当社は、2019年5月10日開催の取締役会において、当社の持分法適用関連会社である(株)テクノアソシエにつき、同社を当社の連結子会社とすべく、同社の普通株式を公開買付けにより取得することを決議いたしました。詳細は連結財務諸表「注記事項(重要な後発事象)」をご参照下さい。

④【附属明細表】

【有形固定資産等明細表】

(単位：百万円)

区分	資産の種類	当期首残高	当期増加額	当期減少額	当期償却額	当期末残高	減価償却累計額
有形固定資産	建物	48,459	7,770	175 (17)	3,469	52,585	94,480
	構築物	6,739	1,031	67 (3)	528	7,175	18,244
	機械及び装置	21,052	6,430	144 (48)	5,567	21,771	87,832
	土地	16,803	165	66 (-)	-	16,902	-
	建設仮勘定	6,502	21,743	22,011 (9)	-	6,234	-
	その他	9,934	3,133	189 (99)	2,840	10,038	26,104
	計	109,490	40,271	22,652 (175)	12,404	114,706	226,659
無形固定資産	ソフトウェア	5,281	4,691	2,519 (-)	1,829	5,624	7,380
	その他	112	5	- (-)	14	103	84
	計	5,393	4,695	2,519 (-)	1,843	5,727	7,464

(注) 1. 「当期減少額」欄の()内は内書きで、減損損失の計上額であります。

2. 当期増減額の主要なものは次のとおりであります。

建設仮勘定の増加額：研究開発設備 4,617百万円

【引当金明細表】

(単位：百万円)

科目	当期首残高	当期増加額	当期減少額	当期末残高
貸倒引当金	2,253	197	2,205	245
投資損失引当金	4,112	-	915	3,197
債務保証損失引当金	2,981	704	383	3,302

(2) 【主な資産及び負債の内容】

連結財務諸表を作成しているため、記載を省略しております。

(3) 【その他】

該当事項はありません。

第6【提出会社の株式事務の概要】

事業年度	4月1日から翌年3月31日まで
定時株主総会	6月中
基準日	3月31日
剰余金の配当の基準日	期末配当 3月31日 中間配当 9月30日
1単元の株式数	100株
単元未満株式の 買取り及び買増し（注）	
取扱場所	（特別口座） 大阪市中央区北浜四丁目5番33号 三井住友信託銀行株式会社 証券代行部
株主名簿管理人	（特別口座） 東京都千代田区丸の内一丁目4番1号 三井住友信託銀行株式会社
取次所	—
買取及び買増手数料	無料
公告掲載方法	電子公告により行います。但し、事故その他のやむを得ない事由により 電子公告による公告をすることができないときは、日本経済新聞に 掲載して行います。 公告掲載URL https://sei.co.jp/
株主に対する特典	なし

（注）単元未満株式の買取り・買増しを含む株式の取扱いは、原則として、証券会社等の口座管理機関を経由して行うこととなっておりますが、特別口座に記録されている株式については、特別口座の口座管理機関である三井住友信託銀行株式会社が直接取り扱っております。

第7【提出会社の参考情報】

1【提出会社の親会社等の情報】

当社は、金融商品取引法第24条の7第1項に規定する親会社等はありません。

2【その他の参考情報】

当事業年度の開始日から有価証券報告書提出日までの間に、次の書類を提出しております。

(1) 有価証券報告書及びその添付書類並びに確認書

[事業年度(第148期)自 2017年4月1日 至 2018年3月31日]

2018年6月27日 関東財務局長に提出

(2) 内部統制報告書及びその添付書類

[事業年度(第148期)自 2017年4月1日 至 2018年3月31日]

2018年6月27日 関東財務局長に提出

(3) 四半期報告書及び確認書

[(第149期第1四半期) 自 2018年4月1日 至 2018年6月30日]

2018年8月2日 関東財務局長に提出

[(第149期第2四半期) 自 2018年7月1日 至 2018年9月30日]

2018年11月5日 関東財務局長に提出

[(第149期第3四半期) 自 2018年10月1日 至 2018年12月31日]

2019年2月6日 関東財務局長に提出

(4) 臨時報告書

2018年6月29日 関東財務局長に提出

企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第9号の2(議決権行使結果)の規定に基づく臨時報告書であります。

(5) 訂正発行登録書(普通社債)

2018年6月29日 関東財務局長に提出

第二部【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項はありません。

独立監査人の監査報告書及び内部統制監査報告書

2019年6月21日

住友電気工業株式会社

取締役会 御中

有限責任 あずさ監査法人

指定有限責任社員 業務執行社員	公認会計士	谷 尋史	印
指定有限責任社員 業務執行社員	公認会計士	前田俊之	印
指定有限責任社員 業務執行社員	公認会計士	松本光弘	印

<財務諸表監査>

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている住友電気工業株式会社の2018年4月1日から2019年3月31日までの連結会計年度の連結財務諸表、すなわち、連結貸借対照表、連結損益計算書、連結包括利益計算書、連結株主資本等変動計算書、連結キャッシュ・フロー計算書、連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項、その他の注記及び連結附属明細表について監査を行った。

連結財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して連結財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない連結財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から連結財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に連結財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、連結財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による連結財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、連結財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての連結財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、上記の連結財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、住友電気工業株式会社及び連結子会社の2019年3月31日現在の財政状態並びに同日をもって終了する連結会計年度の経営成績及びキャッシュ・フローの状況をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

<内部統制監査>

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第2項の規定に基づく監査証明を行うため、住友電気工業株式会社の2019年3月31日現在の内部統制報告書について監査を行った。

内部統制報告書に対する経営者の責任

経営者の責任は、財務報告に係る内部統制を整備及び運用し、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して内部統制報告書を作成し適正に表示することにある。

なお、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性がある。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した内部統制監査に基づいて、独立の立場から内部統制報告書に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に準拠して内部統制監査を行った。財務報告に係る内部統制の監査の基準は、当監査法人に内部統制報告書に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき内部統制監査を実施することを求めている。

内部統制監査においては、内部統制報告書における財務報告に係る内部統制の評価結果について監査証拠を入手するための手続が実施される。内部統制監査の監査手続は、当監査法人の判断により、財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性に基づいて選択及び適用される。また、内部統制監査には、財務報告に係る内部統制の評価範囲、評価手続及び評価結果について経営者が行った記載を含め、全体としての内部統制報告書の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、住友電気工業株式会社が2019年3月31日現在の財務報告に係る内部統制は有効であると表示した上記の内部統制報告書が、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して、財務報告に係る内部統制の評価結果について、すべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

(注) 1. 上記は監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社が別途保管しております。

2. XBR Lデータは監査の対象には含まれていません。

独立監査人の監査報告書

2019年6月21日

住友電気工業株式会社
取締役会 御中

有限責任 あずさ監査法人

指定有限責任社員 業務執行社員	公認会計士	谷 尋史	印
指定有限責任社員 業務執行社員	公認会計士	前田俊之	印
指定有限責任社員 業務執行社員	公認会計士	松本光弘	印

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている住友電気工業株式会社の2018年4月1日から2019年3月31日までの第149期事業年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書、重要な会計方針、その他の注記及び附属明細表について監査を行った。

財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、上記の財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、住友電気工業株式会社の2019年3月31日現在の財政状態及び同日をもって終了する事業年度の経営成績をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以上

-
- (注) 1. 上記は監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社が別途保管しております。
2. XBR Lデータは監査の対象には含まれていません。

【表紙】

【提出書類】	内部統制報告書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条の4の4第1項
【提出先】	関東財務局長
【提出日】	2019年6月21日
【会社名】	住友電気工業株式会社
【英訳名】	Sumitomo Electric Industries, Ltd.
【代表者の役職氏名】	社長 井上 治
【最高財務責任者の役職氏名】	該当事項はありません。
【本店の所在の場所】	大阪府中央区北浜四丁目5番33号（住友ビル）
【縦覧に供する場所】	株式会社東京証券取引所 （東京都中央区日本橋兜町2番1号） 株式会社名古屋証券取引所 （名古屋市中区栄三丁目8番20号） 証券会員制法人福岡証券取引所 （福岡市中央区天神二丁目14番2号）

1 【財務報告に係る内部統制の基本的枠組みに関する事項】

社長井上治は、当社の財務報告に係る内部統制を整備及び運用する責任を有しており、企業会計審議会の公表した「財務報告に係る内部統制の評価及び監査の基準並びに財務報告に係る内部統制の評価及び監査に関する実施基準の設定について（意見書）」に示されている内部統制の基本的枠組みに準拠して財務報告に係る内部統制を整備及び運用しています。

なお、内部統制は、内部統制の各基本的要素が有機的に結びつき、一体となって機能することで、その目的を合理的な範囲で達成しようとするものであります。このため、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性があります。

2 【評価の範囲、基準日及び評価手続に関する事項】

財務報告に係る内部統制の評価は、当事業年度の末日である2019年3月31日を基準日として行われており、評価に当たっては、一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠しました。

本評価においては、連結ベースでの財務報告全体に重要な影響を及ぼす内部統制（全社的な内部統制）の評価を行った上で、その結果を踏まえて、評価対象とする業務プロセスを選定しています。当該業務プロセスの評価においては、選定された業務プロセスを分析した上で、財務報告の信頼性に重要な影響を及ぼす統制上の要点を識別し、当該統制上の要点について整備及び運用状況を評価することによって、内部統制の有効性に関する評価を行いました。

財務報告に係る内部統制の評価の範囲は、当社並びに連結子会社及び持分法適用会社について、当社の財務報告の信頼性に及ぼす金額的及び質的影響の重要性の観点から必要な範囲を決定し、僅少なものを除いた全ての連結子会社及び持分法適用会社を対象として行いました全社的な内部統制の評価結果を踏まえ、業務プロセスに係る内部統制の評価範囲を合理的に決定しました。

業務プロセスに係る内部統制の評価範囲については、原則、各事業拠点の前連結会計年度の売上高（連結会社間取引消去後）の金額が高い事業拠点から合算していき、前連結会計年度の連結売上高の概ね2/3に達している事業拠点を「重要な事業拠点」としました。選定した重要な事業拠点においては、企業の事業目的に大きく関わる勘定科目として売上高、売掛金及びたな卸資産に至る業務プロセスを評価の対象としました。さらに、選定した重要な事業拠点にかかわらず、それ以外の事業拠点も含めた範囲について、重要な虚偽記載の発生可能性が高く、見積りや予測を伴う重要な勘定科目に係る業務プロセスやリスクが大きい取引を行っている事業又は業務に係る業務プロセスを、財務報告への影響を勘案して重要性の大きい業務プロセスとして評価対象に追加しています。

3 【評価結果に関する事項】

上記の評価の結果、当事業年度末日時点において、当社の財務報告に係る内部統制は有効であると判断いたしました。

4 【付記事項】

付記すべき事項はありません。

5 【特記事項】

特記すべき事項はありません。